

第2章 京都大学総合人間学部構内A R25区の発掘調査

伊藤淳史

1 調査の概要

今回の調査地点は、吉田山西麓の、京都大学総合人間学部構内北東端に位置し、1989年に火災で焼失した尚賢館の跡地にあたる（図版1-238）。この地に、人間環境学研究科校舎新営にともなう共同溝敷設と総合人間学部校舎の新営が計画されたため、双方の予定地全面の2092㎡を、1995年10月18日から1996年5月17日にかけて発掘調査した。なお、工事進行の都合上、調査対象地を北・南・東の3つに区分し、北および東調査区の発掘を先に実施して埋め戻した後、隣接する南調査区を調査した。また、期間中に西側の管路掘削にともなう立合調査を並行しておこない、遺物包含層の良好な遺存を確認した（図1）。

これまで周辺では、東北東100mの75地点で奈良時代の竪穴住居跡や中世の木棺墓が、また南方100mの14・167地点でも中・近世の溝群などが確認されており、今回もこうした時代の遺跡のひろがりが見込まれた。しかし、調査の結果はきわめて多岐にわたり、弥生時代前期の土器棺墓の可能性が高い遺構、奈良時代の土器溜や小溝、平安時代の溝群、鎌倉～室町時代の大溝・井戸・砂取穴、近世の柵列や野壺群など、各時期の遺構と整理箱147箱におよぶ遺物の出土をみた。調査地一帯が、先史時代以来大学設置にいたるまでの長期にわたり積極的に利用されつづけた空間であることがあらためて明らかとなったといえよう。とりわけ、直角に近いコーナー部分をもつ中世後半期の大溝の発見は特筆される。

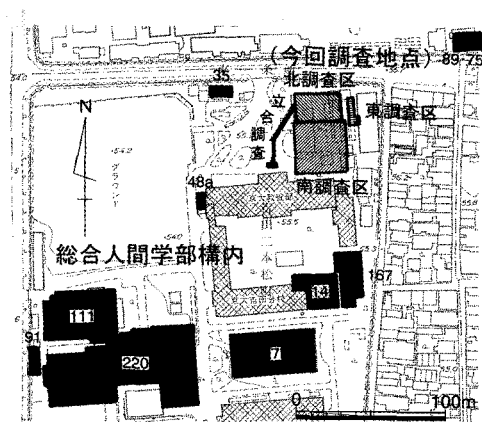


図1 調査地点の位置 縮尺1/5000

なお、発掘調査は伊藤淳史と古賀秀策が担当し、整理作業は、主として古代～中世の土器類を古賀が、それ以外を伊藤が分担しておこなった。発掘と整理を通じて、中田敬子・小沼ゆかり・安見昌幸・大岡由記子・長尾玲・菅野類・土井明子が補助した。本章は、その結果にもとづき伊藤がまとめた。

2 層 位

調査前の地表面はほぼ全域が平坦で、56.2m前後をはかる。ただし、近世以前には、北から南および東から西へ下る大きな段差が存在し、さらに、調査区東南辺一帯には奈良時代以前の包含層がひろがるなど、堆積は一様ではない。したがってここでは、南北方向を調査区西壁の層位であらわし（図2）、東西方向についてはX=1500ラインに沿って設けた東西畦の南壁と、その約30m南方の調査区南壁の2ヶ所の層位を示す（図3・4）。

調査区の基本層序は、上から表土・攪乱（第1層）、灰褐色土（第2層）、茶褐色土（第3層）、黒褐色土（第4層）、黄褐色砂（第5層）、白色砂Ⅰ（第6層）、赤褐色土（第7層）、黄褐色粘質土（第8層）、黄白色砂質土（第9層）、白色砂Ⅱ（第10層）、である。そして、茶褐色土以下の層を掘り込んで、X=1514とY=2262ライン付近に、北から南および東から西へ下る段差が造出されており、その崖面堆積層を斜面堆積層（a～f層）、段差内に堆積して面的にひろがる層を段差内堆積層（g～m層）とした。

基本層序のうち、灰褐色土は、19世紀代を中心とする陶磁器類や土製品を多量に含む層。明治10年代までの貨幣を含み、段差内に厚く均質に埋積している灰褐色土Ⅰ（2a層）と、段差より外側の高地に堆積し、堅く締まっているが層厚に乏しい灰褐色土Ⅱ（2b層）に細分する。明治30（1897）年に、第三高等中学校の現総合人間学部構内への移転に際して地均し工事が実施されており、その際の埋め立て土が灰褐色土Ⅰ、削平の対象となったのが灰褐色土Ⅱ、と理解できる。

茶褐色土（3a層）は、調査区北半を中心に薄く堆積し、10～14世紀代までの遺物を含む。そして、下層に向かって漸移的に色調が薄くなり、無遺物の淡茶褐色土（3b層）となる。さらにその下層が、調査区全域の基盤層となっている厚い黄褐色砂層（5層）である。ただし、調査区東南辺では、茶褐色土や淡茶褐色土はみられず、縄文晩期中葉～8世紀代までの遺物を含む黒褐色土（4a層）が堆積している。この層も、下半は漸移的に色調が薄くなり遺物の包含も稀となるため、淡黒褐色土（4b層）として区別した。

白色砂Ⅰ（6層）は、白色の粗砂層で、北調査区から東調査区にかけて黄褐色砂層に入り込むように厚く堆積する。白川系の流路にともなうものだろう。その下層の赤褐色土（7層）は、地点や層の上下で粘性や色調の濃淡に違いが見られるものの、ほぼ調査区全域に安定して堆積している。X=1500付近より南側では、これより下層にさらに黄褐色粘質土（8層）や黄白色砂質土（9層）の堆積を認めた後、白色砂Ⅱ（10層）に達する。こ

層 位

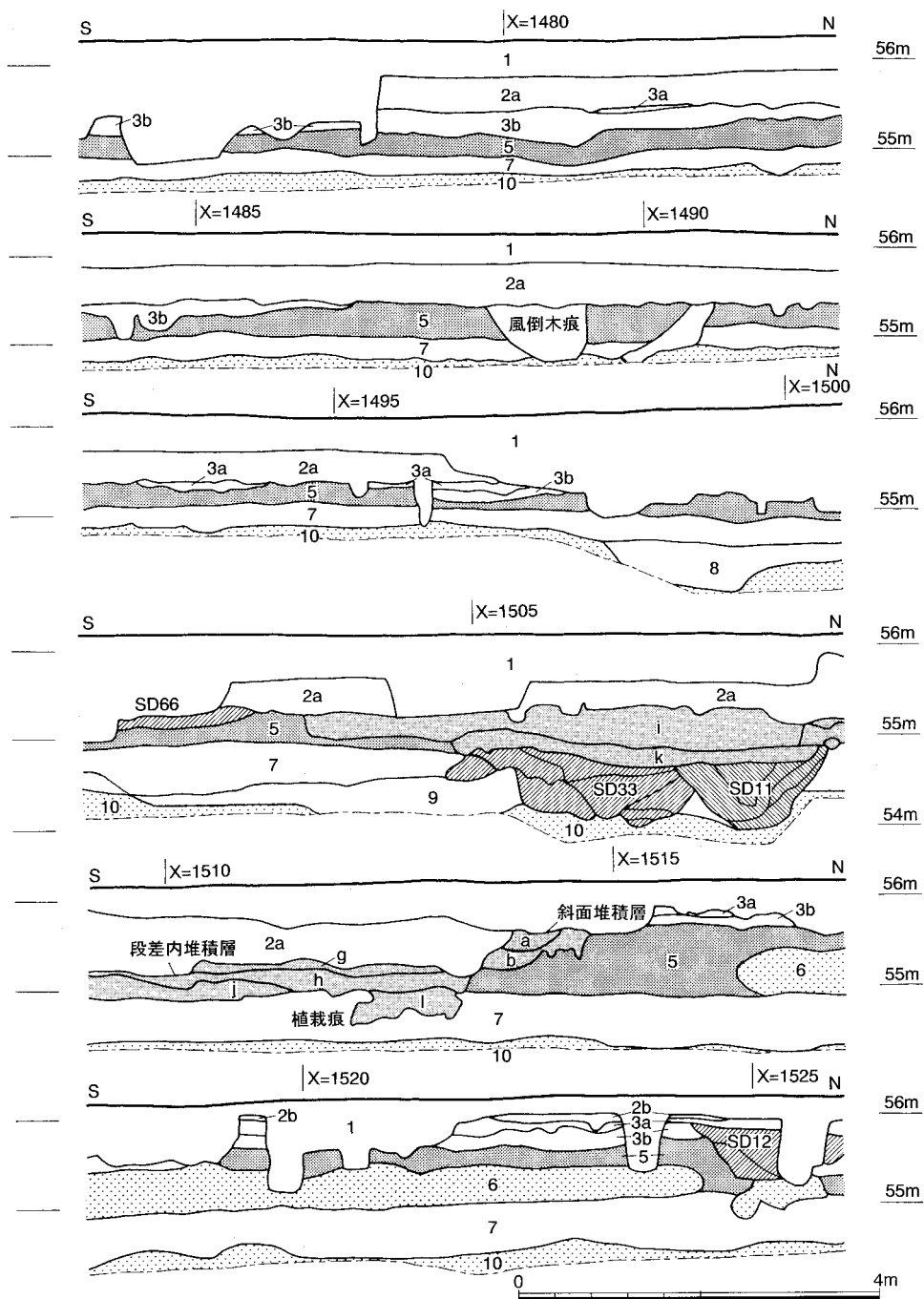


図2 南北方向の層位 (調査区西壁) 縮尺1/80

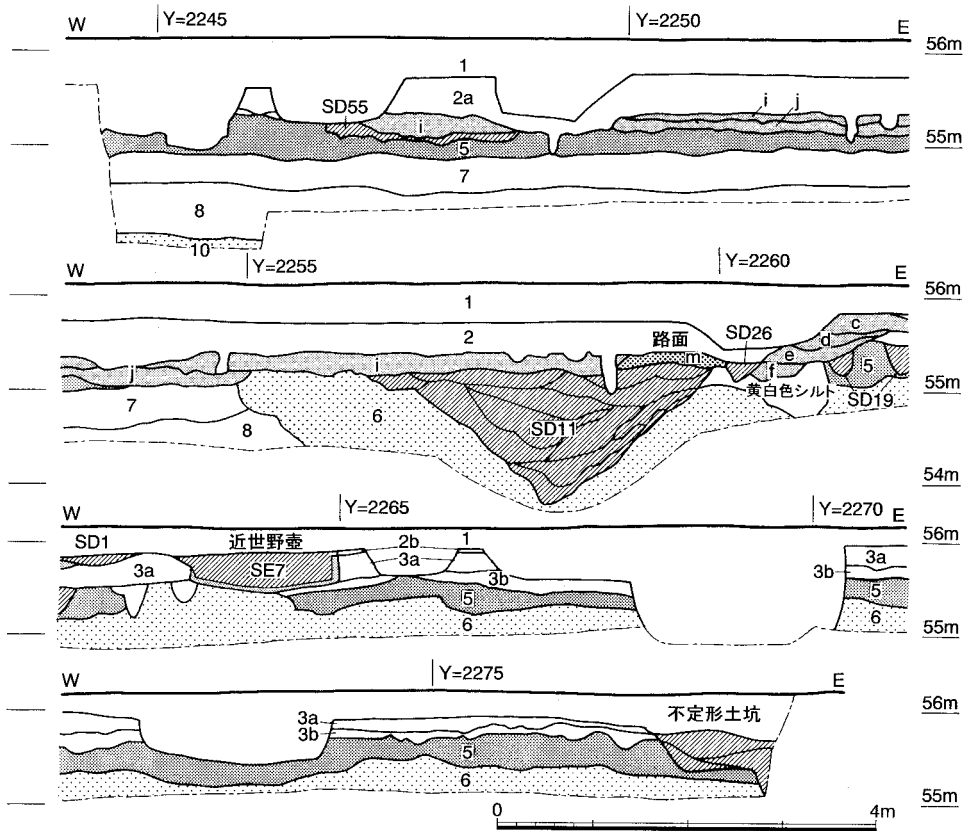


図3 東西方向の層位(1) (X=1500ライン東西畦南壁) 縮尺1/80

の白色砂Ⅱは、白色砂Ⅰと全く同質の粗砂層である。以上の6層以下の堆積はいずれも無遺物の自然堆積で、白川系の流路による洪水で運ばれた粗砂と、安定期に形成された粘質系の土壌によって調査地の基本地形が形成されてきた状況を示すものといえよう。

斜面堆積層 (a～f層) は、砂や礫を交えた暗褐色土が主体で、堅く締まる砂質土とやや軟質の粘質土が縞状に互層をなす。南方へ向かうほど段差の高低差が解消されるため、斜面に堆積する層も薄くなり、調査区南壁ではほとんど認められない。中世末期までの遺物を中心に含むが、最上層では近世の遺物も含まれる。中世前半の溝SD19や茶褐色土を覆って堆積していることから、おそらく中世後半期に段差が造成されて以降、近世を通じてこの崖面に堆積していったものだろう。

一方、段差内堆積層 (g～m層) は、やや軟質の明るい褐色土が主体で、下層の黄褐色砂質土と粘質土がブロック状に混じる層と混じらない層とが、入り組んで堆積する。ただ

層 位

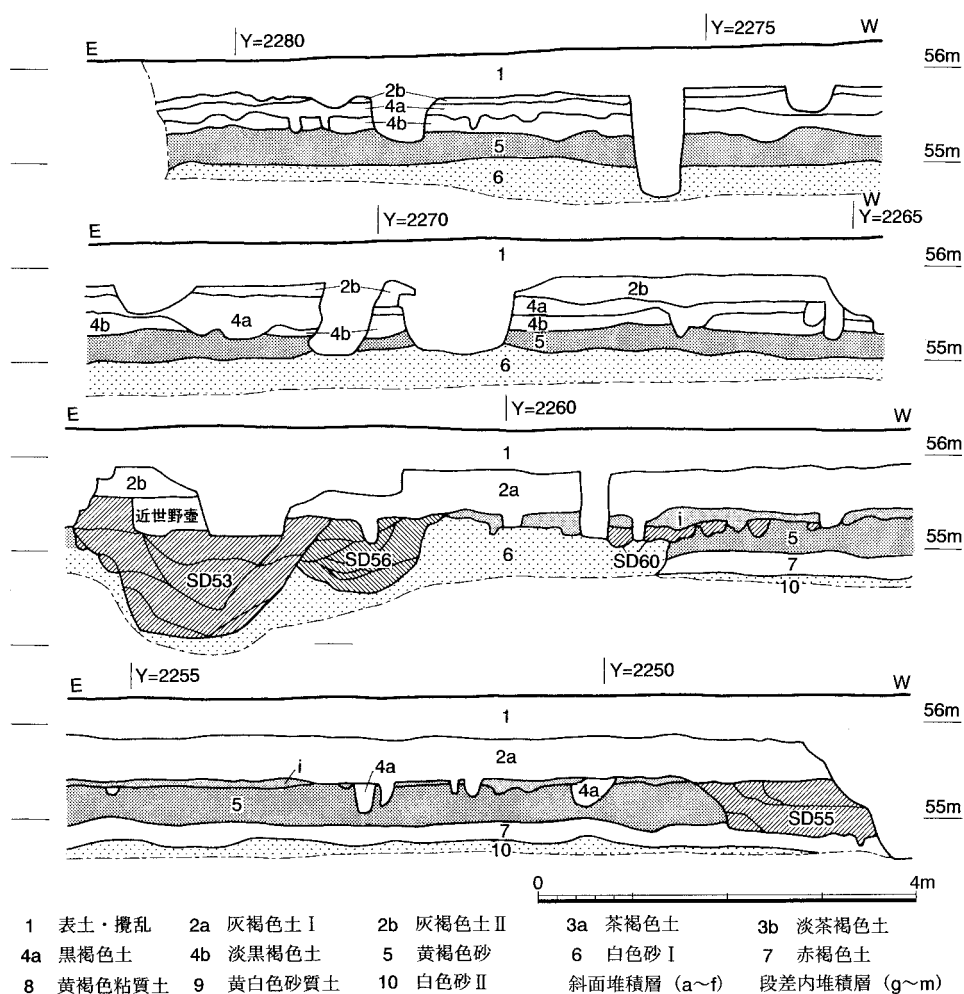


図4 東西方向の層位(2) (調査区南壁) 縮尺1/80

し、m層のみは細礫を交え強く締まった砂質土で、路面状に盛り上がる。いずれの層も中世末期までの遺物を微量含んでおり、濠状の溝SD11・53が埋積した後、段差内が耕地化した時期の耕土や畦道であったとみられる。

なお、今回の調査地点では、周辺一帯での鍵層となっている弥生前期末～中期初頭の洪水堆積層（黄色砂）は全く存在せず、弥生前期の土器は、もっぱら黒褐色土中から奈良時代の遺物とともに出土している。調査区一帯が微高地上に位置するために黄色砂に覆われなかったのか、あるいは覆われたとしても薄いために流出してしまったと推測され、その結果として、奈良時代において弥生前期の遺物包含層が地表面として攪拌されたのだろう。

3 縄文・弥生時代の遺跡

(1) 遺 構 (図版 5, 図 5・6・12)

弥生前期以前の遺構と遺物は、黒褐色土層のひろがりとおおむね対応するように、調査区の東南部を中心に確認された。ただし、同層が完全に削平されている西南部でも遺構が存在するほか、土器の出土点数も比較的多い(図5)。遺物の希薄な調査区北半については、古代以降の削平や破壊があったとしても、本来的にこの時代の遺跡の中心からはずれていた可能性が高い。

遺構としては、弥生前期の壺が横倒しになって出土した土坑SK 9・13がみつかるほか、調査区東南部を中心に黒褐色土の不定形な浅い落ち込みが多数ある。そのうちいくつかは奈良時代のものであったが、輪郭が明瞭で弥生前期以前の土器のみがまとも出土したものにSK 14・15がある。以上の遺構の位置関係は、古代の遺構と合わせて図12に示した。層位で述べたように、本来的に弥生前期の包含層であった黒褐色土が奈良時代に攪拌された結果、両時代の遺構が入り交じるような状況をもたらしたのだろう。

SK 9は、上面の削平と破壊により輪郭が曖昧だが、東西1 m南北50 cm程度の楕円形土坑であったとみられる。埋土は淡褐色の粘質土で、出土した壺I 29は、口縁側を西に向けて横倒しとなり、頸部より下の部分のうち7割程度が残っていた(図版5-3)。横位に埋置されていた壺が、上面を削平された結果だろう。

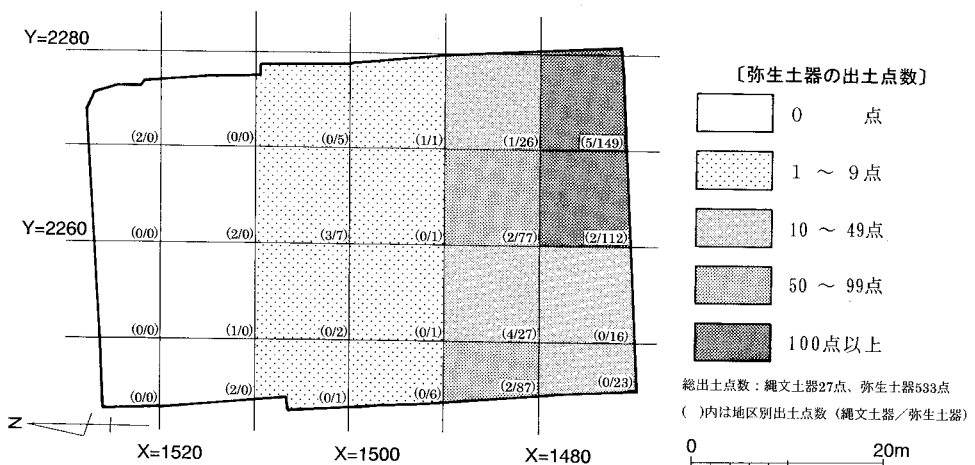


図5 縄文・弥生土器の地区別出土点数 縮尺1/800

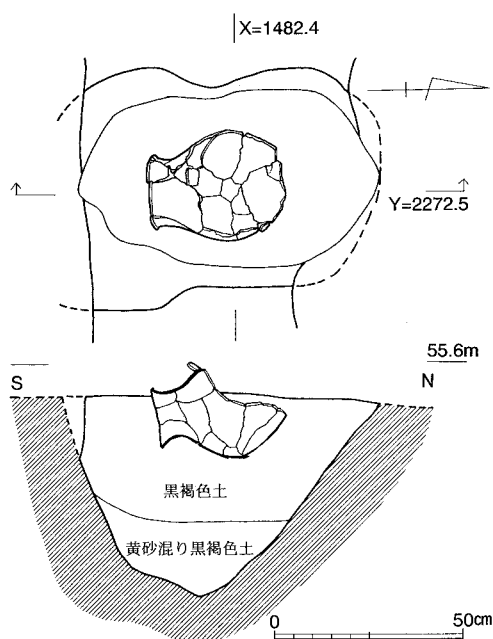


図6 土坑SK13土器出土状況 縮尺1/20

SK13も、同様な楕円形土坑で、南北70cm東西50cm深さ60cm程度が残存している。埋土は黒褐色の砂質土で、上層から出土した壺I28は、口縁側を南に向け、胴部最大径部付近から底部にかけてを欠いていた(図版5-1, 図6)。やはり横位に埋置したものが削平された状態とみられる。壺内および土坑内の埋土はすべて水洗したが、このほかに遺物は確認されなかった。SK14は、直径50cm程度の円形土坑で、壺胴部の大破片I26が出土した。SK15は、平面約2m四方で深さ60cm前後をはかる方形の落ち込みで、滋賀里Ⅲb式と遠賀川式の土器破片が多く出土した。以上のうち、SK9・13は土器棺墓、SK14もその残存であった可能性がある。

(2) 遺物 (図版7~10, 図7~11)

本調査区からは、縄文土器が27点、弥生前期の土器が533点(条痕文土器2点を含む)、が出土した。このうち、図化可能な口縁部と底部および有文破片のほとんどを呈示した。弥生時代の遺構から出土したのは、SK9(I29・I37・I44・I87), SK13(I28), SK14(I26・I88・I96), SK15(I9・I15・I39・I49・I86・I89)のみであり、それ以外は包含層および後世の遺構埋土からの出土であるが、全体で時期的に良くまとまっているとみられるので、遺構単位ではなく器種や部位毎にまとめて説明する。なお、石器は、頁岩の剥片が9点出土したのみで製品は無く、ここでは省略する。

縄文土器 (I1~I11) I1は縄文前期土器の雰囲気がかがわれる破片。器壁が非常に薄手で、胎土中に角閃石を多く含む。かなり摩滅しており、外面にLR縄文がわずかに認められる。I2~I6は縄文後期ごろとみられる有文土器。I2は、外面にLR縄文を施文した口縁部片で、口唇部は丸い。胎土中に角閃石や雲母を多く含む。I3は、外面に1条の細い沈線と、その下側に細く鋭い条痕が横位にみられる口縁部片。黒色を呈し、口唇部から内面にかけては丁寧に磨いている。I4はLR縄文地に沈線施文、I5は逆に沈線施文後にRL縄文を充填している胴部の破片。I6は、浅く幅の広い沈線施文のみ。

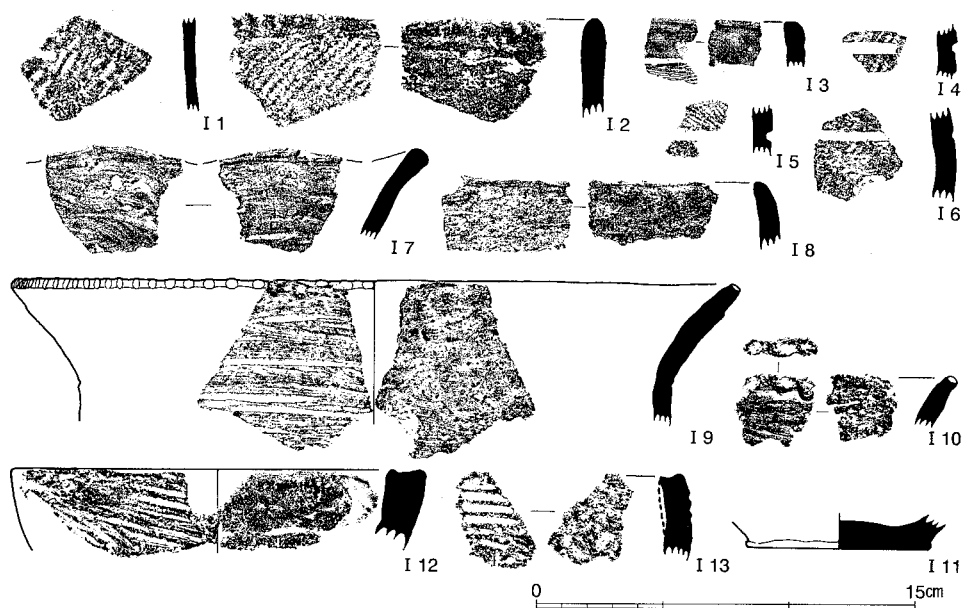


図7 縄文・弥生時代の遺物(1) (I 1～I 11縄文土器, I 12・I 13条痕文土器) 縮尺1/3

I 7の口縁部片は、黒色を呈し、外面は撫で、内面は磨いている。晩期精製浅鉢の、ゆるやかな波状口縁の頂部となる可能性がある。I 8は粗製深鉢の口縁部。内外面とも撫で調整で口唇部は丸い。I 9・I 10はともに口唇部にO字状の刻みを施しており、滋賀里Ⅲb式の深鉢口縁であろう。I 9の外面には横位の粗い条痕調整がみられる。I 11の底部は、こうした深鉢にともなうものであろう。

条痕文土器 (I 12・I 13) 石英砂粒を多く含む胎土で、器壁が厚く、外面を条痕調整する口縁部破片が2点出土している。I 12は、口縁がほぼ直立する浅い鉢形になるとみられ、外面は条溝の幅が2mm程度の浅い斜位条痕、内面は撫で、口唇部は指で強く押さえられて凹む。黄白色を呈する。I 13は、口縁がやや内湾する器形となるようで、外面の口縁付近に条溝幅2mm程度で断面半円形の横位条痕が深く施される。内面は幅広く器面が剥落し、本来は口縁部付近が内側に肥厚していた可能性がある。これらは、少なくとも近畿地方の縄文晩期・弥生前期の土器とは特徴が大きく異なる。ここでは、伊勢湾地方の弥生前期～中期初頭の条痕文土器で、一般に「内傾口縁土器」と呼ばれているものの範疇で捉えておきたい。同種の土器は、西南100mのA Q 23区で出土している〔宇野・岡田79〕。

弥生土器 (I 14～I 115) いわゆる遠賀川式土器。特徴的な個体を中心に説明する。

縄文・弥生時代の遺跡

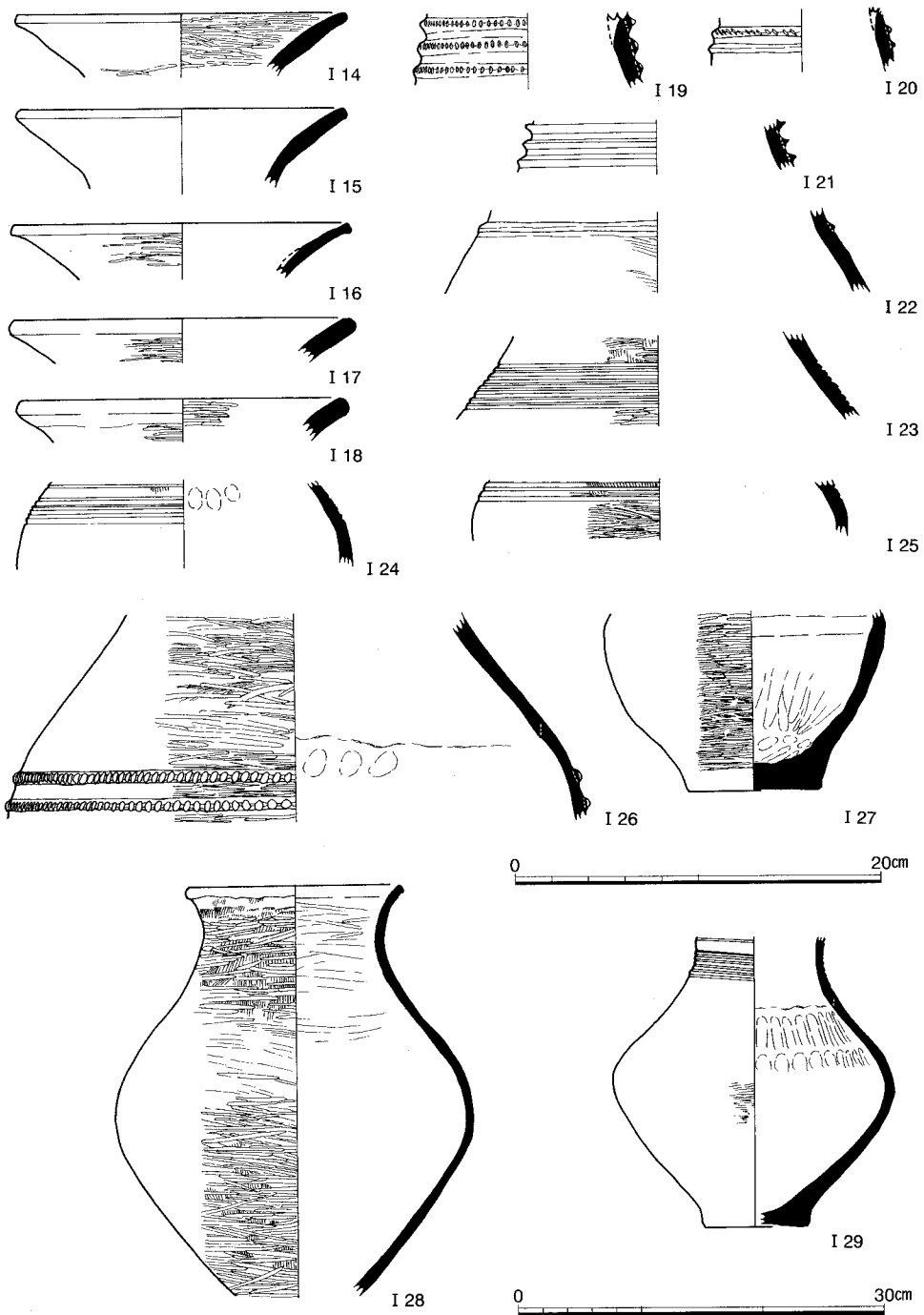


図8 縄文・弥生時代の遺物(2) (I 14~I 29弥生土器) I 14~I 27縮尺1/4, I 28・I 29縮尺1/6



図9 縄文・弥生時代の遺物(3) (I 30~I 70弥生土器) 縮尺1/3

縄文・弥生時代の遺跡

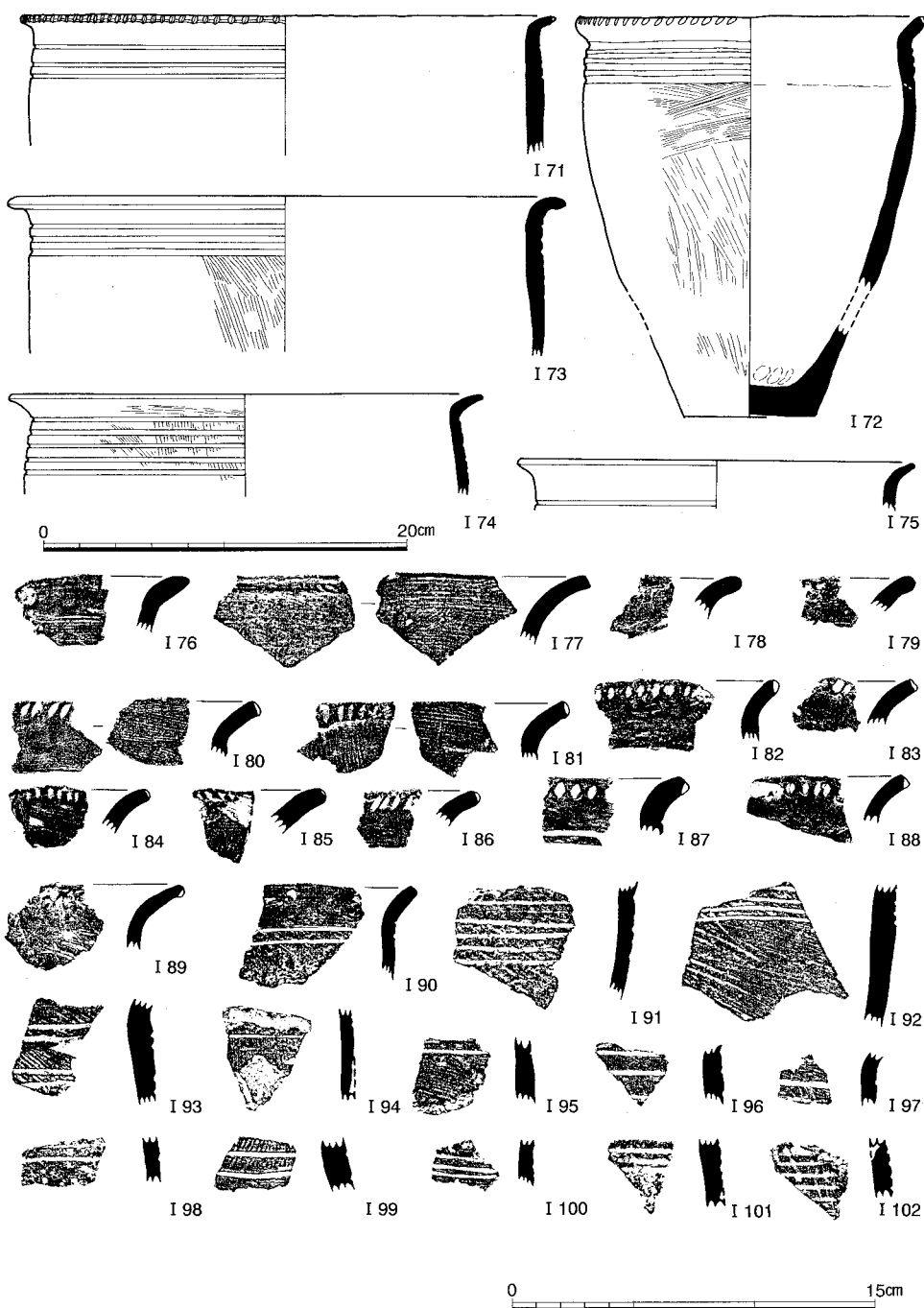


図10 縄文・弥生時代の遺物(4) (I 71～I 102弥生土器) I 71～I 75縮尺1/4, I 76～I 102縮尺1/3

I 14～I 70は壺。いずれも器表面を良く磨いている。I 14～I 18・I 30・I 31は口縁部の破片で、強く外反するものが目立つ。I 30は口唇部に沈線を、I 31は同所に刻みを施している。I 19～I 26・I 33～I 70は頸部や胴部の破片。I 23～I 25・I 33～I 52は篋描沈線で、I 19～I 22・I 26・I 53～I 70は貼付突帯で飾るものだが、ともに多条化の傾向が顕著にみられる。I 26はS K 14出土の大破片であり、強く張る胴部に2条まで貼付突帯が確認できる。I 57は、非常に細い紐状の貼付突帯で、その上に微細な篋刻みが施される。I 64は貼付突帯に先行する下書きの篋描沈線があり、また突帯上のO字状押捺には布目痕が認められる。I 65もO字状の押捺を連ねるものだが、通有のものと趣が異なる。I 27は小型の壺の胴部下半。外面は底部付近まで全面を密に横位の篋磨きし、内面は縦位方向中心に強く撫でつけられているほか、底部には指頭圧痕が著しい。I 28はS K 13からの単独出土品で、恐らく土器棺として用いられたものだろう。口縁があまり外反しない器形で、装飾は無く、外面は全面を縦位の刷毛調整の後に横位に篋磨きするのを基本としているが、胴部上半のみ撫でて消したような部分が带状に残される。精良な胎土で、黄褐色を呈する。I 29はS K 9の出土品で、これも土器棺であった可能性が高い。外面は荒れていて、一部に刷毛調整が確認できるのみ。頸部の篋描沈線は、多条のものが2帯以上になるようで、6条のものの1帯の上方にやや間隔をあけてさらに1条施されているところまで把握できる。内面には黒色のタール状付着物が広い範囲に認められる。I 32は、直口壺の口縁部分か、あるいはこのままコップ状の器形になるものか、いずれにしろ前期としては類例をみない器形。口唇部は撫でて面取りしている。外面の篋描沈線施文、胎土や色調などの雰囲気は遠賀川式土器と同じであり、前期に属するものとみて差し支えない。

I 71～I 102は甕。口縁部は「く」字状に短く外折し、口唇をV字やO字状に刻む通例のあり方のものが中心だが、刻みを施さないものも一定量存在する。沈線は5条までのものが確認できる。使用の痕跡とみられる黒色の付着物は、おおむね内外面ともにみられる。I 72は、外面の上半に横位の、下半に縦位の細密な条線が残されており、撫で調整に近い処理が行われている。I 73は口縁が強く巻くように外反し、刻みをもたない。I 75・I 77・I 87・I 88・I 90は口唇部を面取りするもので、I 87はその下端部に刻みを入れる。

I 103～I 115は底部。I 103～I 108は壺の底部で、外面を横位の篋磨きや撫でを中心に調整している。I 109～I 115は甕の底部で、斜め上方にまっすぐに器体が立ち上がり、外面は縦位の刷毛調整している。

以上は、壺の口縁の強い外反、篋描沈線の多条化といった特徴をもつことから、明らか

縄文・弥生時代の遺跡

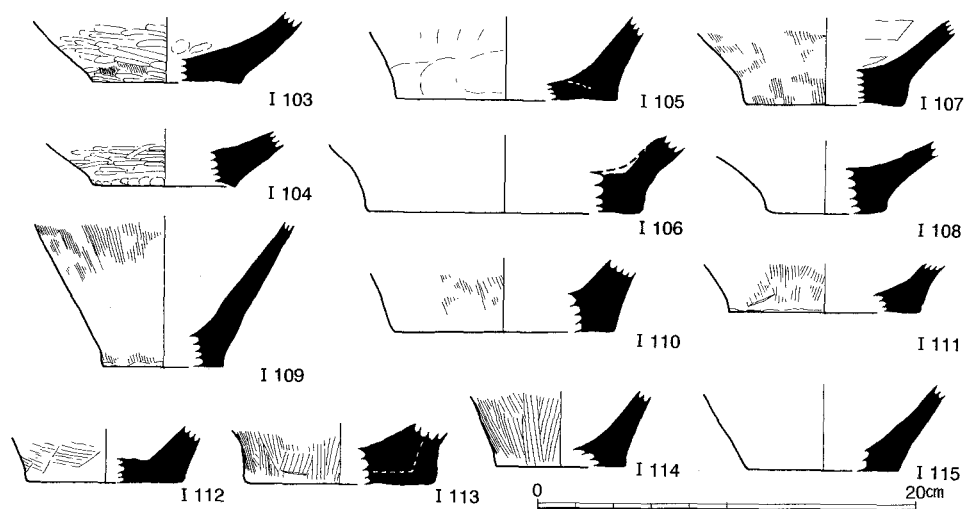


図11 縄文・弥生時代の遺物(5) (I 103～I 115弥生土器) 縮尺1/4

に前期新段階に位置づけられるものである。本調査区の出土品は、このほかに、貼付突帯が多条化している点や、I 29やI 93にみられるように多条の沈線文帯が複数帯化している点に注意され、新段階でもより新しい時期に属するものといえる。

4 古墳時代・古代の遺跡

(1) 遺 構 (図版3・5, 図12)

古墳時代については、遺構は確認されなかったが、5～6世紀代を中心とする遺物が少量出土している。古代の遺構には、奈良時代と、平安時代後半期のものがある(図12)。以下、時代順に説明する。

奈良時代の遺構 小規模な溝と、大小さまざまな規模の土坑が多数ある。いずれも黒褐色土を埋土としており、出土する土師器から8世紀中葉に比定される。遺構の密度や遺物の出土量は、黒褐色土の堆積している東南部で高くなる傾向がみられる。ただし、調査区北半では後世の削平や破壊が著しいこと、にもかかわらず少ないながらも遺構が存在することを考慮すると、本来的には全域にこの時代の遺跡が広がっていたものと想定される。

南北方向の溝S D60は、南流するように掘られ、幅80cm前後深さ最大で20cmをはかる断面U字形の溝。北端は浅くなって消滅しているが、削平された可能性が高い。東西方向の溝S D25・62は、それぞれ蛇行しつつ平行して東流する、幅50cm深さ30cm程度の断面U字形の小溝。西側は中世以降の破壊により不明。東端で南北方向の溝S D63と直交している

が、埋土は全く同一で、ともに奈良時代の遺物を含むため先後関係は不明。これらの奈良時代の溝は、後世の遺構と異なり方位を無視して蛇行気味にはしることがおおきな特徴となっている。また、出土する遺物は少ない。

土坑S K 5は、一辺80cm程度の方形の土坑で、S D 25に接するようにあるが、切り合い関係は不明。出土した須恵器がやや新しい様相を示しているので、9世紀代に下る可能性もある。S K 10・11はともに小規模な土器溜で、土器のほかに礫もまじえる。検出時には掘形ははっきりしなかったが、下層に円形の小土坑が確認できた(図版5-6)。S K 12は、一辺60cm程度の方形土坑だが、東半は攪乱に壊される。遺物は、半分程度残る須恵器の杯I 138が上面から出土したのみである。S K 16・17は、S D 53やS D 56に破壊され輪郭がはっきりしなかったが、残りの良い遺物がややまとまって出土したため、その範囲を土坑と認定した。このほかに調査区東南部には、黒褐色土の不定形な浅い落ち込みが多数ある。また、北調査区では、円形の小ピットS P 1・3・5・14があり、黒褐色の埋土中から炭化物や土師器の細片が出土している。性格は不明だが、建物や柵列の柱穴となるピット群であった可能性もある。

平安時代の遺構 東西・南北方向にはしる大小の溝群が中心となる。おおむね10世紀中葉と11世紀前葉の2時期に大別される。ともに茶褐色土を埋土とするが、前者の遺構のなかには、黒褐色土に近い色調の埋土のものもみられる。

10世紀中葉の遺構には、S D 12・13・16・24・56・61, S K 6・8がある。溝については、いずれも方位を真北からやや西に振っていることを特徴としている。S D 12は、調査区北端をはしる断面U字形の東西溝で、幅1.6m以上、深さ70cmあまりをはかる。東方は攪乱に破壊され、直交したであろうS D 13・16との関係は不明である。S D 13とS D 16は心間距離が4mで平行してはしる南北溝。S D 13は、幅80cm深さ20cm前後の浅い溝。S D 16は、中世の溝S D 17に東側を切られるものの、幅2.5m深さ60～80cmをはかり、南へ向かうほど深くなる。ともに南への延長は大溝S D 11によって切られてしまい不明だが、それを越えた南側には続いていない。S D 24は、調査区北西隅にある南北溝で、周囲を大きく攪乱に破壊された状態でみつかった。溝底は2条に分かれ、幅1.5m深さ50cm程度をはかる。S D 56は、X=1485付近より蛇行しながら南へはしるが、調査区南端付近ではS D 53をはじめ多数の遺構と切り合い輪郭がはっきりしない。基本形は幅2m深さ80cm程度の断面U字形である。S D 61は、幅60cm深さ20cm程度の浅い東西溝。S K 6は、このS D 61の北側に接してある不定形な落ち込み。広い範囲に10世紀中葉の遺物を含む茶褐色土が

古墳時代・古代の遺跡

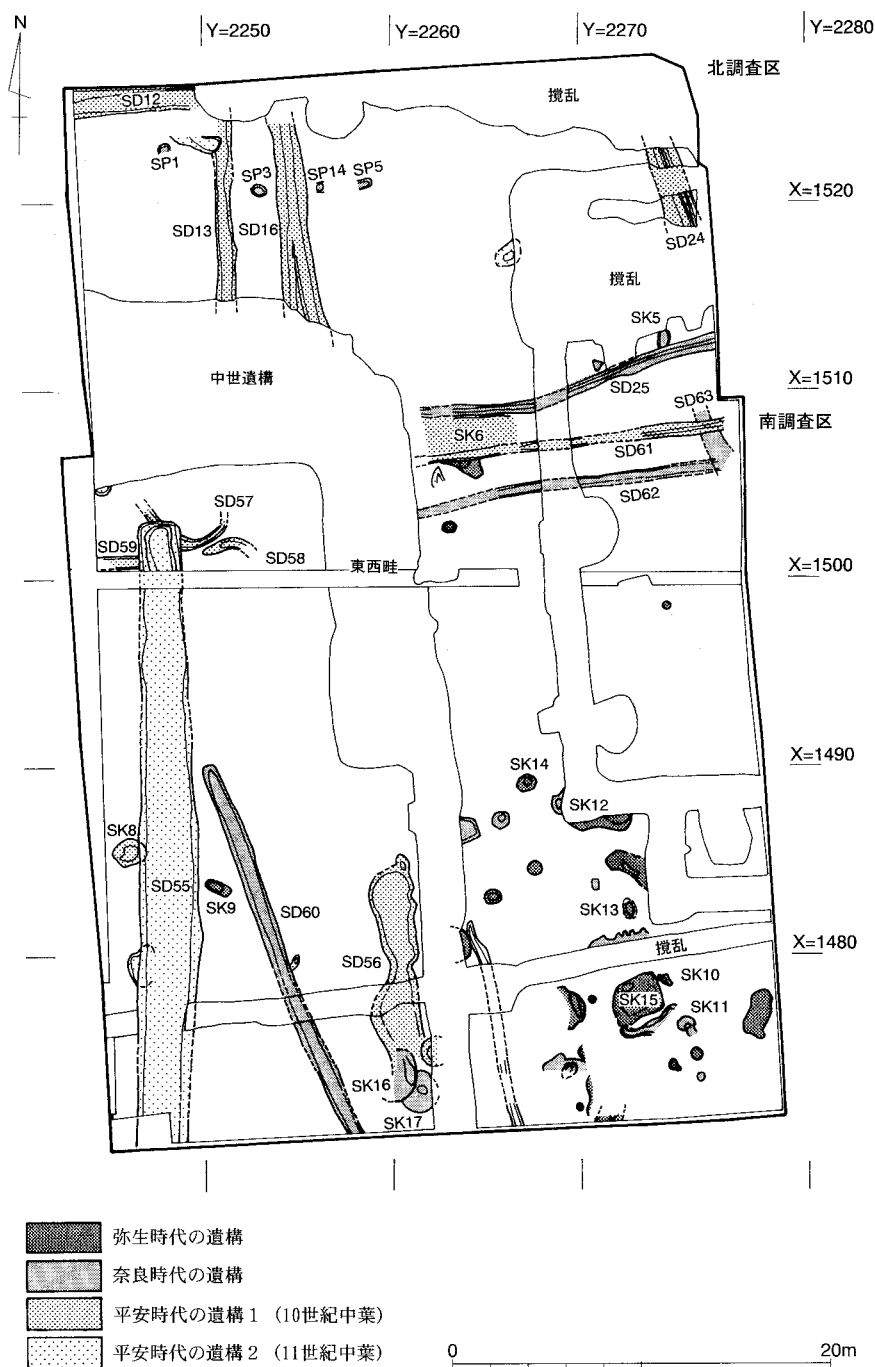


図12 古代以前の遺構 縮尺1/400

落ち込んでいたが、全体の輪郭ははっきりしない。SK 8は瓦溜で、径1 mあまりの浅い土坑に少量の古代の平瓦のみがまとまっていた。ただし、瓦はいずれも小片でやや摩滅しており、後世の2次的な堆積の可能性もある（図版5-4）。

11世紀前葉の遺構には、やや東に振れる方位ではしる南北方向の大溝SD 55がある。断面逆台形で、検出面で幅約3 m、南方ほど深く掘られ、調査区南端では深さ80cmをはかる。X=1502付近で立ち上り、北へは続かない。土師器皿類を中心に多くの遺物が出土した。

(2) 遺 物（図版10～12、表1・図13～17）

古墳時代の遺物（I 116～I 122） 遺構にともなうものはないが、須恵器片（I 116～I 120）と形象埴輪の破片（I 121・I 122）が出土している。I 116は甕の胴部破片で、凹線に挟まれて板状工具端面の刺突列が1帯めぐり、下半は回転篋削り調整されている。陶邑編年のTK 23～TK 47型式に相当するものであろう。I 117は壺の口縁部とみられ、外面の口縁下に断面三角形の突帯がめぐっている。I 118～I 120は外面に櫛描波状文がみられる口縁部の破片で、器台や壺となるものであろう。I 121の形象埴輪片は、砂粒を多く含む胎土で、表側に梯子状のモチーフが線刻され、端面は斜めに面をもつ。家形埴輪の

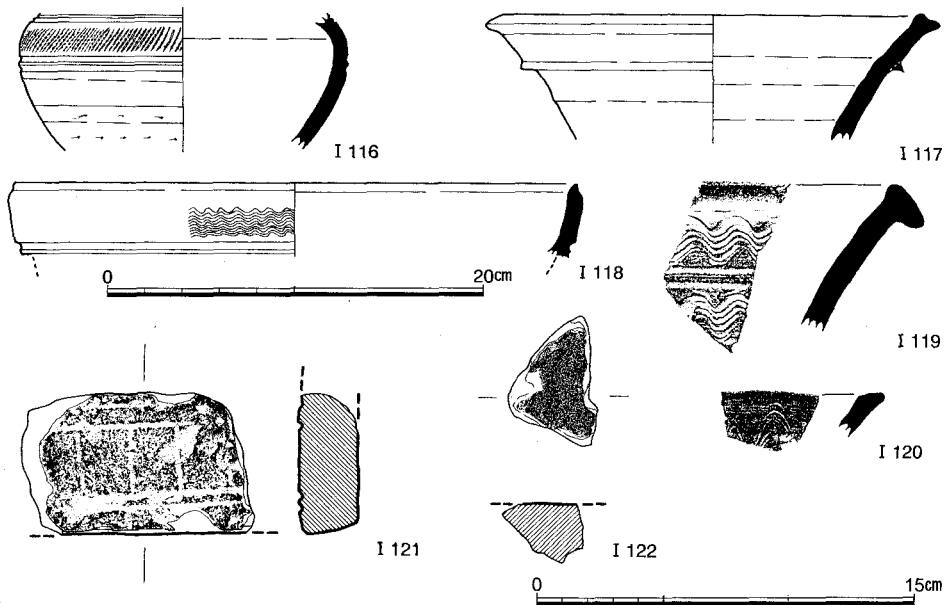


図13 古墳時代の遺物（I 116～I 120須恵器，I 121・I 122埴輪）
I 116～I 118縮尺1/4，I 119～I 122縮尺1/3

古墳時代・古代の遺跡

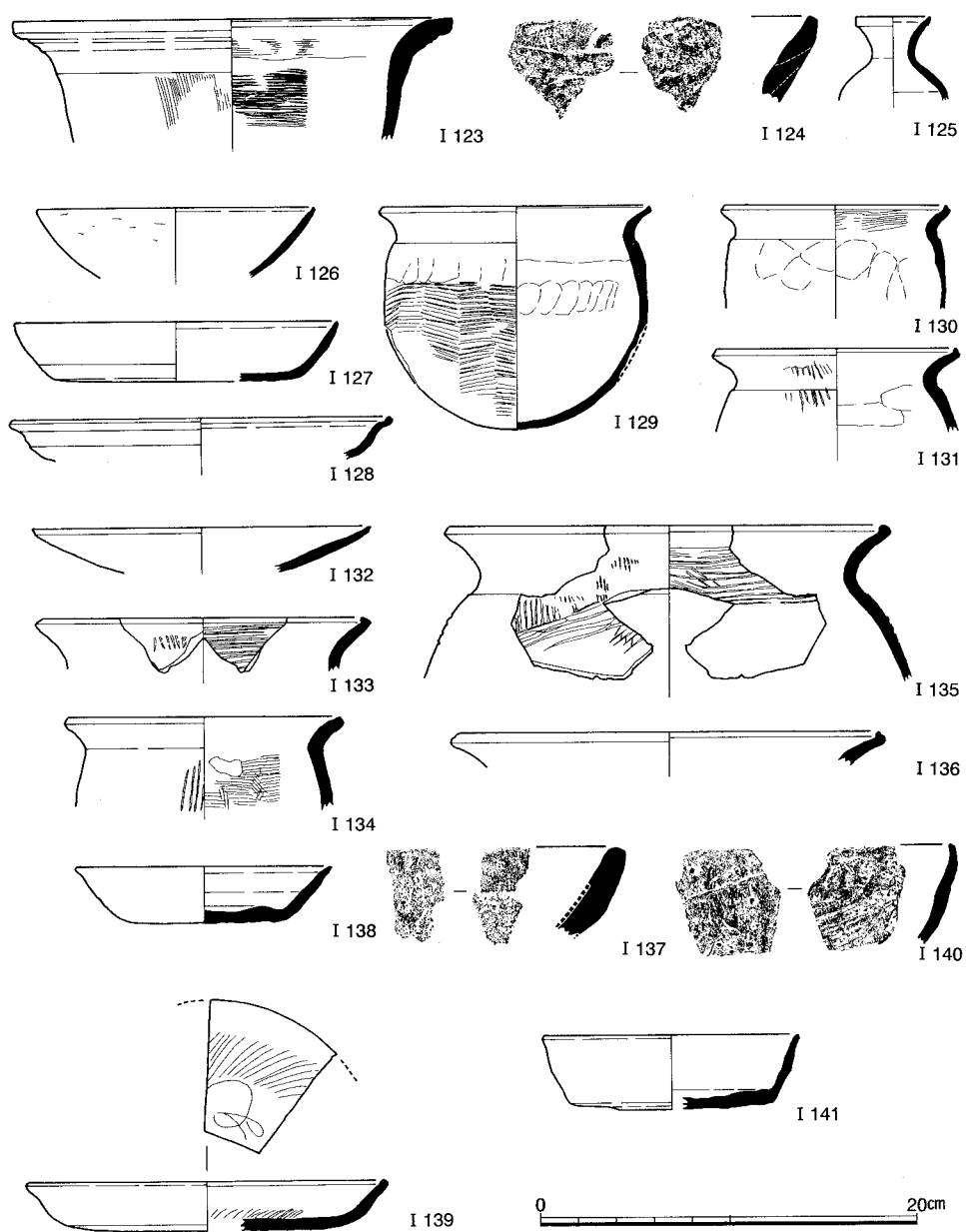


図14 SK 5出土遺物 (I 123・I 124土師器, I 125須恵器), SK 10出土遺物 (I 126～I 131土師器), SK 11出土遺物 (I 132～I 137土師器), SK 12出土遺物 (I 138須恵器), SK 16出土遺物 (I 139土師器), SK 17出土遺物 (I 140土師器, I 141須恵器)

軒先の部分だろう。I 122も同種の胎土をもつ無文の小破片で、残存する表面に赤彩が認められる。以上の古墳時代の遺物は、須恵器が6世紀初頭ごろに比定され、家形埴輪は5世紀代のものとみられる。

奈良時代の遺物（I 123～I 151） 総量で整理箱3箱分程度の土器が、遺構や黒褐色土中から出土している。それぞれ様相が似ているため、まとめて説明する。種類別では、土師器の杯・碗・皿類が最も多く、甕がこれに次ぎ、製塩土器や須恵器が少量ともなう。

杯や皿には暗文が顕著なものがある。I 148は内面に斜放射文帯とその上下に螺旋文がめぐり、外面は杯部に横位の暗文状の細い磨きが施され、底部を篋削りしている。I 139では調整・装飾ともこれより明らかに簡略化され、内面上側の螺旋文や外面の磨きが省略されている。I 144・I 145は底が深く直線的に立ち上がる器形で、暗文はなく、内面は撫で調整、外面は篋削りのち磨く。外面の色調は黒色を呈している。そのほかの個体は、おおむね底部篋削りでそれ以外を撫で調整、という仕上げ方にしている。

甕には、口径12～15cm程度の小型品と25～30cmの大型品がある。いずれも口縁端部は小

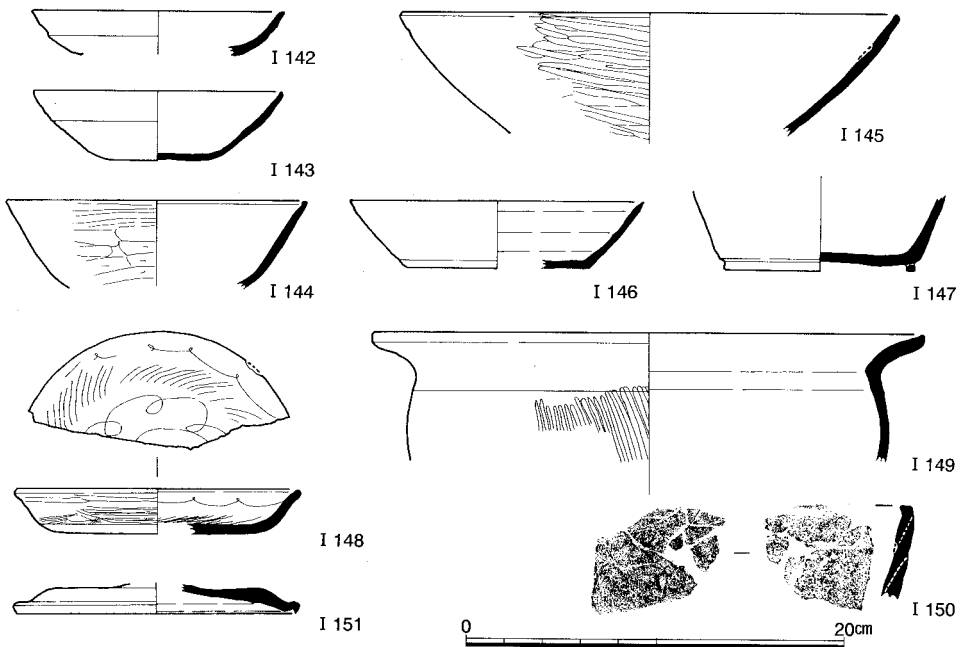


図15 S D25出土遺物（I 142土師器）、S D60出土遺物（I 143～I 145土師器、I 146・I 147須恵器）、S D62出土遺物（I 148土師器）、黒褐色土出土遺物（I 149・I 150土師器、I 151須恵器）

さく内側に巻き込む形状で、外面の調整には横位の叩き（I 129）、刷毛（I 135・I 149）、撫で（I 130）の各種がみられる。器形の判明する I 129は薄い器壁の丸底を呈し、外面は火を受けて黒変と剥離が著しい。一方、I 123はこれらと特徴が大きく異なり、厚手で強く外反する口縁部を強く横に撫で、胴部が張らない器形を呈している。

製塩土器は、やや厚手（I 124・I 137）と薄手（I 140・I 150）がある。いずれも砂粒を多量に含む胎土で、内外面とも雑に撫で調整し、粘土紐の積み上げ痕が残されている。ただし、I 137は口唇部を弱く面取りするなどやや趣が異なる。

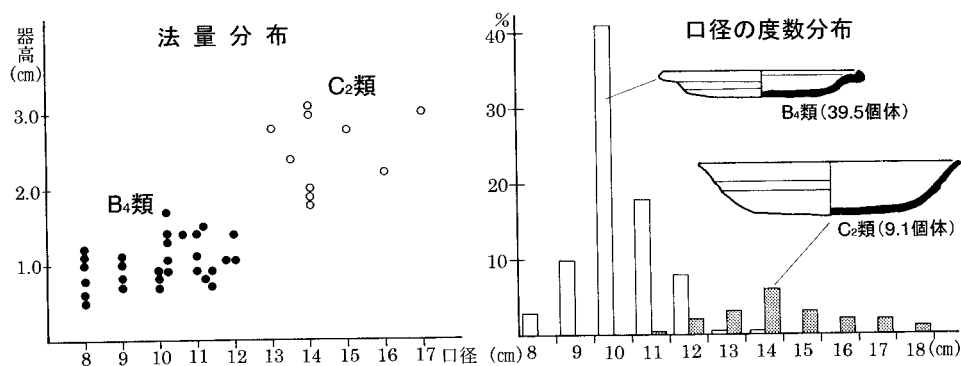
須恵器では、杯A（I 138・I 141・I 146）が多く、ほかに杯B（I 147）、蓋（I 151）、小型壺（I 125）がある。杯Aは、口径は13～15cm、器高3～4cmに収まる。いずれも焼成はやや甘く暗灰色を呈し、底部の回転範削り痕が撫で消し不十分で残る。杯Bは、焼成堅緻で青灰色を呈し、底部は丁寧に撫で調整される。小型壺は、器形からみて時期が下るものである可能性が高い。

以上の土器群は、土師器の暗文に平城宮Ⅱ期およびⅢ期双方の特徴が認められることや〔奈文研76〕、形態や法量などの諸特徴からみて、一部に時期が下る個体を含みながらも、ほぼ8世紀中葉を中心とした時期に帰属するものだろう。

平安時代の遺物（I 152～I 230） 総量で整理箱に10箱程度の遺物が、南北方向の溝S D55を中心にまとまって出土している。瓦類については、中世のものとあわせて第6節でまとめて報告するので、ここではそれ以外について述べる。

I 152～I 190はS D55出土遺物。土師器皿類がまとまっており、1/12以上の破片を対象とした口縁部計測法で、「て」字状口縁手法の末期的な形態であるB₄類が39.5個体、2段撫で手法のC₂類が9.1個体ある（表1）。小型の皿B₄類（I 152～I 170）は、外反する口

表1 S D55出土土師器の計測結果（口縁部計測法による）



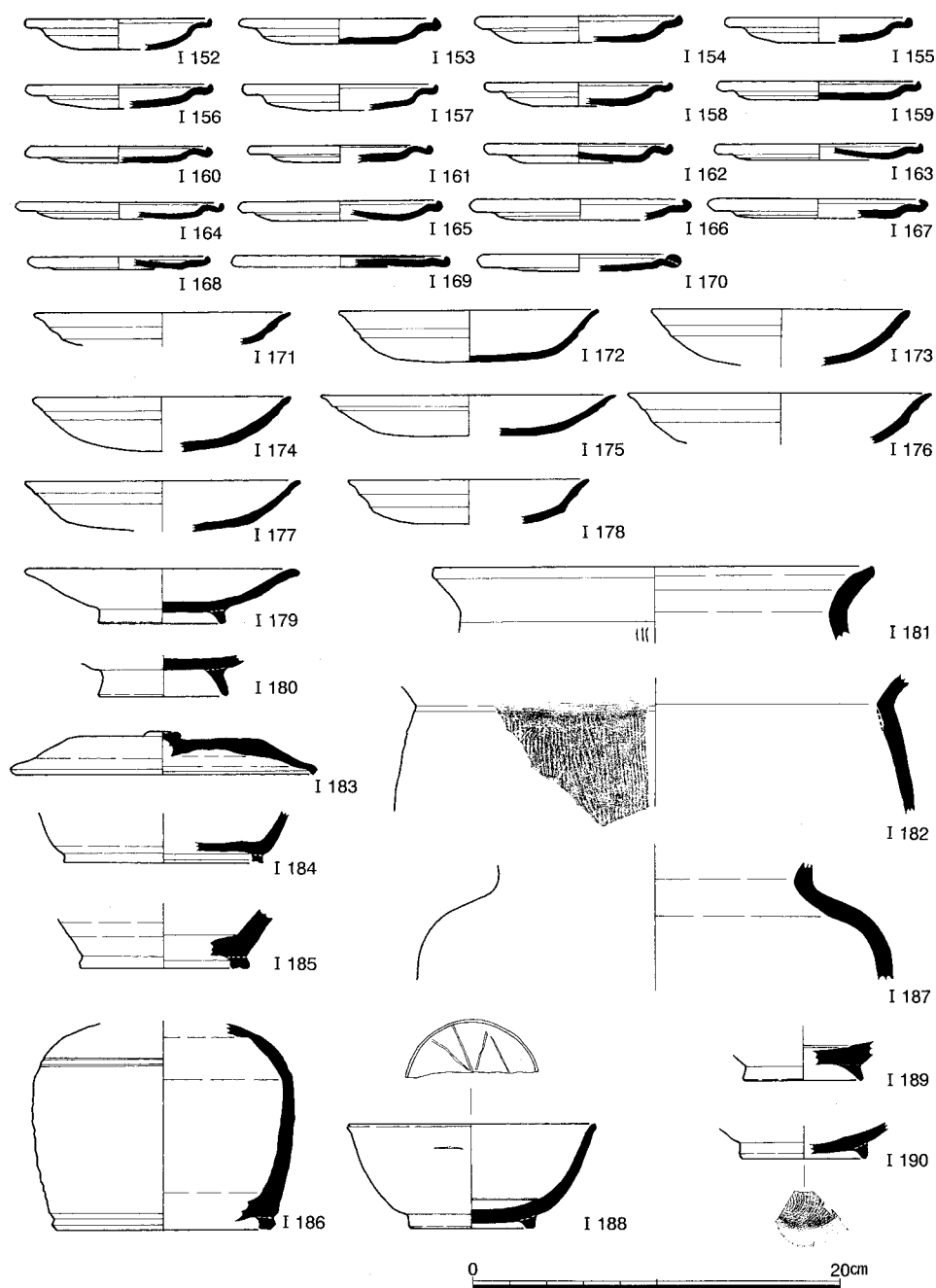


図16 S D55出土遺物 (I 152～I 182土師器, I 183～I 187須恵器, I 188・I 189緑釉陶器, I 190灰釉陶器)

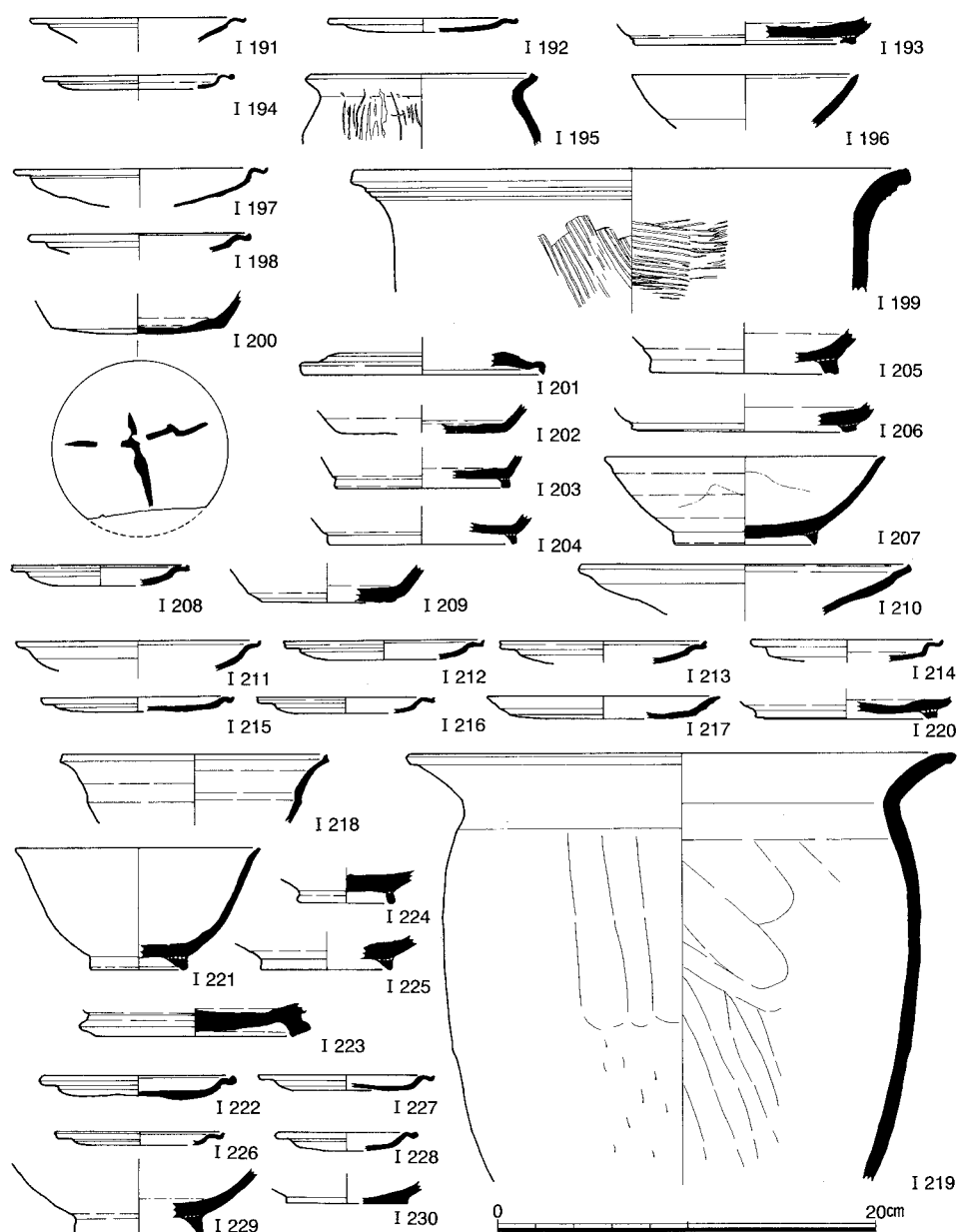


図17 S D12出土遺物 (I 191・I 192土師器, I 193須恵器), S D13出土遺物 (I 194・I 195土師器, I 196灰釉陶器), S D16出土遺物 (I 197～I 199土師器, I 200～I 206須恵器, I 207灰釉陶器), S D24出土遺物 (I 208土師器, I 209須恵器), S D56出土遺物 (I 210～I 219土師器, I 220須恵器, I 221緑釉陶器), S D61出土遺物 (I 222土師器), S K 6出土遺物 (I 223須恵器, I 224・I 225灰釉陶器), S K 8出土遺物 (I 226土師器), 茶褐色土出土遺物 (I 227・I 228土師器, I 229灰釉陶器, I 230緑釉陶器)

緑の端部を上方や内側へ短く肥厚させる器形で、口径10cm前後器高1cm前後を中心とするが、I 168～I 170のように、扁平なコースター状を呈するものも含まれる。大型の皿C₂類（I 171～I 178）では、口径14cmを中心としながらややばらつきがある。I 179は高台付きの皿で、赤褐色を呈し、口縁と底部とも回転撫で調整で仕上げられる。I 180は、黄白色を呈し、やや丈高の高台であるが、皿の底部であろう。ともに搬入品の可能性がある。I 181・I 182は土師器甕。I 183～I 187は須恵器で、I 183は蓋、I 184は杯B、I 185～I 187は壺の底部や胴部。I 186・I 187は、外面に淡緑色の自然釉が付着する。I 188・I 189は近江産の緑釉陶器碗で、黄白色の胎土に濃緑色の釉がかかる。ともに貼付高台で、見込みに1条の圏線をもち、I 188では放射状の沈線文様も認められる。I 190は灰釉陶器碗の底部で、高台の内側には回転糸切り痕が残る。また内面には朱が付着している。以上の土器群は、土師器皿類の内容が京都大学構内遺跡での平安京Ⅲ期古段階に相当し、平安京域での編年ではⅣ期古段階、実年代では11世紀前葉に位置づけられる〔小森・上村96〕。緑釉陶器などの特徴もこうした年代観と矛盾しない。

I 191～I 222は、S D 12・13・16・24・56・61出土遺物。いずれも、土師器皿類では「て」字状口縁手法B₃類が多数を占め、これに若干のB₂類（I 191・I 198・I 211）がともなう構成で、2段撫で手法C₂類は1点のみS D 56から出土している（I 217）。こうした内容から、これら各遺構出土遺物はおおむね10世紀中葉を中心とした時期に比定できよう。以下に説明する土師器皿類以外の特徴的なものも、おおむねこの年代観と矛盾しない。I 200は、焼成が不十分で灰色を呈する須恵器杯Aで、底部に薄く「十」字形の墨書が認められる。I 207は灰釉陶器碗で、漬け掛けにより厚く施釉されている。I 218は黄白色の精良な胎土をもつ土師器で、胴部で稜をもちながら大きく外反する口縁部片。端部は上方に短く肥厚する。器種は不明。I 219は土師器の長胴甕上半部。口縁部は横撫で、胴部の外面は下半を縦位に篋削りした後上半を撫でて仕上げ、内面は斜位や縦位に撫でつけている。なお外面には下半に薄墨状の付着物がみられる。I 221は近江産緑釉陶器の碗で、白色の胎土に光沢のある濃緑色の釉がかかるが、剥落が著しい。

I 223～I 225はS K 6、I 226はS K 8、I 227～I 230は茶褐色土出土遺物。I 223は須恵器で、おおぶりの高台が付くことから壺の底部だろう。I 224・I 225は灰釉陶器の底部で、I 224は内面に淡緑色の釉が刷毛塗りされる。I 226～I 228は土師器皿B₃類。I 229は灰釉陶器碗で、丈高の高台が付き、内外とも淡灰色の釉が刷毛塗りされる。I 230は緑釉陶器底部で、円盤状の平高台をもち、白色の胎土に淡い黄緑色の釉が全面に施される。

5 中世の遺跡

(1) 遺構 (図版2・4・6, 図18・19)

中世の遺構には、おおむね鎌倉時代に相当する12世紀後葉～13世紀前半代のものと、室町時代に相当する14・15世紀代のものとに大別できる。いずれも茶褐色土を埋土とし、黒褐色土や黄褐色砂層の上面で検出した。またこのほかに、詳細な時期は特定できないが、耕作や植栽の痕跡とみられる畝溝群や不定形土坑がみつまっている。

鎌倉時代の遺構 北調査区を中心として、わずかに方位を西へ振る南北および東西方向の溝がみつまっている。

南北溝は、Y=2260付近に大小さまざまな規模のものが集中している。SD19は、このうちの最も規模が大きいもので、検出面での幅1.4m、深さ40cmをはかる。底面では2条にわかれており、掘り直しをされているか、2条の溝が切り合っている可能性もあるが、埋土の断面からは確認できなかった。X=1510以南は後世の段差の造成で大きく破壊され、東西畦付近で検出できなくなる。出土遺物から中世京都I期中段階に比定される。SD17・18・20～22は、これと並行してはしる小溝群。うちSD17は、平安時代の溝SD16の東肩を切ってはしり、幅80cm深さ30cmとやや規模が大きい。SD18・20～22は、いずれも幅30cm弱深さ20cm程度の細く浅い溝。それぞれ途中で立ち上がるようで、南や北へ続かない。遺物は微量しか出土していないが、おおむねSD19と同時期とみられる。

東西溝は、X=1508付近をはしるSD33のみ。断面は逆台形を呈し、検出面での幅1.8m深さは80cmをはかるが、中世後半に削平されているため本来はもっと大規模だったはずである。南北溝SD19と直交するような位置でたちあがり、東へは続かない。SD33の底面はSD19の底面よりおよそ80cm低い位置にあること、また、出土遺物から中世京都I期古段階を下らない時期に比定できることから、この東西溝SD33が先行して存在し、その埋没後にSD19など南北溝が掘削された可能性が高い。

SD66は、調査区西壁際でみつかった落ち込みで、遺構の大半が調査区外になり、性格不明。さしあたり溝の東端部として処理したが、土坑の可能性もある。平安京IV期中段階の資料が出土している。

室町時代の遺構 14世紀の石組井戸、15世紀の濠状の大溝、不定形土坑などがある。

井戸SE5は、隅丸方形に石組みした井戸(図19)。およそ3.5m四方の隅丸方形の掘形をもち、残存する深さは3mであるが、上部が攪乱で破壊されていたため本来は4m以上

京都大学総合人間学部構内A R 25区の発掘調査

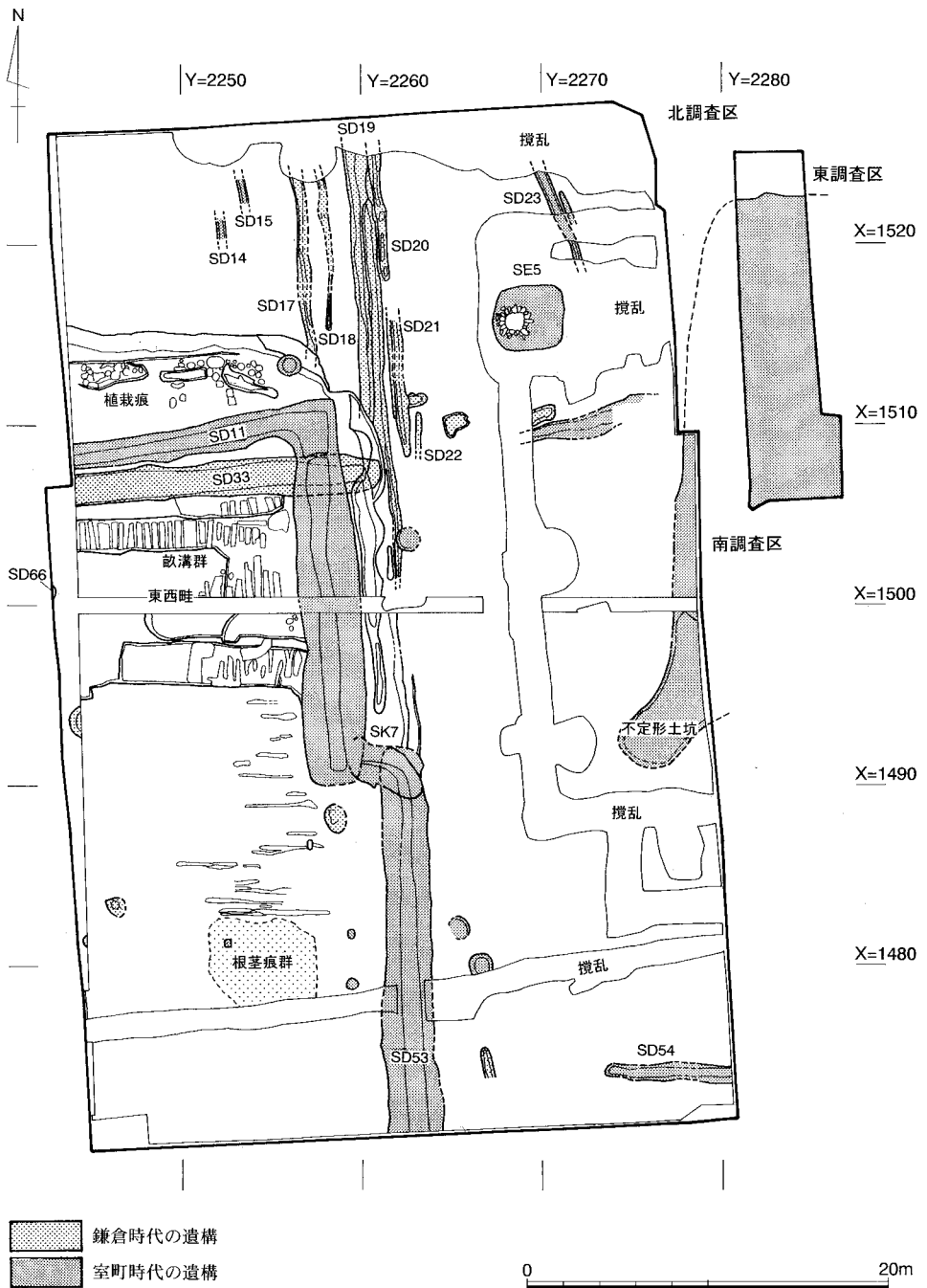


図18 中世の遺構 縮尺1/400

中世の遺跡

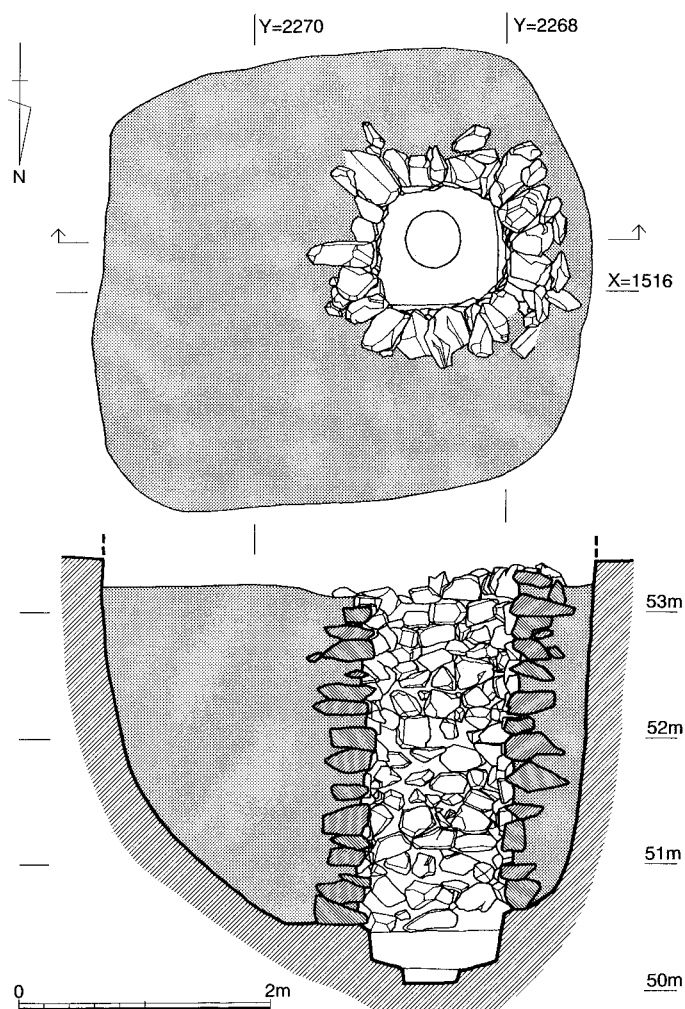


図19 井戸SE 5 縮尺1/60

の深さをもっていたとみられる。石の大きさは不揃いでかなり乱れた積み方がされている。底部の30cmほどは石組みがみられず、さらに底面に径40cm深さ10cmほどの円形の掘り込みがあることから、方形の木枠と木桶の水溜を設けていた可能性が高い。井筒内、掘形埋土ともに出土遺物は非常に少なかったが、底面近くで出土した土師器皿類はE₁類やE₂類であることから、中世京都Ⅱ期、おおむね14世紀代に比定されよう。

濠状の大溝はSD11とSD53がある。うちSD11は、真北から西へ12° 振れる方位ではしる東西溝が、80° の角度で南折し、西へ5° 振れる南北の溝となってX=1490付近までいたって立ち上る。SD53は、ここから東へおよそ3m離れた地点からはじまり、西へわ

ずかに3°のみ振れる方位で南へとはしる。いずれの溝の断面形状も基本的にV字形で、検出面で幅3.2m深さ1.8m程度をはかるが、S D 11の東西方向部分については、断面逆台形を呈して規模がやや小さくなっている。埋土の状態をみる限りでは、これらは一度ではなく徐々に埋まっていったものと想定できる(図2~4)。

S D 11南端とS D 53北端の間には、これらを連結するかのように土坑S K 7があるが、溝との切り合い関係は最終的に確定できなかった。S K 7とS D 53の底面の深さはほぼ等しいが、S D 11の底面はこれより50cmあまりも深い。したがって、本来的にS D 53の北端が西折してS D 11にとりつくように一連のものとして掘られていた可能性と、両溝掘削後のある時期に、枳形状に通路となる空間の生じていた部分を閉じるべく土坑が掘られた可能性の、両者を想定しておきたい。なお、溝は黄褐色砂や白色砂に掘り込まれているため透水性が良く、短期間でも滞水状態にあったとは考えにくい。底面のレベルでみると、西→東および北→南へと傾斜するように掘削されている。

S D 11・S K 7・S D 53のいずれも出土遺物の内容に違いはなく、埋土の中位層を中心に大量の陶磁器や瓦類を含むものであって、土師器皿類ではE₄類やF₂類が主体となる。埋没後の上面に堆積している段差内堆積層の土師器皿類がもっぱらF₄類であることを考慮すると、これら濠状の大溝とS K 7は、中世京都Ⅲ期古段階ごろ(おおむね15世紀前半代)を中心に機能しており、同新段階(15世紀末)には確実に埋没している、と判断される。

S D 54は、調査区東南隅の黒褐色土上面で検出された性格不明の浅い東西溝で、幅1m深さ30cm。出土遺物から、S D 11やS D 53とほぼ同時期の15世紀前半代に比定される。

不定形土坑は、調査区東壁付近で検出された不整形な落ち込み。埋土は白色砂と茶褐色土や黒褐色土が互層に縞状を成しており、基盤層の白色砂を採取した跡とみられる。出土土師器から中世後半以降に比定される。東調査区の北端でも南へ下る落ち込みの輪郭が確認され、同様な埋土がひろがっていることから、これと一連のものととらえられる。北東約100mのA T 27区西半でもこうした不定形土坑が検出されており〔五十川81〕、調査区の東方一帯がひろく砂採りの場所に当たっていた状況がうかがわれる。

畝溝群・植栽痕など 大溝S D 11・53で囲まれた範囲を中心に各種の痕跡がある。上面を覆う段差内堆積層や斜面堆積層と同質の褐色土や黄褐色砂混じりの褐色土が埋土となっており、大溝の埋土と色調が類似しているためそれ以外の範囲でしか検出できていないが、状況からみて、多くは大溝埋積後に一帯が耕地化した時期、すなわち16・17世紀代の様子を示す遺構の可能性が高い。ただし、植栽痕は大溝と並存していた可能性もある。

畝溝群はX=1495付近から北側に集中してみられるもので、幅2mほどの東西方向に細長い掘り込みと、その内部に幅50cmほどの浅い南北溝が並ぶ遺構。あたかも長方形区画の段々畑の畝を彷彿とさせる（図版2-2）。そして、これより南側のX=1480付近までは、幅20cmほどの東西方向の小溝が群集しており、鋤耕の痕跡とみられる。さらにその南側の一画では、一辺10cm前後深さ15cm程度の不整形のピット群が、縦横に列状を成して密集していた（図版4-5）。形状や配置から、人為的な掘り込みというよりも何らかの植物の根茎痕ではないかと想定している。以上の3つの痕跡およびその直線的な境界は、当時の土地区画にしたがったそれぞれの利用方法の差異を反映しているものと考えられる。

一方、植栽痕は、SD11北側のテラス状の平坦地部分で集中してみつかった。不定形な土坑のまとまりで、底面の凹凸は著しく、掘形の一部分が顕著にオーバーハングするほか、埋土も天地返しされたように黄褐色砂質土が貫入している状況がみられた。こうした特徴からみて、これらは何らかの樹木の痕跡である可能性が高く、段差の崖際に生け垣状に植栽されていたと想定される。また、この周囲にも、上記の根茎痕に類似したピット群が規則正しく並んで確認されたが、その密度はやや粗である。SD11との時間的な先後関係を知る手がかりはないが、仮にSD11が居館をとりまく大溝であると想定すると、その外縁の段差際に生け垣を設けることは、防御や崖の崩落防止の双方の観点からも有効であったと思われる、大溝と同時に存在していても不自然ではないだろう。

(2) 遺物（図版12～15、図20～26）

濠状の大溝SD11・53からははじめとして大量の遺物が出土しており、それぞれ遺構ごとに報告する。なお、土師器以外の分類や編年観については、それぞれ初出の箇所に示した文献に依拠している。

SD19出土遺物（I 231～I 234） I 231～I 233は土師器で、小型の皿AⅡ。I 231・I 233は一段撫で面取り手法のD₄類、I 232は素縁手法のD₃類。I 233は灰白色、それ以外は褐色を呈する。I 234は白磁皿の底部で、内外とも露胎。わずかに突出する形状で、外面は削りにより内側がくぼみ、太宰府におけるVI-1類に相当する〔横田・森田78〕。これらは、土師器の様相から中世京都I期中段階にまとまる資料といえる。

SD33出土遺物（I 235～I 251） I 235～I 246は土師器皿で、すべて赤褐色ないし褐色を呈する。I 235～I 241は大型の皿AⅠで、I 235～I 239が2段撫で素縁手法C₃類、I 240・I 241は1段撫で面取り手法D₅類。I 242～I 245は小型の皿AⅡで、I 242～I 244がD₅類、I 245がD₃類。I 246は受皿で、口径8.2cmをはかる。I 247は須恵器すり

鉢の口縁部。端部はやや下に垂れるように肥厚する。I 248～I 250は灰釉系陶器。I 248は碗の底部で、回転糸切り痕が残し、外側に開くしっかりとした高台が付く。I 249は古瀬戸の皿ないし洗の口縁部とみられ、端部は玉縁状に小さく肥厚し、内外とも黄緑色の釉がかかる。I 250は貼付高台をもつ碗の底部。内面に淡緑色、外面に灰色の釉がかかる。I 251は高台が離脱した陶器の底部で、円盤として再利用した可能性がある。器表面は無釉で淡い茶褐色を呈し、本来の外面側は回転篋削りで平らになる。これらは、2段撫で手法が卓越する土師器の様相から、平安京IV期新段階～中世京都I期古段階の資料といえる。

S D66出土遺物 (I 252～I 254) I 252・I 253は土師器の受皿で、口径はそれぞれ10.8cm・9.4cmとやや大きい。I 254は土師器皿AⅡで、2段撫で素縁手法C₃類。平安京IV期中～新段階に比定される。

S E5出土遺物 (I 255～I 263) いずれも井筒内の出土品で、I 257は水溜上面の木枠部分から出土している。I 255～I 258は土師器皿。I 255はAⅠで、1段撫で素縁手法のE₂類、I 256・I 257はAⅡでE₁類。これらはいずれも赤褐色を呈する。I 258は灰白色を呈する受皿で、口径6.2cm。I 259は東播系須恵器すり鉢の口縁。端部がわずかに上方へ肥厚する。I 260は白磁碗の口縁で、端部が大きく玉縁状に肥厚する。I 261～I 263は青磁。I 261は壺の口縁部で、端部は下方に折り返される。I 262は碗の底部とみられ、径の小さな削り出し高台が付き、高台内側は露胎。I 263は同安窯系青磁の皿。底部付近の外面は露胎。これらの資料は中世京都Ⅱ期のうちに収まる内容といえよう。

S D11出土遺物 (I 264～I 341) I 264～I 271は土師器皿。I 264～I 268はE₄類で、I 264はAⅠ、それ以外はAⅡ。いずれも褐色を呈し、口縁部分のみが肥厚する薄い器壁であるため底部との境で破損して残りが悪い。I 269～I 271はF₂類で、I 269・I 270はAⅠ、I 271はAⅡ。やや厚手の器壁をもち、底部から斜め上方へと直線的に立ち上がる器形で、口縁端部を短くつまむ。色調は口縁付近が淡橙色、それ以外が白色を呈する。

I 272～I 284は瓦器ないし瓦質土器。I 272は鍋。逆L字状に立ち上がる口縁部が水平にとりつく。I 273～I 277は羽釜で、いずれも口縁がほぼまっすぐ立ち上がる形状のもの。I 274～I 277は端部が外傾するように面取りされ、口唇先端が尖る。I 277は端部からかなり下がった位置に幅広の鐙をもつ。I 278～I 281は火鉢ないし風炉の口縁部。I 278・I 279は強く肩の張る器形で、I 278では口縁下の2条の突帯間にスタンプによる入組文がめぐる。I 280・I 281は口縁が直立する器形で、平面形は輪花状にしていた可能性が高い。外面に花文のスタンプを押捺する。I 282は盤の口縁部で、口唇が内側に肥厚する。内面

中世の遺跡

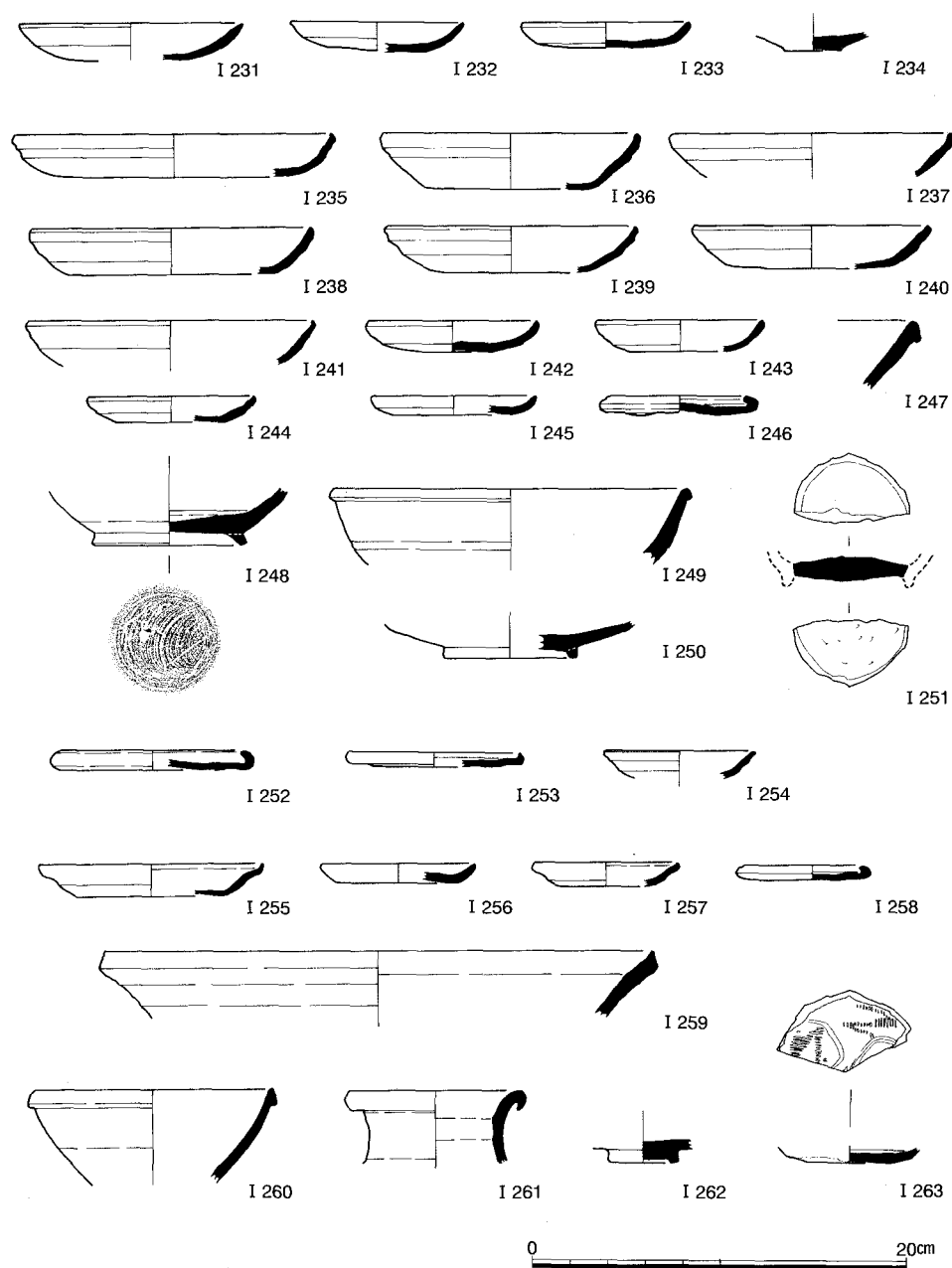


図20 S D19出土遺物 (I 231～I 233土師器, I 234白磁), S D33出土遺物 (I 235～I 246土師器, I 247須恵器, I 248～I 250灰釉系陶器, I 251陶器), S D66出土遺物 (I 252～I 254土師器), S E 5出土遺物 (I 255～I 258土師器, I 259須恵器, I 260白磁, I 261～I 263青磁)

にタール状のものが付着している。I 283は獣脚で、表面は全面研磨して丁寧に作られている。風炉や香炉に付く脚部であろう。I 284は五徳かと想定される土師質の製品で、口縁内側に容器を据えるための瘤状の突起が、その両側に窓状の切り込みが設けられる。また、外面には扁平な突帯が貼り付けられている。

I 285～I 292は甕の口縁部と胴部片。各地の中世窯の製品があるなかで、常滑焼が目立つ。I 285は東播系須恵器で、口縁部は強く折れ曲がり、端部が上方へ肥厚する。頸部には斜方向の叩きが残る。I 286～I 289は常滑焼の各段階の口縁形態。I 286は1型式段階で、須恵器と同様な色調を呈し、口唇の内側に凹線をもつ。I 287～I 289は暗赤褐色の色調を示し、端部がつままれたり上下への肥厚が顕著となるもので、それぞれ4型式、5型式、7型式段階に比定できる〔中野95〕。I 290は、先端が外反する縁帯状を呈し、長石を多量に含む胎土や明るい赤褐色の色調から信楽焼とみられ、KB2類に相当する〔木戸95〕。I 291・I 292は常滑焼に特徴的な格子状スタンプ文が押捺されている胴部破片で、I 291は帯状に連続し、I 292では単独で施される。

I 293～I 297はすり鉢で、甕と同様各地の製品があるが、産地に顕著な偏りはみられない。I 293・I 295は備前焼で、ともに堅く焼き締まり、内面に9条以上のすり目をもつ。口縁の拡張しないI 293は3期、上下に大きく発達するI 295は4期に、それぞれ比定される〔間壁91〕。I 294・I 296は信楽焼で、ともに胎土中に長石粒を多く含む。I 294は焼成が甘く乳白色の色調を呈し、2条程度の不安定なすり目がみられる。I 296は明るい赤褐色を呈するが、すり目の有無は不明。信楽でのすり目の出現は15世紀代とされることから、これらもおおむねそのころの製品とみられる。I 297は東播系の須恵器で、端部が上方に肥厚して受け口状を呈し、神出窯の末期段階の製品だろう。

I 298～I 315は灰釉系陶器。いわゆる「古瀬戸」であり、I 298～I 310は淡黄緑色の灰釉が施され、I 311～I 315は黒褐色の鉄釉が施される「天目」である。I 298～I 301は折縁深皿で、口縁端部が短く外折し、I 300には注ぎ口がある。またI 298は、内面に施釉前の波状文様が施されているほか、口縁外面に重ね焼きによる融着痕がある。I 302～I 304は平碗で、ゆるやかにふくらみをもってたちあがり、口縁端部は尖る。いずれも底部付近の外面は露胎で、回転斲削りされる。I 303は削り出し高台の底部が一部残る。I 305は花瓶とみられ、小さく突出する底部に回転糸切り痕が残る。I 306～I 310は各種の底部。いずれも内面にのみ施釉されている。I 306は扁平で径の大きなもので、内面に幅広の凹線が1条めぐる。皿類の底部であろう。I 307・I 308は碗類の底部で、削り出しにより底部

中世の遺跡

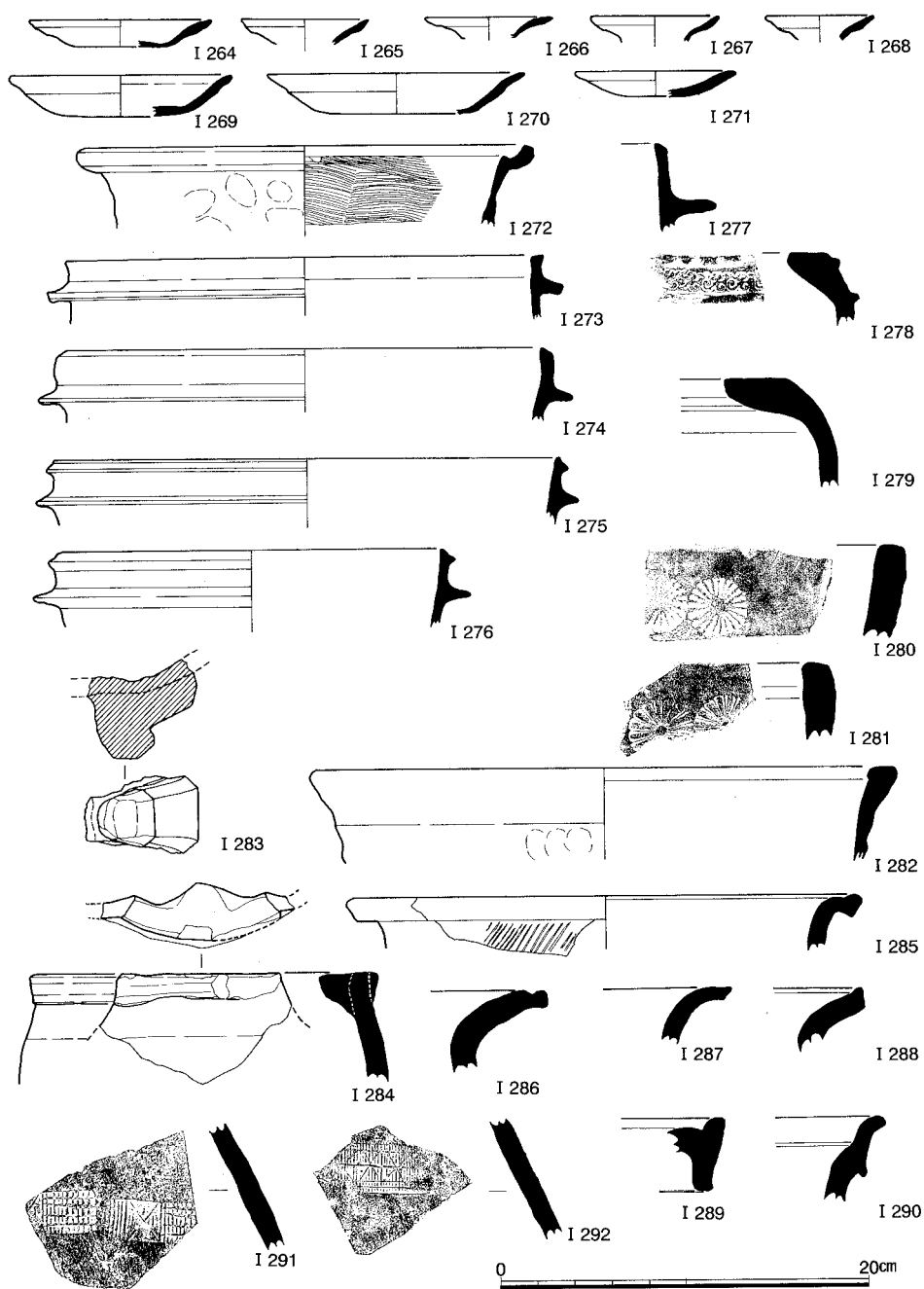


図21 S D11出土遺物(1) (I 264～I 271土師器, I 272～I 284瓦器, I 285・I 286須恵器, I 287～I 292陶器)

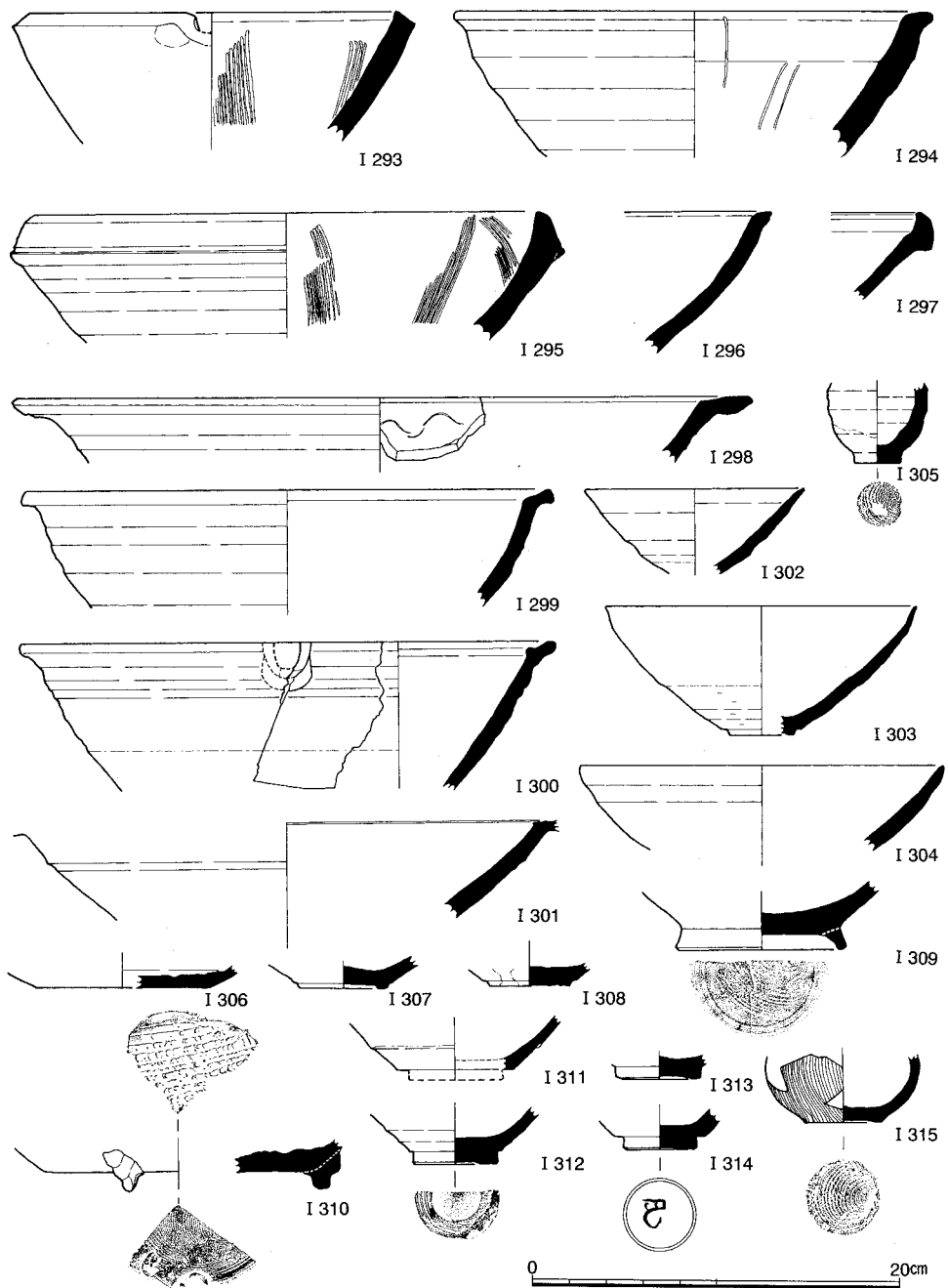


図22 SD11出土遺物(2) (I 293～I 296陶器, I 297須恵器, I 298～I 315灰釉系陶器)

中世の遺跡

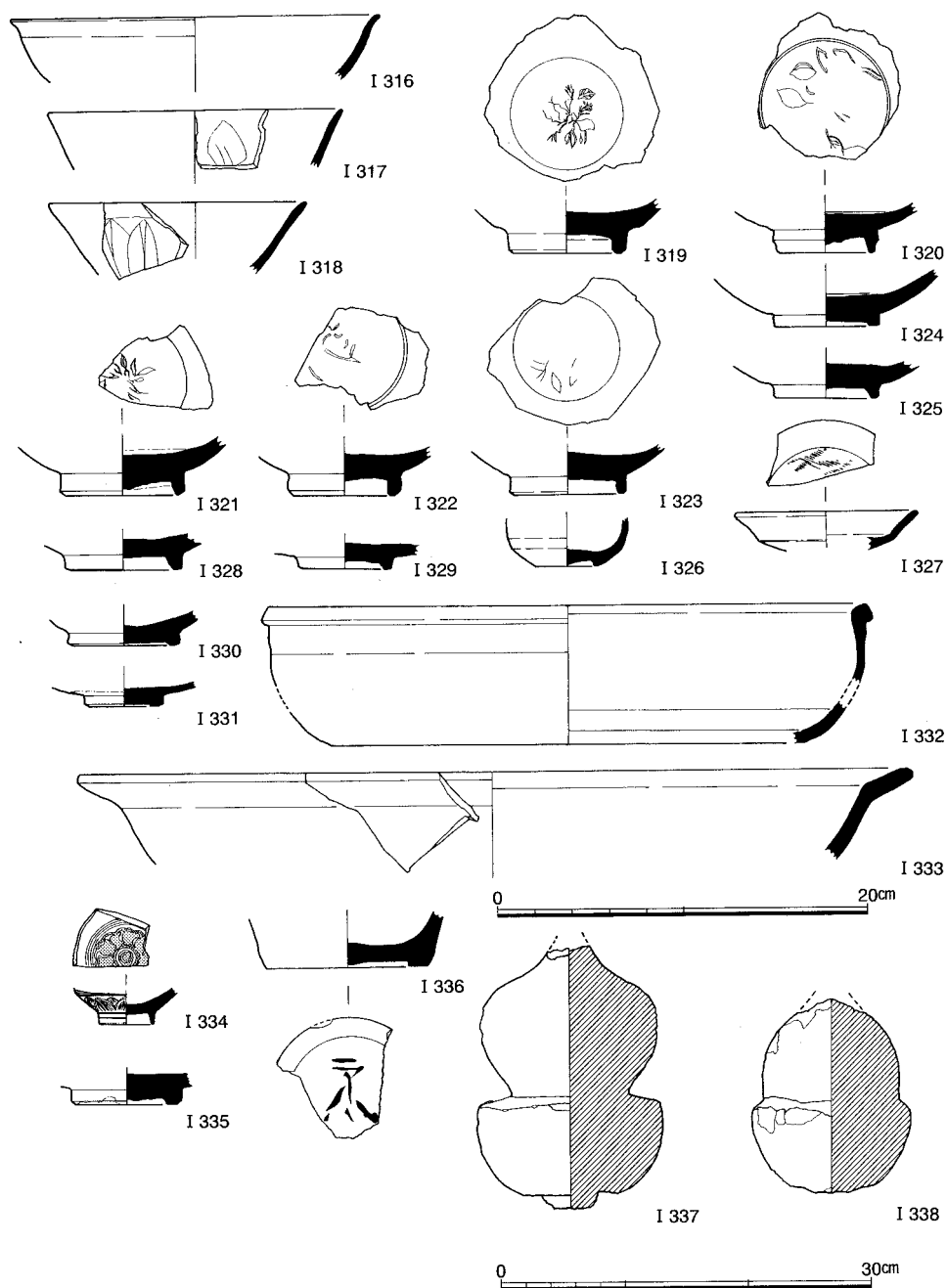


図23 S D 11出土遺物(3) (I 316～I 327・I 333青磁, I 328～I 331白磁, I 332緑釉陶器, I 334青花, I 335・I 336陶器, I 337・I 338石製品) I 337・I 338縮尺1/6

の突出と低い高台が成形されており、篋削りの方向は時計回りである。I 307の高台畳付には回転糸切り痕が削られずに残る。I 309は、回転糸切り痕のこの底部に、おおぶりの断面方形の高台が貼り付けられ、周辺を撫でて丁寧に仕上げる。大型の椀ないし鉢類の底部であろう。I 310は卸皿で、内面に卸目があり、外面には胴部への立ち上がり部分に瘤状の脚が貼り付けられる。I 311～I 314は天目茶碗の底部。内面は黒褐色の鉄釉が厚くかかり、外面は露胎。いずれも削り出しにより成形されている。I 312では幅広で低平な高台が削り出されており、畳付けには高台を成形する前の回転糸切り痕がそのまま残される。I 313・I 314は浅い凹み底で、I 314には墨書がある。I 315は小さな壺形の器形の下半部で、内面は黒褐色の厚い鉄釉が施されるが、外面は櫛歯状工具による縦方向の条線が全面を覆っており、底部も含め全面が錆釉による暗茶褐色を呈する。以上の灰釉系陶器の一群は、貼り付け高台をもつI 309が中世前半期に比定される以外は、すべてが削り出し高台であり、椀皿類などの日常雑器が主体を占める内容であることから、おおむね古瀬戸後期様式に帰属するものであろう〔藤澤96〕。

I 316～I 334は貿易陶磁で、I 316～I 327・I 333は青磁。I 316～I 325は椀類で、胴部に鎬蓮弁文、見込みにスタンプによる花文をもつものが目立ち、太宰府でのI-5類あるいは14世紀以降を対象とした分類のB-IV類に比定される〔上田82〕。底部外面の施釉は、全面施釉（I 319～I 321）、高台内側の中心部分を輪状に削り取り（I 322）、高台より内側のみ露胎（I 323）、畳付も含め全面露胎（I 324・I 325）、の各種がみられる。I 326は合子の下半部。底部は削りによる凹み底で露胎。I 327は皿で、櫛目による鋸歯状文様をもち、外面下半が露胎。I 333は洗の口縁部とみられ、全面に厚い釉がかかる。これらは、釉調で明るい青緑色や青灰色系（I 316・I 319・I 321～I 323・I 326・I 333）とそれ以外の暗い黄緑色系とに大別されるが、文様から同安窯系とみられるI 327以外は、ほとんど龍泉窯系だろう。I 328～I 331は白磁の底部。いずれも高台周辺以下の底部は露胎。うち、I 331はやや特異で、削り出しによる小さく不安定な高台をもち、胎土が粗く、釉調もわずかに黄色味を帯びている。I 332は緑釉陶器の盤で、玉縁状の口縁部をもち、内面底部に圈線がめぐる。濃緑色の釉調を呈する。I 334は磁器青花の底部。内面見込みに花文、外面に蓮弁文を描く。高台は畳付のみ露胎。

I 335・I 336は産地不明の陶器。I 335は、胎土は緻密で赤褐色を呈し、器壁は厚く、にぶい黄白色の釉がかかる。低平な高台が削り出しにより成形され、畳付から内側は露胎。I 336は、夾雑物が含まれる粗放な黄褐色の胎土で、外面の上半は自然釉の発色とみられ

る灰白色を呈する。底部外面は回転斲削り調整され、「京」と読める墨書がある。それ以外は回転撫で調整。胴部に向けて斜め上方へ直線的に立ち上がり、壺形の器形になるものと想定される。

I 337・I 338は石製五輪塔の一部で、最上部の空輪・風輪を一石で彫ったもの。花崗岩製でかなり脆く、とくにI 338は原形をとどめないほど風化している。また、表面に刻字の痕跡は認められない。I 337は、頂部を欠くほかは本来の状態をうかがうことができ、風輪には、下側の火輪に据えるための突起が良く残っている。空輪は、上半部の張り下半のくびれの発達した宝珠形を呈し、全体として幅よりも高さが勝っている。室町期以降の五輪塔は、全体として狭長化してバランスを崩していくとされるが〔川勝39〕、本例にもそうした傾向がうかがわれる。

I 339～I 342は建築物に使用されていたとみられる金属製装飾品。うちI 339～I 341は、長押の釘隠、懸魚あるいは扉の飾りである六葉など花卉状装飾の、円柱形中心部分を構成する「樽の口金具」ではないかと推測される。出土時に覆われていた厚い錆を落としたところ、多くの情報が得られた。主体部分は鉄製で、I 339の円柱部には、頂面に銀象嵌により蓮華文の蓮弁と蓮子を表現した装飾がみられ、また釘部側下端には細かな波状縁部を

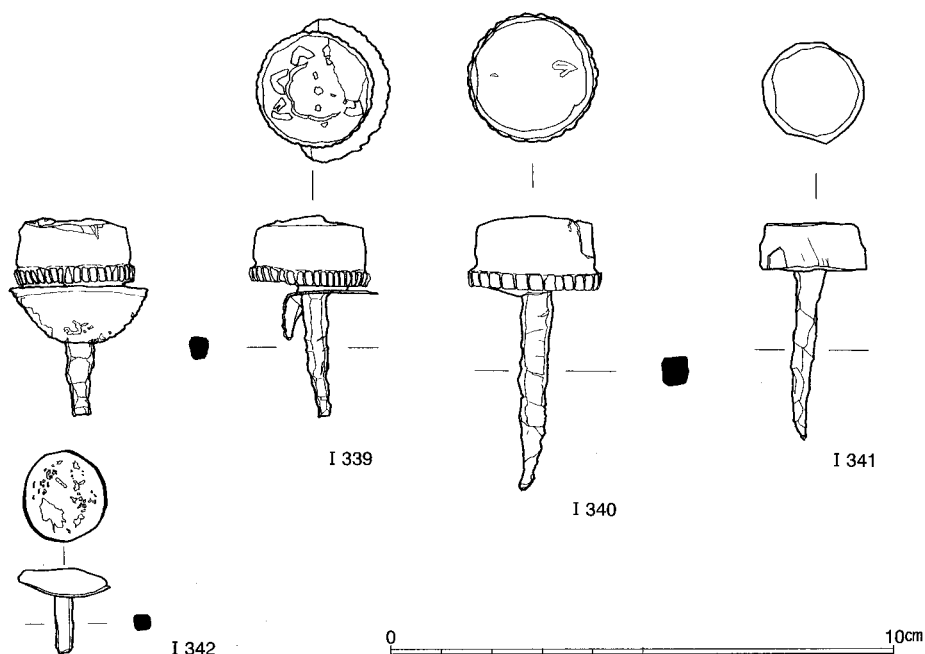


図24 SD11出土遺物(4) (I 339～I 342金属製品) 縮尺2/3

もった金銅製リングがめぐって菊座に相当する装飾を表している。このほか、薄い円形の銅板が釘部の根本まではめ込まれた状態で遺存している。I 340では、波状縁部をもつ菊座風の装飾はみられるものの、円柱部に金銅のリングをめぐらせているのではなく、厚みのある5円玉状の製品を釘部の根本まで差し込んだものであるという、I 339との構造の違いがうかがわれる(図版15参照)。また薄い円形銅板はともなっていない。I 341もこれらと同様な製品とみられるが、鉄製部分以外残っていない。なお、円柱部と釘部とが一体か結合式かを検討するためにX線透過も行ったが、明らかに出来なかった。I 342は青銅製の鋳で、円みを帯びた頂部には金箔が残る。この頂部は中空で、湾曲した2枚の青銅円板を組み合わせるによりボタン状のふくらみが造られている。

以上のほか、動物骨や歯も若干量出土しているが、老齢の馬歯と認定できる1点を除いていずれも小さな断片であり、詳細な鑑別はできなかった。

このように、SD11からは多種多様な資料が出土しており、その年代は、一部中世前半期のものが混じるものの、基本的に中世後半期といえる。なかでも、土師器皿類にはF₂類が目立つこと、瓦器では椀類が全くみられないこと、1点ではあるが舶載の染付が含まれること、などを考慮すると、明らかに15世紀以降が中心であり、中葉ごろまでの資料が含まれているといえる。よって、溝が機能していた年代の中心をおよそ15世紀前葉～中葉に、その終焉を後葉ごろに比定できよう。

SD53出土遺物(I 343～I 374) I 343～I 348は土師器。I 343・I 344は皿A Iで、F₂類。桃白色を呈し、ともに口縁端部は短くつまむが、I 343は外反、I 344は内湾気味に仕上げるという微妙な違いがある。I 345・I 346・I 348は皿A II。I 345はE₄類で、褐色を呈する。口縁は強く外反し端部が肥厚する。I 346・I 348はこれと異種の皿で、浅いが厚手でしっかりとしたつくり。I 346は橙褐色、I 348は灰白色を呈する。I 347は凹み底小椀。厚手で桃白色を呈し、口縁端部をつまむなど、F類の皿と共通した特徴を示す。

I 349は瓦器の器台状製品。外面に暗文が1条みられる。内外面とも丁寧に仕上げられている方を受部とみなして仮に器台として扱ったが、天地を逆にした場合は花瓶や仏飯の脚部となる可能性がある。いずれにしろ類例はない。

I 350～I 354・I 372～I 374は国内諸窯産の陶器。I 350～I 352・I 372は甕。I 350・I 372は強く外反し端部が上下に肥厚する口縁部で、I 372は器壁が薄手でシャープなつくりだが、I 350は厚手で鋭さに欠ける。いずれも常滑産で、6a型式と7型式に相当する。I 351は、端部の肥厚が進んで縁帯化した口縁部で、弱い受け口状をなす。胎土の特徴か

ら信楽とみられ、KB 2 類に比定される。I 352は常滑産の甕の肩部で、格子状のスタン
プ文が連続してめぐる。I 373は信楽産とみられる壺。肩が強く張る器形で、口縁端部が
短く外折し、TA 3 類に比定される。I 353～I 355・I 374はすり鉢。I 353は信楽で、口
縁端部は横撫でにより短く外反し、細くすばまる。条線の有無は不明。I 354・I 374は備
前。I 354は端部が屈曲して真上に立ち上がる口縁部で、屈曲部は下側へ肥厚し、色調は
暗赤褐色。I 374は内面に6条の条線をもち、堅く焼き締められて灰色を呈する。それぞ
れⅣ期とⅢ期に比定される。I 355は東播系須恵器で、口縁端部が受け口状をなす。

I 356～I 362は灰釉系陶器の「古瀬戸」。I 356はラッパ状に大きく開く口縁部で、内外
面とも施釉される。後期様式特有の尊式花瓶だろう。I 357は卸皿。口縁部は水平な面を
もち、その部分を中心に施釉される。I 358・I 359は、口縁が水平に近く外反する折縁深
皿。I 358は端部が幅広く上方へ肥厚し、段状を呈する。I 360～I 362は黒褐色の鉄釉が
かかる天目。I 360は椀で、口縁下に低い段をもち、口唇部は外反気味に細くすばまる。
I 361は合子で、水平に近い肩部から胴部へは直角に近い角度で屈曲する。I 362は椀の底
部で、削り出しにより凹み底を成形している。外面の底部周辺には薄い茶褐色の錆釉がか
かり、外面上半と内面は厚い鉄釉がかかる。

I 363～I 370は貿易陶磁。I 363～I 367は青磁椀の底部で、いずれも龍泉窯系とみられ
る。高台の内側は回転範削りや撫でで仕上げて露胎、それより外側および内面に青緑色の
釉がかかる。I 364は見込みに飛雲文、I 363・I 365・I 366はスタンプによる花文が認め
られる。I 368～I 370は白磁。I 368は椀の底部で、削り出しによる低く扁平な高台をも
つ。内面のみ施釉がみられる。I 369は椀の口縁から胴部で、器壁は薄く、胴部にふくら
みをもつて立ち上がり、口縁端部が短く外折する。内外全面に、ややくすんだ白色の釉が
かかる。I 370は小型の梅瓶の肩の部分で、沈線区画により輪花状をなす。

I 371は、産地不明の陶器で、壺状の器形の胴部とみられ、外面に指頭で押捺された突
帯がめぐっている。胎土は赤褐色で、外面は茶褐色の釉が薄くかかる。

以上は、SD 11と内容的にほとんど同じであり、同様な年代観でとらえて良からう。

SD 54出土遺物 (I 375～I 380) I 375～I 377は土師器皿でいずれもF₂類。I 378
は瓦器盤の口縁で、端部が内側へ大きく肥厚する。I 379・I 380はすり鉢の口縁。I 379
は、口縁端部の器壁が、厚手になりながら先端が短く外折する器形で、信楽のB 1 類。
I 380は、口縁端部が縁带状を呈する器形で、備前のⅣ期に比定される。以上の内容は、
SD 11・53と同様15世紀前葉を中心とする時期のものといえる。なお、図示していないが、

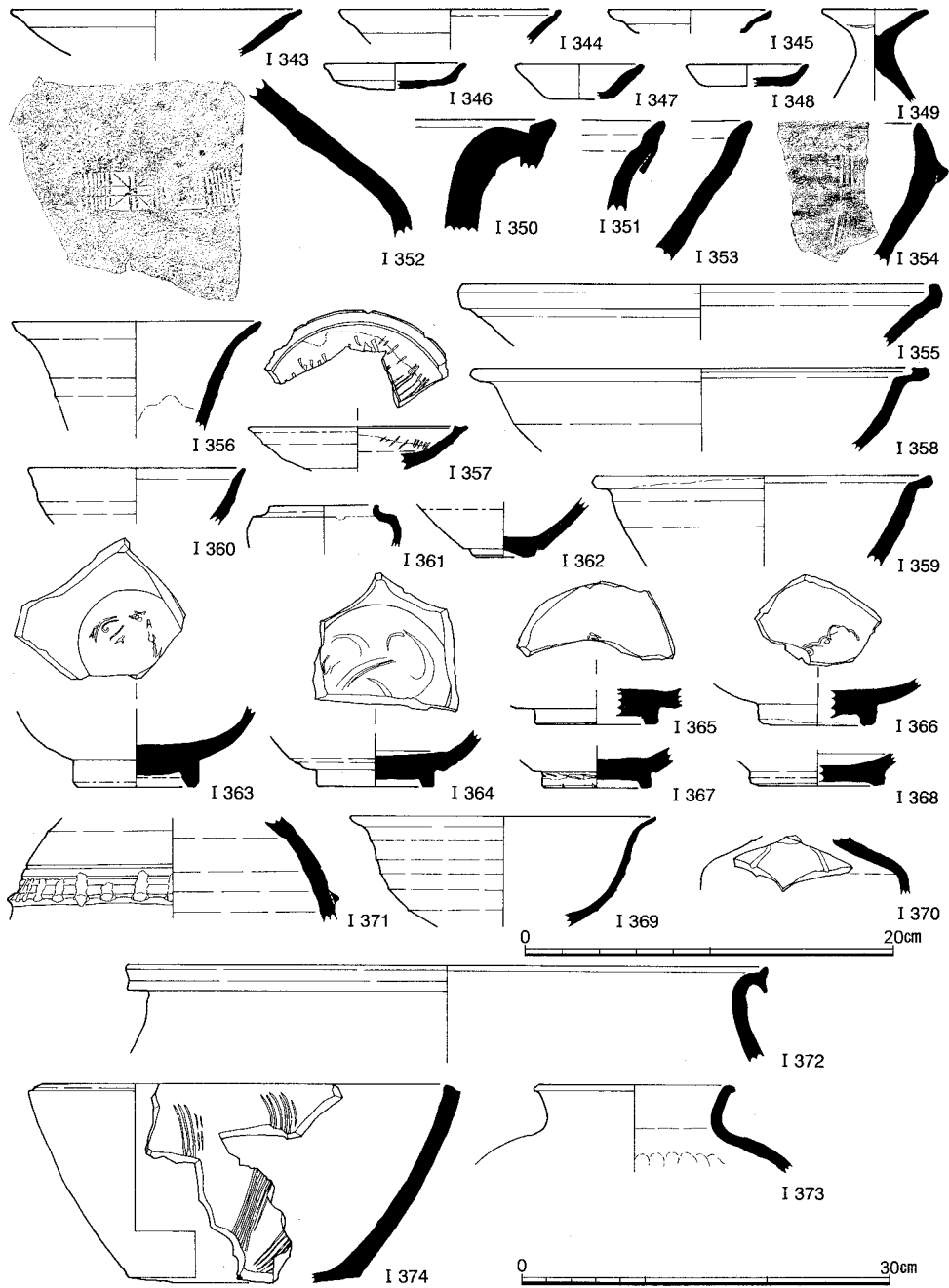


図25 S D 53出土遺物 (I 343～I 348土師器, I 349瓦器, I 350～I 354・I 371～I 374陶器, I 355須恵器, I 356～I 362灰釉系陶器, I 363～I 367青磁, I 368～I 370白磁) I 372～I 374縮尺1/6

中世の遺跡

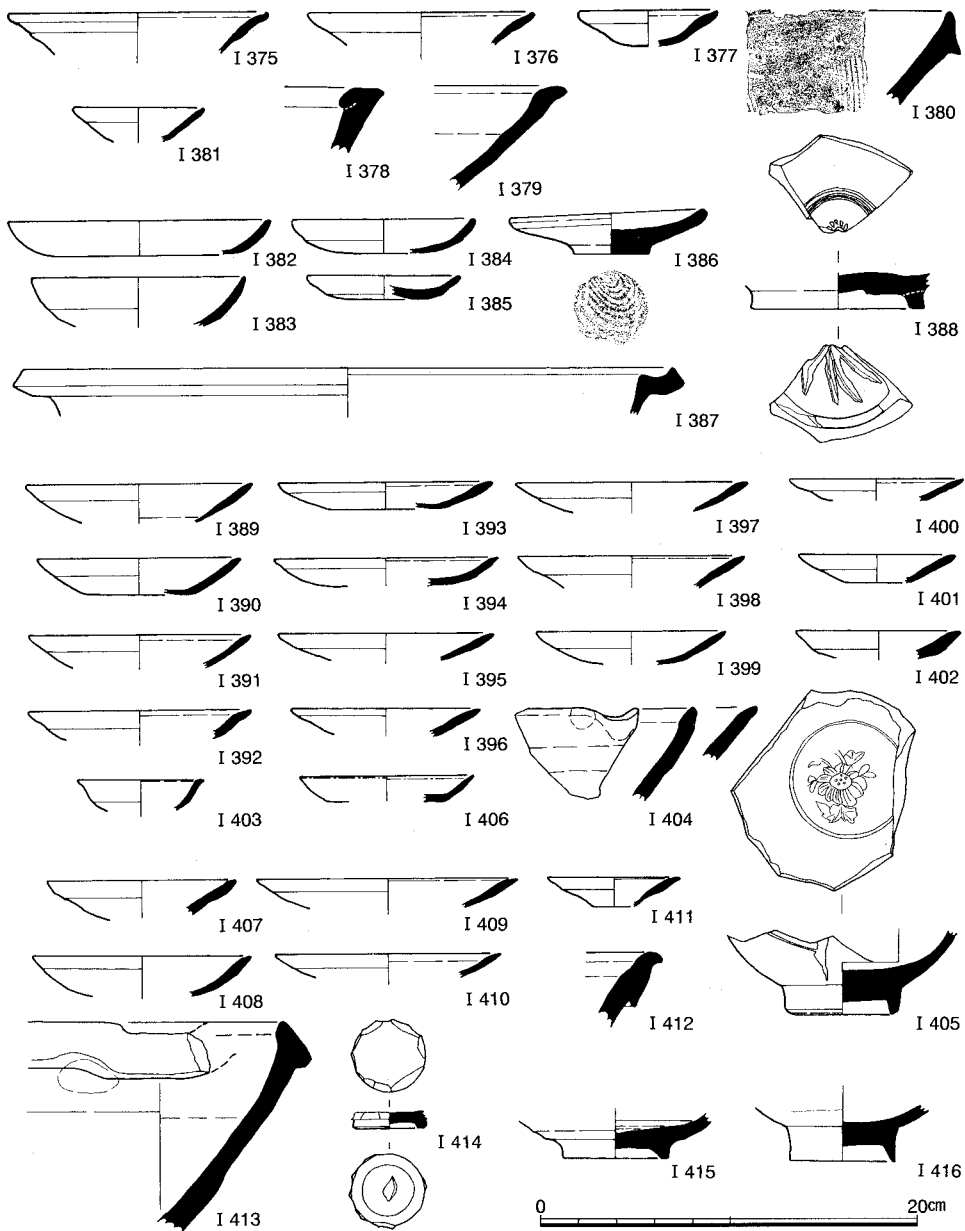


図26 S D54出土遺物 (I 375～I 377土師器, I 378瓦器, I 379・I 380陶器), 不定形土坑出土遺物 (I 381土師器), 茶褐色土出土遺物 (I 382～I 386土師器, I 387瓦器, I 388灰釉系陶器), 段差内堆積層出土遺物 (I 389～I 402土師器, I 403瓦器, I 404陶器, I 405青磁, I 406白磁), 斜面堆積層出土遺物 (I 407～I 411土師器, I 412・I 413陶器, I 414～I 416白磁)

埋土中より北宋の元祐通寶（1086年初鑄）が出土している。

不定形土坑出土遺物（I 381） 灰白色を呈する凹み底小椀 I 381が1点のみ出土した。砂の採取が中世後半期以降に下るものであることを示していよう。

茶褐色土出土遺物（I 382～I 388） 同層出土の中世の遺物は前半期を中心とする。I 382～I 386は土師器。I 382・I 383は赤褐色を呈する皿A I，I 384・I 385は同A IIで、いずれもD₃類。I 386は底部に回転糸切り痕を残す皿で、灰白色を呈する。内外全面の仕上げも回転撫でによっている。I 387は瓦器鍋の口縁で、水平に近く外折している。I 388は灰釉系陶器古瀬戸の底部。しっかりとした貼付高台をもち、その内側に太く鋭い放射状の篋描文様を施す。内面は淡緑色に施釉され、圏線と花文がみられる。

段差内堆積層出土遺物（I 389～I 406）・斜面堆積層出土遺物（I 407～I 416）

これらは、中世遺構埋没後の上面に堆積した層から出土した遺物で、遺構の廃絶時期の下限や、一帯が耕地化した時期を知る上で重要である。

I 389～I 402・I 407～I 411は土師器皿。薄手の器壁で、底部から斜め上方へ直線的に立ち上がり、口縁端部がわずかに外折する器形のものが主体となり、F₄類に比定される。色調は淡褐色～橙褐色を呈し、口縁端部に煤が付着したものが目立つ。

I 403は瓦器のミニチュア椀。I 404・I 412・I 413は国内諸窯産のすり鉢や甕の口縁。I 404は信楽産すり鉢で、口縁端部の内側に面をとる。I 413は須恵質の焼成のすり鉢で、口縁端部は大きく上下に肥厚する。備前のIV期とみられる。I 412は甕の口縁で、肥厚して縁帯状を呈し、先端が短く外折する。信楽のKB 5類に比定される。

I 405・I 406・I 414～I 416は貿易陶磁。I 405は青磁椀で、見込みに花文スタンプと圏線をもち、外面におおりの蓮弁状装飾がみられる。施釉は高台の内側まで及び、それより内側は露胎。I 406は白磁で、口縁端部の内側のみ露胎する口禿の皿。I 414は白磁の底部で、小ぶりの高台をもった破片を打ち欠き円盤状に成形する。I 415・I 416は白磁椀底部。I 415は低平な高台をもち、内外全面にややくすんだ白色釉が厚く施される。I 416は細く高い直線的な高台を削り出して成形する椀V類。高台周辺は露胎。

以上の資料は、土師器の様相についてみると、山科寺内町の一括出土資料と形式的に近く〔岡田・浜崎85〕、16世紀代のものを含む内容とみなせる。したがって、これらの下層となる濠状の溝S D 11・53が遅くとも15世紀のうちには埋没し、16世紀代以降に一帯が耕地化していったことが、あらためて確認されるといえよう。

6 古代・中世の瓦類

古代・中世の瓦類は、出土状況には恵まれていないが、軒瓦を中心に量・種類ともにかなりにのぼるため、ここでまとめて報告する。なお説明の便宜のために、軒丸瓦はKCM、軒平瓦はKCHとし、瓦当文様モチーフの違いにもとづいてアラビア数字で区分する型式番号を付した。各型式はさらに、細部の違いを大文字アルファベット記号で、モチーフ以外の細かな違いを小文字アルファベット記号で細分した。ただし、ここでの型式区分の大別と細別は範の異同は考慮していない。よって、同一型式に属するものでも、見かけ上文様が同一というだけで、異範のものも含まれ得る。これは、瓦当残存率が低い同範関係まで決めかねる個体が多く、型式区分に反映させることが困難だったからである。

(1) 軒丸瓦 (図版16・17, 図27～29, 表2)

文様不明の9点を含め総計91点が出土し、KCM1～23に区分した。KCM20までは蓮華文系統で、多くが1型式1点。主体はKCM22を中心とする巴文瓦である。これらの巴文瓦は、溝SD11・53やその上面の包含層を中心に出土し、13世紀前葉以前に比定されるSD19・33・55・56からは出土していない。調査区一帯での巴文瓦の使用年代を考えるうえで示唆的な結果といえる。以下、型式別に説明する。

KCM1 (I 417) 単弁八葉蓮華文で、一段くぼむだけで圏線を持たない中房の中心に1個の蓮子を置く。おおぶりで肉厚の蓮弁で、外周に界線をもたないため外区は存在せず、範の押しつけにより自然に盛り上がった部分が周縁となる。瓦当内面から筒部にかけて連続する粗い布目痕があり、一本造りであったことがわかる。焼成はやや軟質で灰白色を呈する。六葉の類品は内裏跡にあり (『平安京古瓦図録』の137番, 以下「平古137」のように略記), 平安中期の今熊野池田瓦屋終末期の製品と同範とみられている [大谷高等学校法住寺殿跡調査会84 NM15]。なお、未掲載であるが、西南方200mのAO22区で、平安中期の井戸SE29から同範品が1点出土している [京大埋文研99 p.28]。

KCM2 (I 418・I 419) 突線で表した蓮弁の中央に稜線をはしらせて複弁とし、弁間にのぞき蓮弁を配した複弁四葉蓮華文。外区圏線2条のうち、内側のものが蓮弁に接するものをA、離れるものをBと区分した。Aは、外区周縁が幅をもち、1+8とみられる蓮子を配した中房が残る。双方とも瓦当裏面に絞りをもつ布目痕があり、硬い須恵質の焼成である。類品に内裏蘭林坊跡出土の平古148のほか、平安京左京二条二坊高陽院跡の苑池出土品があり、美作からの搬入瓦の可能性が指摘されている [前田94 図2-130]。

KCM3 (I 420) 幅広の蓮弁部分のみ残る。単弁八葉蓮華文である可能性が高い。瓦当面に緑釉が塗布されていた痕跡が残るが、かなり摩滅している。裏面は筒部の剥離した痕跡が残り、撫で調整されている。

KCM4 (I 421) 中央に子葉をもつ複弁蓮華文で、八葉になるものと思われる。蓮弁をふちどるように圈線がはしり、外区はおおぶりの珠文が密にめぐる。裏面は剥離して不明。焼成はやや甘く灰色を呈する。

KCM5 (I 422) 蓮弁を太い突線で表し、弁の中央にも突線を通す。表面がかなり荒れているが、残存部からみて互いに接した単弁八葉蓮華文で、中房は1+4の蓮子、外周に1条の圈線がめぐるモチーフとみられる。裏面には筒部の剥離痕と撫で調整が残り、焼成はやや甘く灰色を呈する。

KCM6 (I 423) 複弁蓮華文で、弁間文として同様な複弁がのぞいた様子を表す。東洞院大路跡出土の平古160に同様なモチーフがある。おそらく六葉で、圈線で区画する中房には蓮子を、外区に珠文をもつのは確実だが、数は不明。筒部は接合式で、瓦当裏面ともに粗い撫で調整。焼成はやや甘く灰色を呈する。

KCM7 (I 424) 大きく突出する中房を圈線で囲み、その周囲に立体感の乏しい小ぶりの蓮弁を配する。蓮弁どうしが融着して個々の輪郭が不鮮明であるが、複弁八葉蓮華文を意図したモチーフとみられる。外区に珠文が推定6個配され、周縁は大きく突出する。裏面は筒部の剥離痕と強い撫で調整があり、硬い須恵質の焼成である。朝堂院跡出土の平古140に類似し、文様と技法から平安後期の丹波系瓦屋の製品と判断される。

KCM8 (I 425) 細い突線で描出された蓮弁内にわずかに盛り上がる2個の蓮弁を配した複弁六葉蓮華文。中房はわずかに突出し、推定1+5ないし1+6の蓮子をもつ。周縁は幅狭く突出し、外周は篋削り。瓦当裏面は撫で、硬い須恵質の焼成。内裏跡出土の平古204や尊勝寺跡出土品に同文が知られ〔奈文研編61 PL.35-45A〕、文様と技法から播磨系瓦屋の製品とみられる。

KCM9 (I 426) 中房に1+5ないし1+6の蓮子を配し、中央の蓮子は圈線で囲む。瓦当面はやや荒れているが、蓮弁が太い輪郭線で表される単弁八葉蓮華文で、外区に珠文推定10個を配する。外周は縦位に、裏面は不定方向にそれぞれ撫で調整。砂粒を多く含む胎土で、焼成は硬く青灰色を呈する。内裏跡出土の平古96のほか、右京区森ヶ東瓦窯に同文品がみられる〔平田88 図2-1〕。

KCM10 (I 427) 小片で全体は不明だが、残存する蓮弁の輪郭線が中途までしか

古代・中世の瓦類

表2 軒丸瓦の遺構別出土点数

型式	遺構		SD 55	SD 56	SD 19	SD 33	SD11		SD53		その他 中世遺構	茶褐色土	段差内 堆積層	斜 面 堆積層	上層混入	計
							(上層)	(下層)	(上層)	(下層)						
KCM 1									1							1
KCM2A			1													1
KCM2B			1													1
KCM 3							1									1
KCM 4								1								1
KCM 5			1													1
KCM 6			1													1
KCM 7									1							1
KCM 8									1							1
KCM 9					1											1
KCM10							1									1
KCM11						1			1							1
KCM12									1							1
KCM13							1									1
KCM14									1							1
KCM15									1							1
KCM16		2			1										1	4
KCM17A					1	1										2
KCM17B															1	1
KCM18					2						1		1			4
KCM19													1			1
KCM20							1		1	1			3			6
KCM21									1				1			1
KCM22Aa									1							1
KCM22Ab										1					1	2
KCM22Ba							2		1	1		3				7
KCM22Bb							1				1	1				3
KCM22Ca							1									1
KCM22Cb												1	1	1		3
KCM22Cc							1	1	3	6			2			13
KCM22Da									1							1
KCM22Db											1					1
KCM22Dc							1	1								2
KCM22Dd									2						2	4
KCM22X							1			1	1		1			4
KCM23													1	1	3	5
*KCMX		2					1					1	4	1		9
計		8	0	1	5	13	3	11	13	3	3	11	10	10		91

*KCMX：瓦当文様不明の軒丸瓦

切れ込まないので、複弁蓮華文だろう。この輪郭線は圈線も兼ね、外区には珠文をもつ。裏面は撫で調整で、焼成はやや甘く黒色を呈する。朝堂院跡出土の平古170と類似する。

KCM11 (I 428) 窪んだ中房におおぶりの蓮子1+6を置き、圈線・蓮弁・子葉のすべてを幅広い突線で描出する単弁六葉蓮華文。蓮弁外縁のふくらみはほとんど表現されておらず、わずかに屈曲するのみである。一段窪む外区をもつが、残存部位には珠文はみ

られない。範面には木目痕があり、瓦当の外周は縦位の篋削り、裏面には筒部の剥離痕と撫で調整がみられる。焼成はややあまく灰白色を呈する。

KCM12 (I 429) KCM11と同様に蓮弁が太い突線で表されるが、しっかりとした外区との圏線をもつため、中房周囲に放射状に蓮弁が連なるモチーフになろう。外区に突起状の珠文を配し、幅広でやや高い周縁部をもつ。焼成はやや甘く暗灰色を呈する。三条西殿跡出土の平古225が同文になるものと見られる。

KCM13 (I 430) 範が浅く不鮮明だが、圏線で区切られた中房に1+4の蓮子を置き、蓮弁や子葉を突線で表す単弁八葉蓮華文だろう。蓮弁外側の輪郭線が圏線を兼ね、外区に珠文をもつ。周縁は幅広く高い。焼成はややあまく黒灰色を呈する。尊勝寺跡出土品と同文だろう〔奈文研編61 PL.36-64〕。

KCM14 (I 431) 細い突線で蓮弁を表し、子葉と弁間文は先の尖った縦線となる複弁推定六葉蓮華文。外区は2条圏線に挟まれた珠文帯で、幅広く低い周縁の輪郭は楕円形になるものとみられる。外周、裏面とも撫で調整で、焼成はやや甘く灰色を呈する。同文には栗栖野瓦窯〔吉村93 図24-21〕、民部省跡の平古218があり、この系統は、平安後期の栗栖野瓦屋系軒丸瓦として、伝統的モチーフを踏襲した最後の一群とされている。

KCM15 (I 432) 突線による子葉をもった陰刻による蓮弁が連なり、その内側に珠文帯と圏線をもつ。東福寺出土の完存品によれば〔大本山東福寺90 図22-2〕、中房に相当する圏線の内側には、右巻きに頭部を巻き込む右巴文が配される（以下、巴文は頭部が巻き込まれる方向により表記する）。また外区はなく、全体の輪郭は楕円形を呈する。裏面は撫で調整で、焼成はやや甘く黒色を呈する。同文品の出土から栗栖野瓦窯産である可能性が高い〔京都市埋文研86 図版11-7〕。

KCM16 (I 433) 単弁十葉蓮華文。蓮弁外縁の輪郭ははっきりした陰刻になるが、突線によるそれ以外の表現は浅い。KCM13とモチーフとしては類似するが、中房径が小さく蓮子を持たない点、周縁が低く幅広いもので輪郭が楕円形である点が異なる。外周下半は篋削りされ、裏面は筒部剥離痕と指頭圧痕による著しい凹凸がみられる。焼成はやや甘く暗灰色を呈する。この種の楕円形軒丸瓦は、中央官衛系瓦屋第Ⅲ期～Ⅳ期（12世紀中葉）に位置づけられる〔上原78〕。

KCM17 (I 434・I 435) KCM13や16とモチーフは類似するが、蓮弁は太い突線のみで描かれる単弁蓮華文で、外区との圏線を兼ねる弁端のふくらみはほとんど表現されない。この点ではKCM12に近い。弁の中央に突線で表す子葉が明確に認められるAと無

古代・中世の瓦類

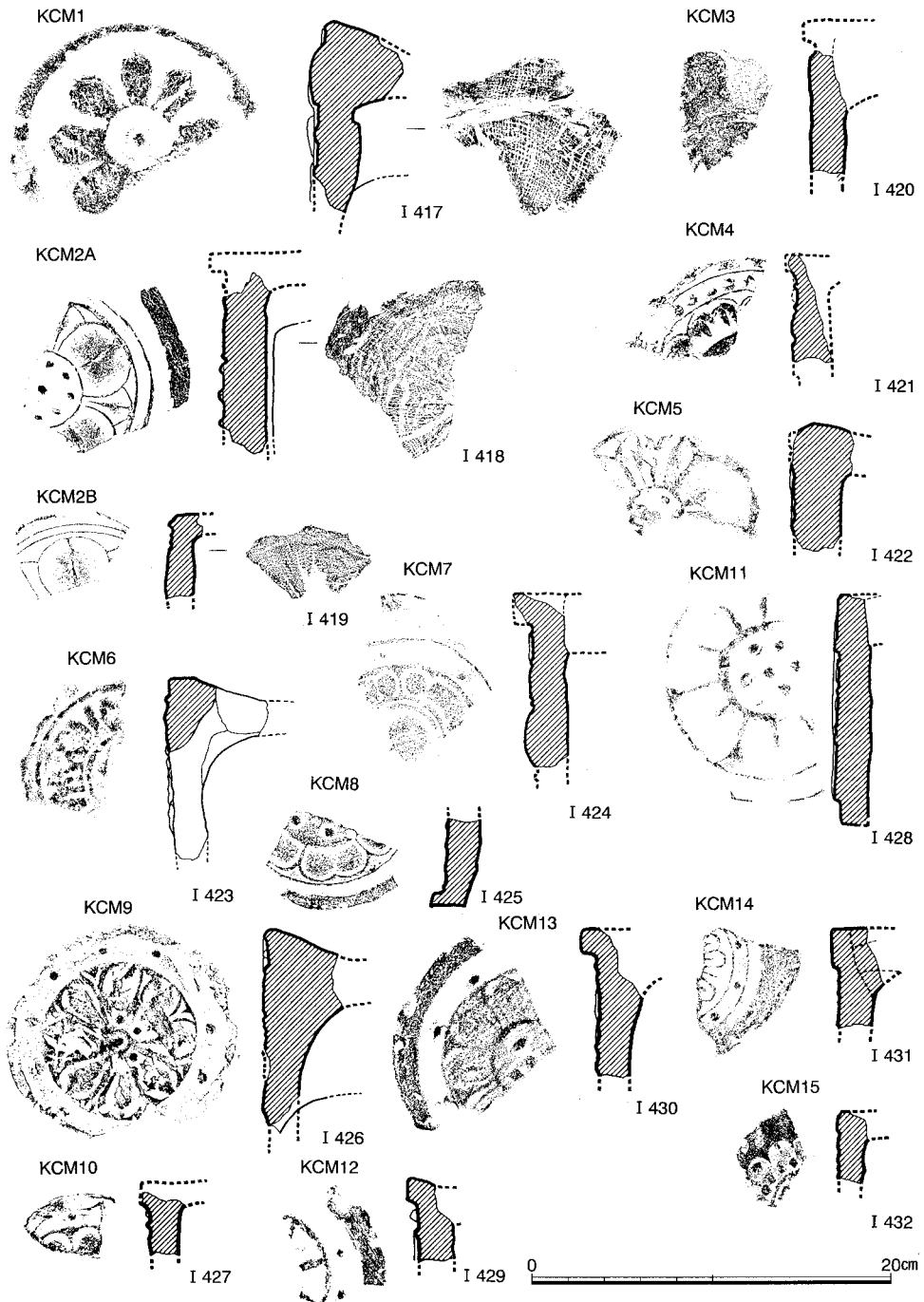


図27 軒丸瓦(1) (KCM1~15)

いBに区分する。いずれも範の打ち込みは浅く、瓦当外周下半は篋削り、裏面は撫で調整、焼成はやや甘く灰色～灰白色を呈する。K C M16と同様、楕円形瓦当面をもつ12世紀代の中央官衙系瓦屋の製品だろう。栗栖野瓦窯〔京都市埋文研86 図版11-3〕や、医学部構内A P 19区に同文品がある〔清水・吉野81 I 51〕。

K C M18 (I 436) 細長く先端が尖り気味の蓮弁と子葉を突線で表して連ねたモチーフで、単弁推定十八葉蓮華文。範の打ち込みは浅く、中房は無文、外区に圈線を1条もつ。瓦当外周は篋削り、裏面は撫で調整、焼成はややあまく灰色～灰白色を呈する。同文は仁和寺境内〔京都市埋文研90 図版15-46〕や下鴨神社〔京都市埋文研80 p.39〕の出土品にみられる。K C M16や17と同様な系譜や年代観でとらえられよう。

K C M19 (I 437) 内区に内向きT字形花卉を配して弧状の圈線で囲み、外区に瘤状の珠文を密に並べる宝相華文。瓦当は側面・裏面とも撫で調整で、焼成はややあまく灰白色を呈する。本部構内A W 25区で、13世紀前葉の井戸S E 1から同文品2点が出土している〔千葉ほか97 Ⅲ232・Ⅲ233〕。

K C M20 (I 438) 一段高い中房に卍文を陽刻し、内区にこぶりの蓮弁を、外区に珠文と圈線をもつ複弁推定八葉蓮華文。周縁もやや幅広で高い。瓦当側面・裏面とも撫で調整で、焼成はややあまく暗灰色を呈する。広隆寺跡出土の平古230、右京区常磐伸ノ町遺跡S X-8〔京都市埋文研78 PL.18-1〕をはじめ平安京周辺で同文例は多く出土しており、13世紀前半に隆盛するものとされる〔上原95〕。

K C M21 (I 439) 圈線で画した内区に左巴文、外区に唐草文をめぐらす。瓦当外周を縄叩き、裏面は指頭圧痕が著しい。焼成はあまく黄褐色を呈する。同文例は総合人間学部構内A N 23区T P 2溝S D 1で出土している〔宇野・岡田79 V 18〕。

K C M22 (I 440～I 452・I 455) 巴文瓦のほとんどをこの型式にまとめ、以下のように巻き方向や外区珠文帯の特徴で5大別し、それを圈線や巴の形状などで細別する。

A：左巴文・外区珠文帯有り (Aa：圈線有り／Ab：圈線無し)。

B：右巴文・外区珠文帯有り (Ba：圈線有り／Bb：圈線無し)。

C：左巴文・外区珠文帯無し (いずれも圈線は無く、Ca：範浅く巴文幅広／Cb：範深く巴文の彫り深い／Cc：丸み帯び尾の長い巴文)。

D：右巴文・外区珠文帯無し (Da：圈線有り／Db：圈線無し、おおぶりの陰刻巴文／Dc：圈線無し、範深く巴文の彫り深い／Dd：圈線無し、丸み帯び尾の長い巴文)。

X：巴文であることはわかるが、残りが少なく詳細不明。

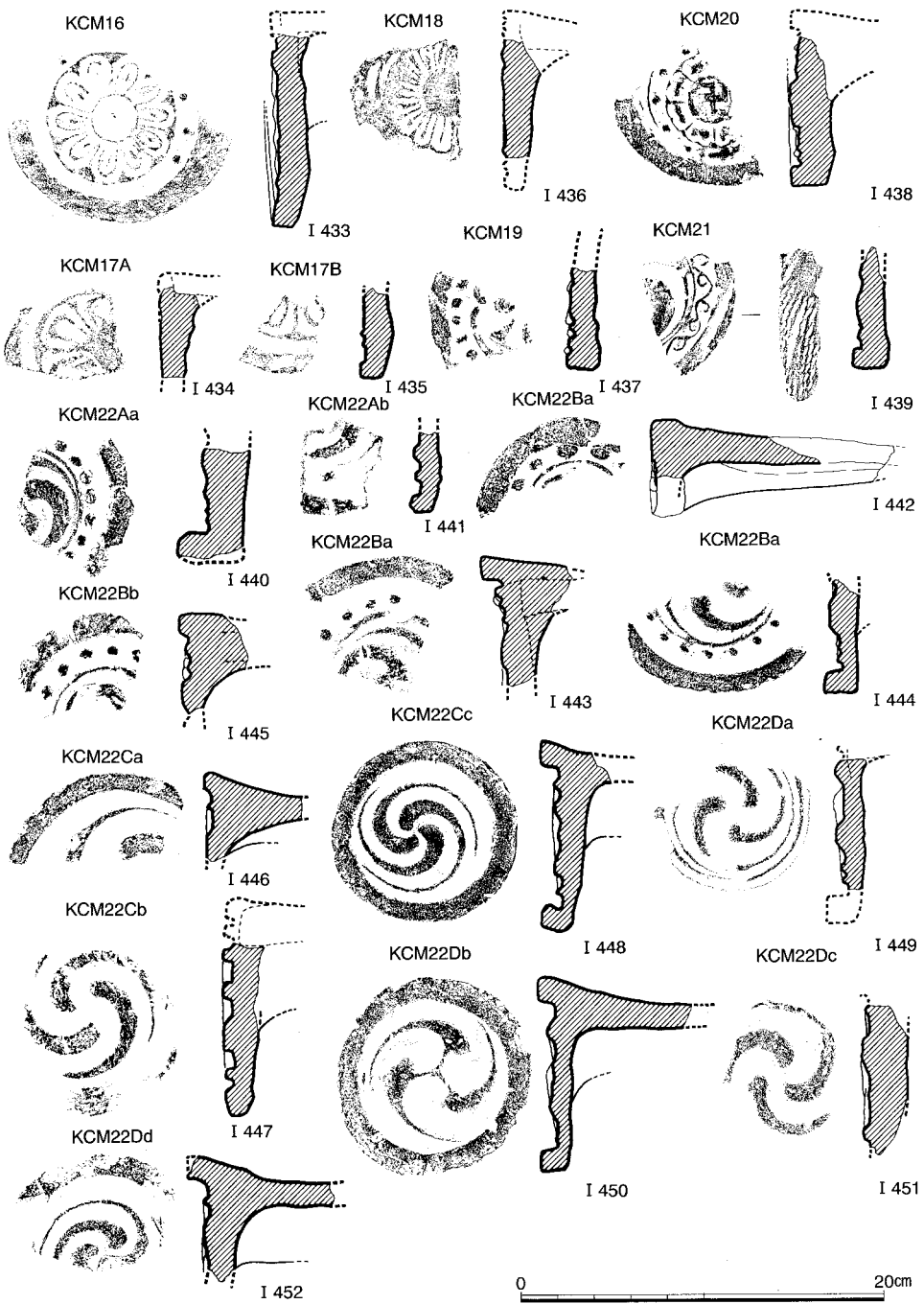


図28 軒丸瓦(2) (KCM16~22Dd)

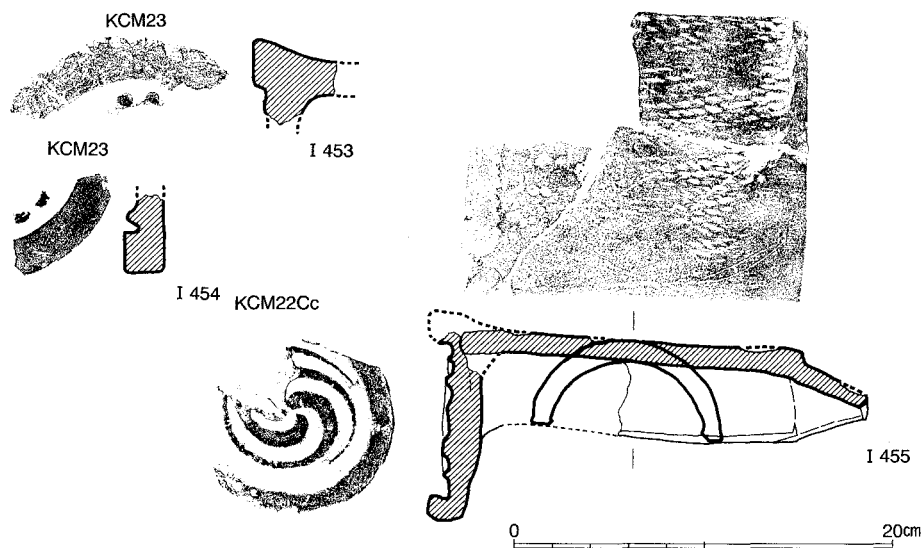


図29 軒丸瓦(3) (K CM22Cc・23)

以上のうち、CbとDc、CcとDdは巻きの方向が逆転するだけでその他の特徴はほぼ等しい。焼成はややあまめで黒灰色を呈するものが最も多いが、量的に主体を占めるCcには、硬質で青灰色を呈して銀色の光沢を有するものがみられる。また、このCcが最も残りがよく、瓦当径のわかる4個体は10.5～10.8cmの幅におさまリ、筒部と接合して唯一全長のわかるI 455によれば全長23.9cm、筒部外面は縄叩き磨り消しで玉縁寄りの隅に篋記号、内面は細かな布目で側面は篋削り、瓦当の裏面は撫で調整である。なお、点数的には多いが、型式内での同范がはっきりと確認できるものはなかった。

この種の巴文モチーフの瓦は、京都大学構内遺跡の各地点をはじめ多くの出土例がある。上原真人氏による詳細な分析が行われた大覚寺御所跡では、13世紀後半～14世紀初頭に年代づけられる第Ⅱ期瓦群の軒丸瓦の主体をなしている〔上原97〕。ただし、上原氏に本調査区出土品を検討していただいたところ、大覚寺との間で同范関係にあるものは確認できなかった。また、主体となる細別型式にもずれがあり、大覚寺で量的に多いのは左巴で巴の頭部が離れるDKM12Aで、本調査区では3点しか出土していないCbにあたるほか、大覚寺で少ない左巴の頭部がほぼ接するDKM12B・Cは、本調査区では量的に最も多いCcに相当している。同様に、大覚寺では右巴となるDKM13A・Bや外区珠文帯を有する左巴のDKM14も一定量出土しているが、本調査区でそれらに相当するKCM22DおよびAは少量で、むしろ右巴で外区珠文帯をもつKCM22B（大覚寺では1点しか出土して

いないDKM15)が多く出土している。

KCM23 (I 453・I 454) 瓦当径が15cmを越え、周縁も幅2cmあまりとなる大型品で、外区に大粒の珠文を配するものをこの型式にまとめる。内区の残りは少ないが、いずれも巴文になると思われる。基本的に全体が丁寧な撫で調整で、硬い焼成で黄褐色や灰白色を呈する。特徴からみて、おそらく中世後半以降近世にかけての巴文瓦であり、出土層位もそれを支持する。

(2) 軒平瓦 (図版17~19, 表3, 図30~33)

総量、種類とも軒丸瓦より圧倒的に多く、文様不明の18点を含め総計154点。KCH1~30に区分した。25までは唐草文系統のモチーフが中心となり、27・28は巴文系統となる。軒丸瓦と異なり複数点出土しているものも多い。多数を占めるのはKCH30とした剣頭文モチーフで、多くのバリエーションがあり、SD11・53から多く出土している。これらは、巴文軒丸瓦と同様に13世紀前葉以前の遺構からは出土せず、調査区一帯での剣頭文軒平瓦の使用年代を考えるうえで示唆的である。以下、型式別に説明する。

KCH1 (I 456) 肉厚の唐草文と界線を持ち、脇区や外区に小粒の珠文を配する均整唐草文。凹面は粗い布目、曲線顎の凸面は縦位に篋削りし、顎下端は横に削って面をとる。顎には粘土を貼り付けた痕跡が明瞭にわかる。砂粒を多く含む胎土で、焼成はややあまく灰褐色を呈する。内裏跡出土の平古383と類似モチーフで、平安中期だろう。

KCH2 (I 457) 中心飾りとして置かれた立位の蓮華文しかわからないが、均整唐草文とみられる。界線の外側には扁平で大粒な珠文をもつ。凹面には瓦当面から4cmのところに布端が段をなしており、瓦当上縁部は1cm幅で篋削りされて斜めに面をなす。砂粒を多く含む胎土で、焼成はやや甘く灰褐色を呈する。

KCH3 (I 458) 扁平でおおぶりの主葉が強く巻いて展開する唐草文。太い界線を持ち外区に大粒の珠文を配するが、脇区はない。範の打ち込みは浅い。瓦当上縁は斜めに篋削りして面取りし、凹面には粗い布目がある。粘土貼り付けによる曲線顎で、内裏跡出土の平古429や右京区森ヶ東窯に同文品がある〔平田・加納91 図3-7〕。

KCH4 (I 459) 「く」字及びその逆転したものを並列するモチーフを基本とする幾何学文。中心を境に文様は反転するようだが、右半分のモチーフはかなり混乱しており、全体的に範が浅く不鮮明である。瓦当上縁部や側面は篋削り、凹面にはかなり粗い布目痕が残る。焼成は甘く黄褐色を呈する。

KCH5 (I 460) 斜格子文モチーフを基本とする幾何学文。横に長い長方形を割

付の基本単位とし、その内部に対角線をひいているようである。凹面には細かな布目がみられる。焼成はあまく黄褐色を呈する。

KCH6 (I 461) 細めの界線で囲まれた幅の狭い内区に、単葉の蕨手文三葉が反転しながら展開するモチーフで、中心飾りは不明だが均整唐草文だろう。上下の外区と脇区に小粒の珠文を配する。挟りの弱い曲線顎で、顎下端は横撫で、凸面は粗く撫でつけ、側面は篋削り、凹面は粗い布目が残る。焼成は硬く青灰色を呈する。

KCH7 (I 462) 薄肉彫の雲盤状花文が右向きに配される。右側面付近の小片のため全容は不明だが、民部省跡出土の平古546を参考にすると、つり下げた花文を中央に置き、左右に花文を連ねる宝相華唐草文とみられる。瓦当面に成形時の篋切り痕が筋状に残り、凹面に細かな布目がある。焼成はややあまく灰白色を呈する。10世紀中葉に比定される平安宮内裏からも類品が出土している〔網・鈴木89 図版24-26〕。

KCH8 (I 463) 枝葉が密に分岐し大きく強く巻く唐草文が互いに向き合う意匠の均整唐草文で、細い突線で彫り深く描出される。屈曲のきつい曲線顎で頸部に指頭圧痕が顕著に残り、幅のある顎下端は篋削り、凹面には成形時の糸切痕と浅く細かな布目が残る。焼成は硬く青灰色を呈する。一般に右京区森ヶ東瓦窯の製品に比定されており、11世紀後半の中央官衙系瓦屋第Ⅱ期に特徴的なものに分類される〔上原78〕。

KCH9 (I 464) 意匠としてはKCH8に類似するものとみられるが、瓦当面が大きく、唐草文もより太い線で大きく描かれる。顎の屈曲もいっそうきつくなり、下端は篋削りするが頸部は丁寧に横撫でしている。凹面には糸切痕と細かな布目残り、硬い焼成で灰色を呈する。年代や系譜はKCH8と同様に考えられようが、技法的により新しい時期の傾向が認められるといえる。

KCH10 (I 465) 左から右に向かって枝葉を配しながら展開する偏向唐草文。右端に界線状のものがある。範は浅く木目痕が残る。凹面には糸切痕と布目痕残り、瓦当面から1cmほどのところに布端の痕跡がある。凸面は丁寧に撫でつけられ顎下端面は軽く削っている。凸面の瓦当寄りの左隅に並行2本線のヘラ記号があるが、撫でにより消され気味である。ややあまい焼成で黒灰色を呈する。内裏跡出土の平古464・465のほか、栗栖野瓦窯にも同文品が存在し、12世紀前半の中央官衙系瓦屋第Ⅲ期に属する〔上原78〕。

KCH11 (I 466) 瓦当面はかなり荒れているが、下からのぞく花菱風半截宝相華文であることがわかる。瓦当面および顎の表面には緑釉とみられるような付着物がある。ほかには表面が荒れて調整技法はうかがいにくい、平古第3図呈示例のような、法成寺

古代・中世の瓦類

表3 軒平瓦の遺構別出土点数

型式	遺構 SD 55	SD 56	SD 19	SD 33	SD11 (上層)(下層)	SD53 (上層)(下層)	その他 中世遺構	茶褐色土	段差内 堆積層	斜面 堆積層	上層混入	計
KCH1	1											1
KCH2											1	1
KCH3					1	1						2
KCH4	1	1							1			3
KCH5						1						1
KCH6							1			1		2
KCH7					1							1
KCH8				1					2			3
KCH9						1						1
KCH10						1						1
KCH11										1		1
KCH12					1	1			1			3
KCH13				2	1	1	1		3		1	9
KCH14								1	1			2
KCH15				1								1
KCH16						1						1
KCH17					1							1
KCH18										1		1
KCH19						1						1
KCH20				1							1	2
KCH21							1		1			2
KCH22										1		1
KCH23						1	1					2
KCH24					1							1
KCH25					3	1	3			1	1	9
KCH26									1			1
KCH27				1								1
KCH28			2	6				1			2	11
KCH29				1								1
KCH30Aa								1				1
KCH30Ab										1		1
KCH30B						1						1
KCH30C					1					1	1	3
KCH30D						1	1				1	3
KCH30E						2			1			3
KCH30Fa						1						1
KCH30Fb					1	2						3
KCH30Fc				1			1					2
KCH30Ga				1		1						2
KCH30Gb				1		1						2
KCH30Gc					2	1			1			4
KCH30Gd						3			1			4
KCH30H					6	13	4	1	2	4	2	4
KCH30I					1	1			1			3
*KCHX	1		1	2	2	2	5	1	1	1	1	18
計	3	1	3	15	19	10	41	10	5	5	19	154

*KCHX：瓦当文様不明の軒平瓦

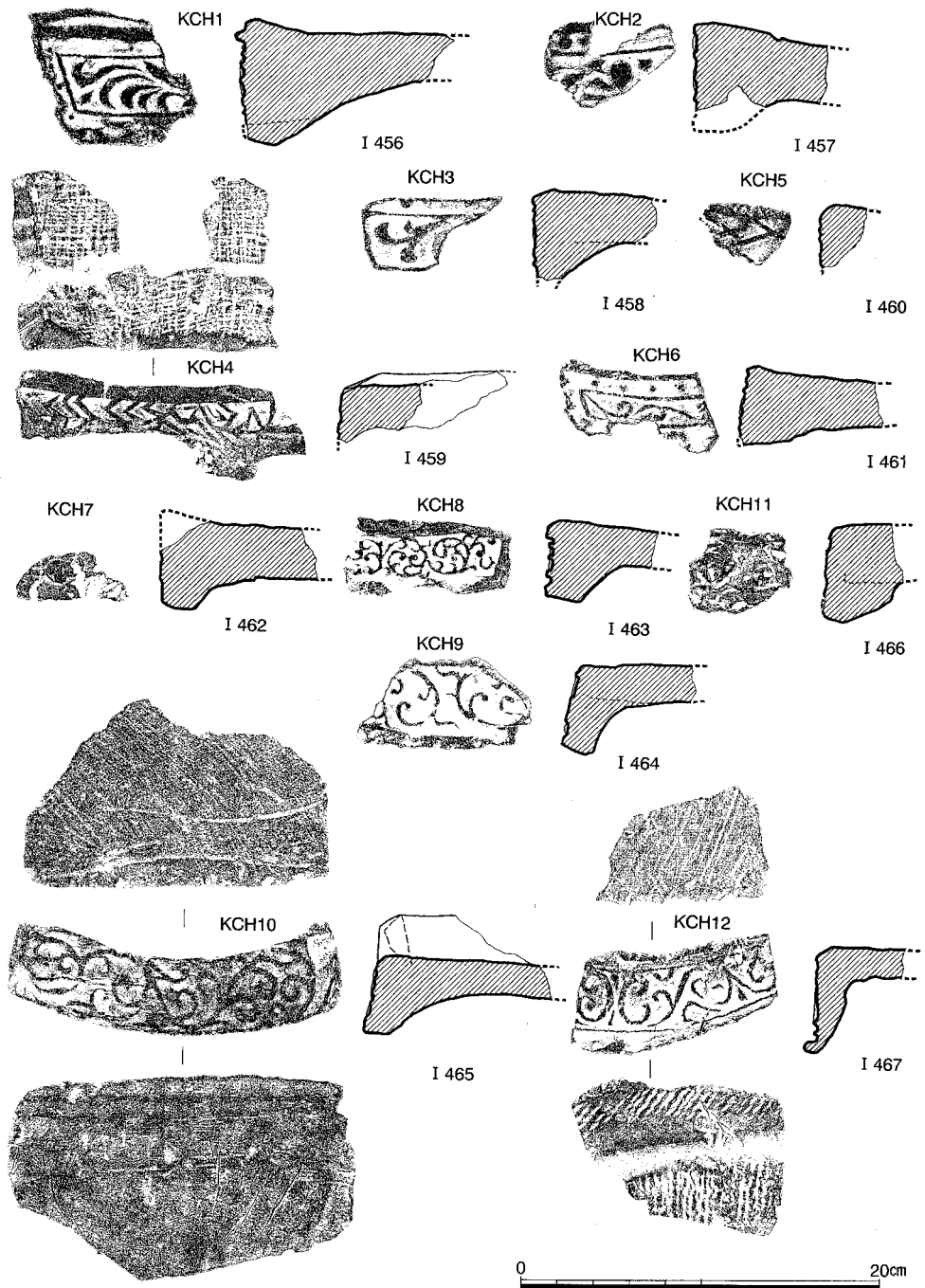


図30 軒平瓦(1) (KCH 1 ~ 12)

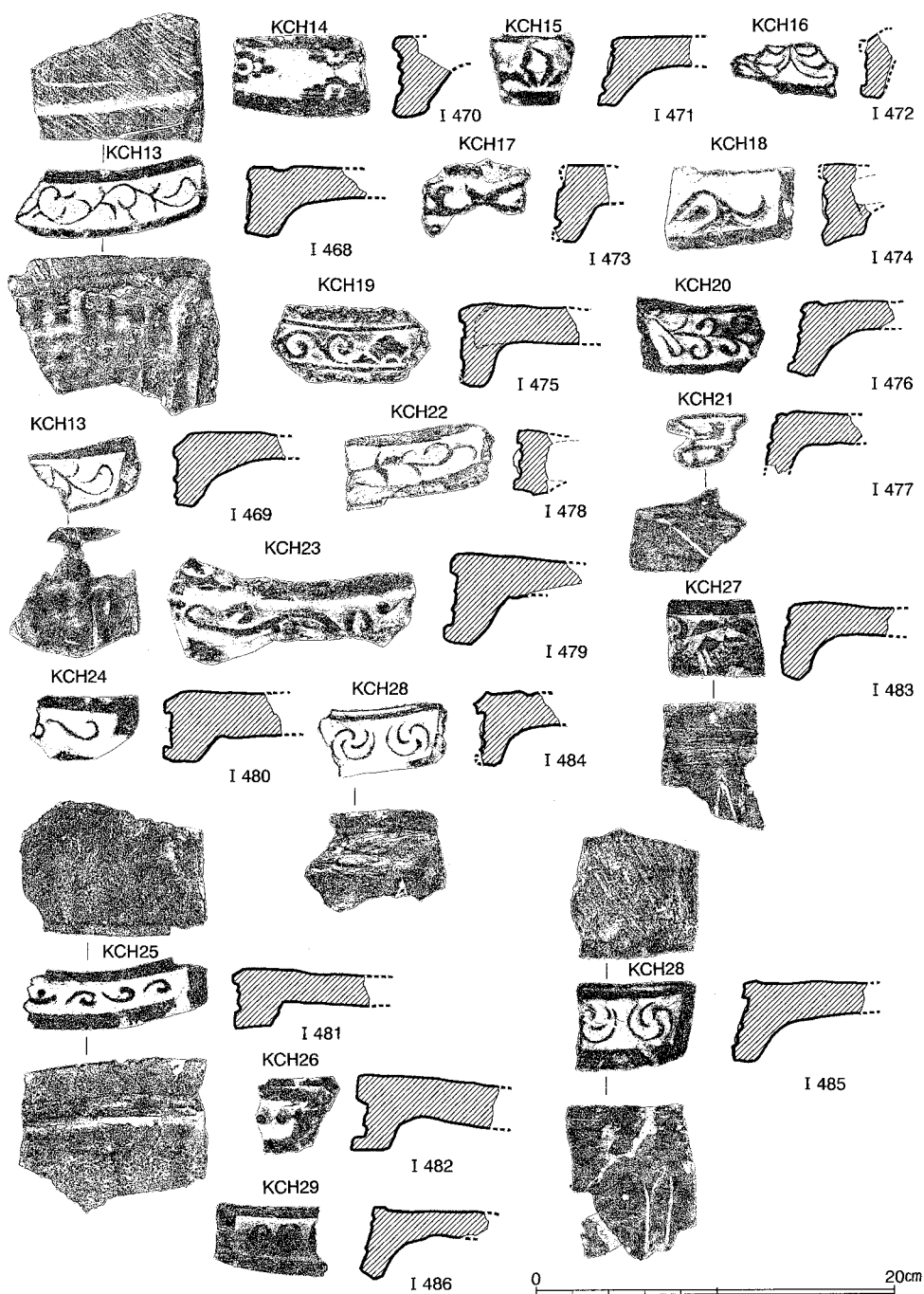


図31 軒平瓦(2) (KCH13~29)

出土の丹波王子瓦窯産の半截宝相華文軒平瓦と同文とみられる。

KCH12 (I 467) 中央に互いに背向するC字文を置く均整唐草文。蕨手文は途切れながら展開し、隙間を小葉で埋める。上下には細い界線をもつが珠文は無い。平瓦部と瓦当部ともに同じ厚さでほぼ直角をなし、凸面と瓦当部の先端付近に縄叩目が残る、頸部は強く横撫でされている。凹面は細かな布目痕が瓦当面付近までおよぶ。硬い焼成で青灰色を呈する。以上の特徴は、12世紀前葉ころの丹波系瓦屋の製品であることを示す。

KCH13 (I 468・I 469) 先の尖った細線による偏向唐草文。唐草文系の中では最も多く出土している。頸は横位の軽い削り、瓦当裏面から頸部にかけては粘土を充足したことにともなう指頭圧痕が顕著に残り、凸面は縦位方向の強い撫で、凹面には糸切痕と細かな布目が残る。焼成は比較的硬いものが多く、灰白色あるいは黒灰色を呈する。太い刻線による記号をもつものがある (I 469)。この型式は12世紀中葉の中央官衛系瓦屋第IV期に比定され、栗栖野瓦窯をはじめ多数の同範・同文品が知られる。

KCH14 (I 470) 花卉の小さな宝相華文と、上下からのぞくその半截花文を交互に配する。頸は横位の鋭削り、瓦当裏面は指頭圧痕が横撫でにより消される。焼成はやや軟質で灰色を呈する。瓦当の成形は、折り曲げ後に上下に粘土を貼り付けるなどKCH13と同様な技法に拠っている。同文品は南ノ庄田瓦窯でMSH13とされるもの〔京都市埋文研98 図版5-23〕、栢杜遺跡八角円堂跡のJ種〔鳥羽離宮跡調査研究所75 p.34〕がある。

KCH15 (I 471) 互いに向き合う「く」字状文を用いた半截花文が置かれる瓦当面の左隅が残る。鈍角に曲がる頸や瓦当裏面は撫で調整で、凹面には細かな布目が残る。やや軟質焼成で黒色を呈する。KCH14と同様、栢杜遺跡八角円堂跡に同文品があり、中央官衛系瓦屋第IV期に比定されている。

KCH16 (I 472) 細く短い唐草文が上部から左右に開くモチーフ。かなり退化した均整唐草文といえ、残りが悪いため調整技法は定かではないが、瓦当部分は薄く、軟質焼成で黄褐色を呈する。同文は、平古522のほか、本部構内A X 25区などから出土しており〔古賀99 II 344〕、KCH13～15と同様な年代観でとらえられよう。

KCH17 (I 473) 退化した唐草文の一部になるとみられる太い隆線による眼鏡状モチーフ。類例が無く全体像は不明。瓦当裏面は細い縄叩き痕と曲げ皺がそのまま残り、凹面には細かな布目がみられる。砂粒を多量に含む胎土で、軟質の焼成であり、灰褐色を呈する。技法的な面からは古代末期の京周辺の製品と推定される。

KCH18 (I 474) 大きくゆったりと巻く唐草文の一部で、範の木目が鮮明に残る。

瓦当上端付近の凹面は粗く撫でつけられ、顎には成形時の糸切痕が横位の筋状にはしる。裏面には平瓦部の離脱痕が明瞭に残り、やや軟質の焼成で灰白色を呈する。瓦当部が接合技法によることや文様モチーフから、12世紀代の播磨系瓦屋の製品とみられる。

KCH19 (I 475) 中央に半截花文を置き、強く巻く唐草文が左右に展開するモチーフ。上下に太い界線をもつ。顎の調整は摩滅して不明だが、瓦当裏面から頸部にかけては強く横撫でされており、凹面も瓦当付近は幅広く撫で調整されている。断面でみると、弱く折り曲げられた平瓦部先端に粘土を補って瓦当を成形しているように見える。やや軟質の焼成で灰色を呈する。12世紀代の中央官衙系瓦屋の製品の可能性が高いが、モチーフと技法は讃岐系の瓦屋にも存在し得るもので、讃岐産の可能性も残す。

KCH20 (I 476) 蕨手状の主葉が中心へ向かって展開するモチーフ。鈍角をなす顎は軽く篋削り、瓦当裏面から頸部にかけては丁寧に撫で調整される。凹面は風化して不明。やや軟質の焼成で黒灰色を呈する。南ノ庄田瓦窯でMSH04とされるものが同文品であり〔京都市埋文研98 図版5-4〕、12世紀代の中央官衙系瓦屋の製品とみてよからう。

KCH21 (I 477) 直線的な茎の上下に扁平に変形した葉が配される唐草文。顎は軽く篋削り、瓦当裏面から頸部にかけては丁寧に横撫です。凹面は細かな布目痕のほか、瓦当上端付近2cm幅ほどは撫で調整で指頭圧痕が残る。凸面側瓦当寄り左隅に、鋭い刻線による篋記号をもつものがある。やや軟質の焼成で黒灰色を呈する。12世紀代の中央官衙系瓦屋の製作技法に従うもので、系譜と年代もその範疇で考えられる。

KCH22 (I 478) 中央に肉厚な花文が横向きに置かれ、そこから細く鋭い主葉がのびる宝相華唐草文。顎は横撫で、瓦当裏面に平瓦部の離脱した接合痕が残る。硬い焼成で灰色を呈する。モチーフや瓦当部接合技法からみて、KCH18と同様12世紀代の播磨系瓦屋の製品である可能性が高い。

KCH23 (I 479) 中心飾りとして2弁の省略化された花文を置き、そこから肉厚な線による主葉が緩やかに波打って伸びる推定均整唐草文。顎は軽く篋削り、瓦当裏面は横撫で、頸部から平瓦部にかけては縦位方向に板撫でされ、屈曲部に板状工具の木口圧痕が顕著に残る。凹面は瓦当面から2cm幅のところに粗めの布端がくる。軟質の焼成で、黒灰色を呈する。周辺に類例を知らないモチーフであるが、製作技法は平安時代末期の中央官衙系瓦屋の範疇に入るものである。

KCH24 (I 480) 細い線により強く巻く蕨手文が描かれる。おそらくこれらが中心飾りを挟んで向き合うモチーフの均整唐草文であろう。瓦当の成形は顎貼り付け式の可

能性がある。顎は幅広く面をもち、瓦当裏面ともども横撫でされる。平瓦部はかなり厚みがあり、凸面凹面とも丁寧に撫で調整されて表面を平滑にしているが、離れ砂が付着してざらつきがみられる。特徴からみて13世紀代に下るものだろう。

KCH25 (I 481) 唐草文系のモチーフのなかではKCH13とともに多い。中心飾りに「山」字状に退化した蓮華文を置き、3反転する蕨手を左右に配する均整唐草文。瓦当面における内区の幅は狭く、周縁の占める比率が高い。成形は瓦当貼り付け式とみられる。顎および瓦当裏面から頸部にかけてを横撫で、凸面は縦位に撫で、凹面は細かな布目をほとんどすり消すのが基本であるが、一部の個体は頸部に成形台や工具の先端の痕跡が残る。焼成は堅緻で青灰色を呈し、銀色の光沢をもつものもある。瓦当貼り付け式の成形は13世紀中頃に南都で採用されたとされ〔佐川95〕、本例は少なくともそれ以降、14世紀代に下る可能性が高い。今回出土の中世瓦のうち時期的に最も新しい一群だろう。類品は中京区の押小路殿跡第2次調査で多く出土している〔古代学協会84 第24図〕。

KCH26 (I 482) 内区におおりの珠文を一系列ねたいわゆる連珠文で、周縁の幅は広い。顎は丁寧に撫で、瓦当裏面から頸部を経て平瓦部まで、板状工具により縦位方向にひとつづきの撫で調整。凹面は布目がすり消されている。瓦当の接合は顎貼り付け式の可能性がある。硬い焼成で灰色を呈する。13世紀代以降のものであろう。

KCH27 (I 483) トンボ形に変容した中心飾りしか残っていないが、左右に巴文を配するモチーフと想定される。範は浅い。顎の先端は丸みを帯び、頸部にかけての部分とともに横撫で調整される。凸面に篋記号があり、凹面は糸切り痕と細かな布目が残る。KCH14・15などとともに栢杜遺跡八角円堂跡から出土しており、12世紀中葉の中央官衛系瓦屋の製品とみられる。

KCH28 (I 484・I 485) 左巴と右巴を交互に配するいわゆる連巴文。剣頭文以外では最も多く出土している。ただし残存率が悪いので、KCH27のように中心飾りを置くモチーフと区別できていない可能性もある。鈍角につく顎は軽く篋削りし、瓦当裏面から頸部にかけては撫で調整で、指頭圧痕を残す。凹面は糸切り痕と細かな布目のほか、一部の個体に成形台端部の痕跡も残る。図示した2点は凸面に篋記号が確認できたものだが、部位は同じでもモチーフがそれぞれ異なる。また瓦当の成形も、折り曲げと充填によるもののほか、明らかに顎を貼り付けているかのように見えるものもあり、一定していない。いずれにしる12世紀中葉の中央官衛系瓦屋第Ⅳ期を代表する軒平瓦である。

KCH29 (I 486) 「0」字状の単位文を連ねるモチーフで、範は浅い。同文例に

よると、中心に崩れた唐草文を配するようである。顎は軽く篋削りし、頸部付近は横撫で、指頭圧痕が残る。凹面には細かな布目がそのまま残され、硬い焼成で灰色を呈する。栗栖野瓦窯には類似モチーフがあり〔京都市埋文研86 図版13-9〕、技法的な特徴からみて、12世紀中葉の中央官衛系瓦屋第Ⅳ期ころの製品とみてよからう。

KCH30 (I 487～I 503) 本調査区出土軒平瓦の中心をなす剣頭文をこの型式にまとめた。以下に示すように、主として剣頭の特徴によりA～Iに大別し、形の細部や調整技法の違いから、それをさらに細別した。

- A：中心飾りに巴文を置き、左右に剣頭文 (Aa：中心飾り左巴／Ab：中心飾り右巴)。
- B：剣頭内部の子葉が3本になる特殊なもの。
- C：彫りの深いおおぶりの剣頭で、縦に長く、子葉も太く長いもの。
- D：おおぶりの剣頭で、横に幅広いもの。
- E：ややおおぶりの剣頭で、顎や瓦当裏面に縄叩き痕を顕著に残すもの。
- F：こぶりで縦に細長い剣頭で、範がやや浅い (Fa：子葉が幅広く扁平／Fb：子葉が幅広く肉厚／Fc：子葉が細く鋭利)。
- G：やや縦に長い剣頭で、範が浅い (Ga：凹面の布目が粗い／Gb：凹面の布目が細かく瓦当裏面にも頸部から連続する布目残る／Gc：凹面の布目が細かい／Gd：凹面の布目細かいが、ほとんど磨り消されている)
- H：縦と横の長さのバランスのとれた剣頭で、彫りが深い。本調査区の剣頭文の主流となるもので、完存品では剣頭の数6個、顎と瓦当裏面から頸部にかけてを横撫で、平瓦部凸面は縦位方向に撫で、凹面は細かな布目を1/2以上すり消している。瓦当面を上にした場合の凸面右上隅に、篋描きの弧線と直線を組み合わせた記号文をもつものがある。なお、ほとんど特徴を共有するが、子葉の先端が尖り気味のものも含まれる (I 502)。
- I：上下幅の狭い瓦当面に、こぶりの剣頭文を配するもの

以上のうち、AからGまでは、剣頭の数や大きさもばらつきがあるほか、概して凹面に布目をそのまま残すもので、頸部に曲げ皺や指頭圧痕や布目などのさまざまな痕跡も残している。また焼成も軟質から硬質まで多様である。一方、主体を占めるHは、瓦当文様のみならず、凹面の布目すり消し、顎や頸部の強い横撫で仕上げ、凸面の縦位の撫で、焼成堅緻で灰色を呈するといった技術的特徴もセットで定型化しており、かなり限られた数の瓦工の手になるものと想定される。

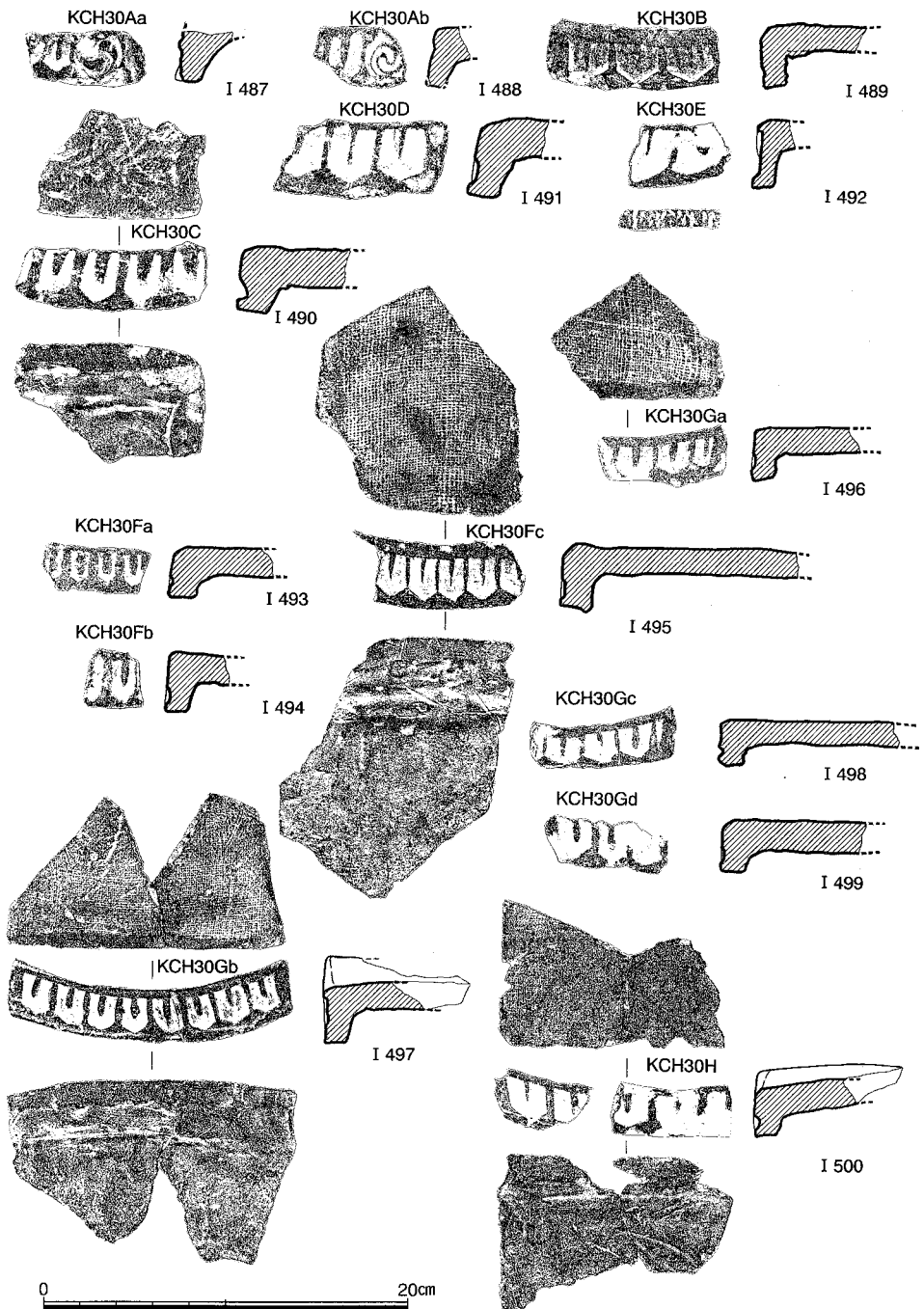


図32 軒平瓦(3) (KCH30Aa~H)

古代・中世の瓦類

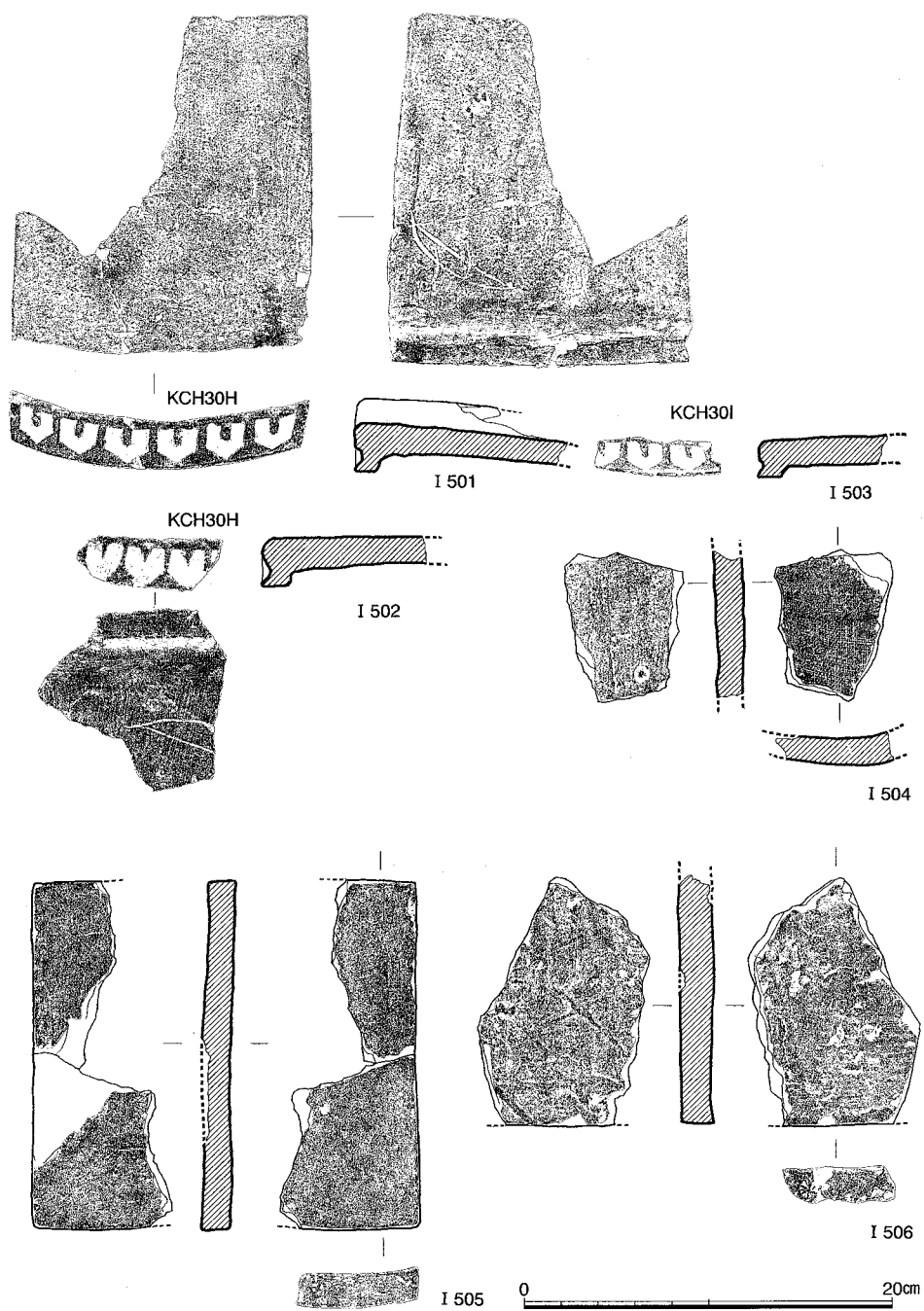


図33 軒平瓦(4) (KCH30H・I), 平瓦(1) (I 504~I 506)

また、大覚寺御所跡第Ⅱ期瓦群との比較では、DKH14Eと同範の可能性のあるものが13点確認されたほか、凸面側に凹型成形台の痕跡が明瞭に残るという特徴が共通していた。ただし、凸面側調整手法では、DKH14Eは指押えであり、KCH30Hとは異なっている。そして、大覚寺出土品で、Hと同じ凸面縦位撫で仕上げのものにはDKH14Gがあり、後述するように、この型式に対応する篋記号もHと同じであるが、大覚寺での総破片182点中の3点しか出土していない。

(3) 篋記号・刻印・緑釉瓦 (図版19, 図33~35, 表4)

軒丸瓦・丸瓦の篋記号 細い篋描直線をまず描きそれに弧線を組み合わせるモチーフのⅠ類と、それ以外のモチーフのⅡ類に大別した。

Ⅰ類は、玉縁側を下にして弧線が左側にくる逆D字形のⅠA類が圧倒的多数を占め、右側に来るⅠB類は少ない。唯一の軒丸瓦の完存品であるI455によれば、ⅠA類は巴文軒丸瓦KCM22Ccの玉縁寄り左隅に描かれている。ⅠB類は、瓦当の有無は不明だが玉縁寄り右隅に描かれたことが明らかなものが1点ある。

Ⅱ類は、個体差が大きい、X字形を単位とするモチーフをA類、1本の直線や平行線モチーフをB類、玉縁に施された横位の平行直線をC類とする。ⅡA類は、いずれも丸瓦凸面玉縁寄りに描かれ、おおぶりのX文を連ねるもの(I511)、X文と直線を組み合わせるもの(I512)、こぶりのX文を単独で施すもの(図35-e)などがある。ⅡB類には、2条の平行直線を玉縁寄り右隅に施すもの(g)、1条の斜線のみを同位置に施すもの(h)、中央付近右端に2条の横位の単線を施すもの(f)などがある。玉縁に施されるⅡC類には、右下がりや左下がりの平行する斜線がある(i・j)。いずれも瓦当との対応のわかる個体はないので、軒丸瓦か丸瓦かは不明である。

以上のうちⅠ類は、後述する軒平瓦の篋記号Ⅰ類と同一のモチーフであり、13世紀以前の遺構からは出土せず、巴文軒丸瓦ないしそれとともに用いられる丸瓦に特徴的な篋記号である可能性が高い。また、多数を占めるⅠA類は、大覚寺御所跡第二期瓦群の丸瓦篋記号でのⅢ類、とくにDKM13Aに施されるⅢb類と同一のものとみられる。ただし、本調査区では、この型式と同文と認定できる巴文軒丸瓦は無い。また、Ⅱ類の一部は、大覚寺での篋記号の中心となっているⅠ類やⅡ類に類似するが、施文部位や線の太さなどが異なり、同一のものではないとみられる。

軒平瓦・平瓦の篋記号 軒平瓦の凹面や凸面にみられるもののうち、篋描きの直線と弧線を組み合わせるモチーフをⅠ類、それ以外のモチーフをⅡ類とする。さらに、軒瓦に

古代・中世の瓦類

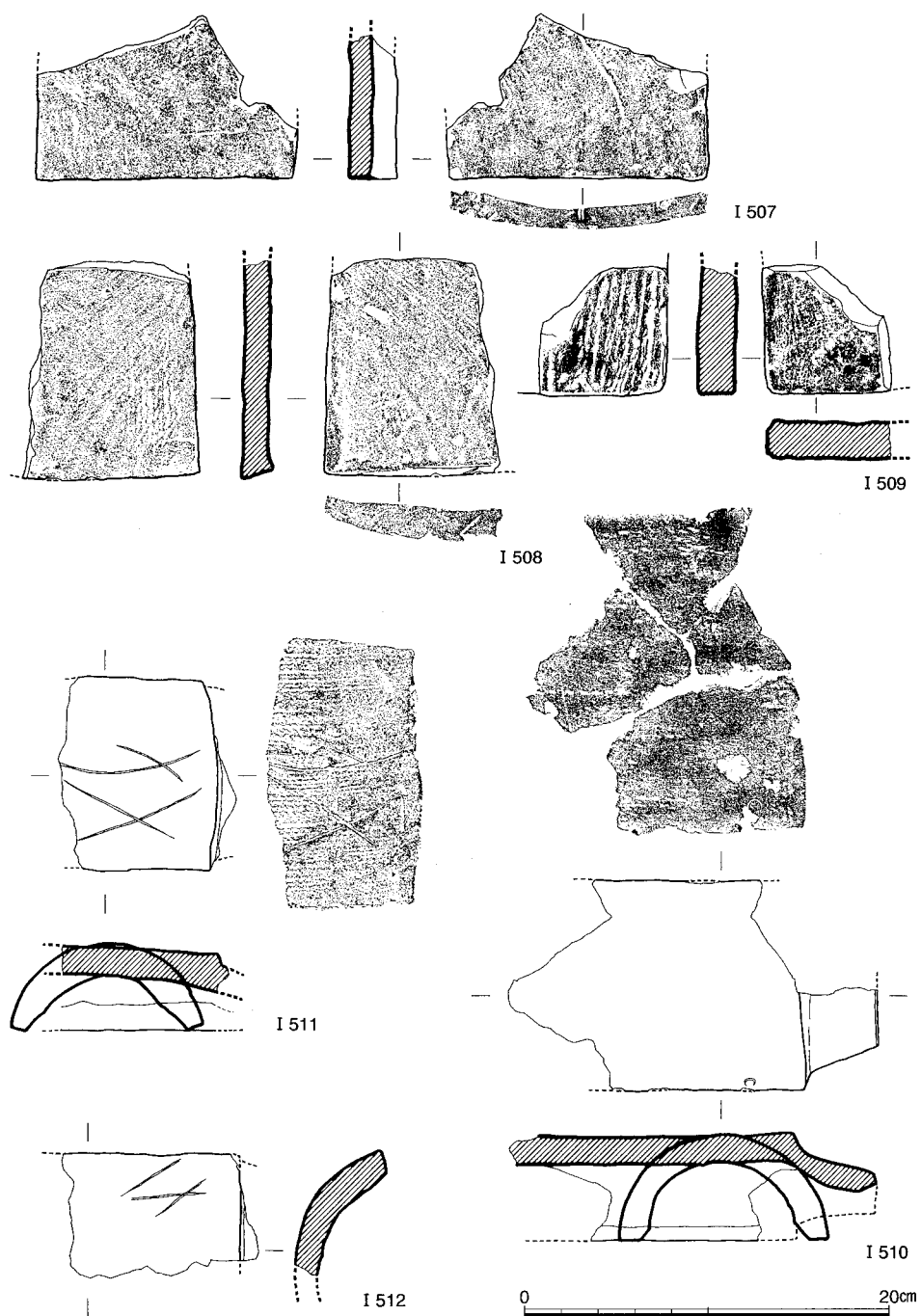


図34 平瓦(2) (I 507~I 509), 丸瓦 (I 510~I 512)

表4 籠記号・刻印の遺構別出土点数

種類	遺構	SD	SD	SD	SD	SD11		SD53		その他	茶褐色土	段差内	斜面	上層混入	計
		55	56	19	33	(上層)	(下層)	(上層)	(下層)	中世遺構	堆積層	堆積層	堆積層	上層混入	
〔丸瓦籠記号〕	I A						2	7	6			1	2		18
	I B					1						1			2
	II A				1					1	1	1			4
	II B	1			2		1	1		1	1	1	1		9
	II C				2		1								3
	計	1	0	0	5	1	4	8	6	2	2	4	3	0	36
〔平瓦籠記号〕	I					3	1	4	1	1		1	1	1	13
	II A							1							1
	II B				2			2		2		2		1	9
	II C			1	2	1									4
	III A						1	2							3
	III B				1	1	2				1	2			7
	計	0	0	1	5	5	4	9	1	3	1	5	1	2	37
〔刻印〕	A類(□)					1		4	1				1		7
	B類(*)											1			1
	C類(○)					1	1	1							3
	計	0	0	0	0	2	1	5	1	0	0	1	1	0	11

なるかどうかは不明だが、平瓦部の端面に施されている籠記号をⅢ類とする。

I類は、やや太めの籠描直線→弧線の順に描いてD字状の記号を作る(図35-k)。軒丸瓦の籠記号I類とモチーフは等しいが、施文具は異なる。KCH30Hの平瓦部凸面瓦当寄りの部位にのみみられ(たとえばI501)、同型式にはこの記号のみが組み合う。ただし、籠記号を持たないものは確実に存在し、施文率は1/2以下になるとみられる。

II類は、丸瓦と同様X字形を単位とするモチーフをA類、1本の直線や平行線モチーフをB類とし、それ以外をC類として一括する。II A類と明確に指摘できるのは1点のみで、KCH30Fcの凹面中央に、細線による2個のX字文と平行線を並べたものがある(I495, 図35-l)。II B類は、ほとんどが凸面の瓦当に近い位置の施文で、KCH10にみられる横位方向の短い平行線(I465)、13にみられる1条の鋭い縦位直線(I469, 図35-m)、28にみられる2条の鋭い縦位平行直線(I485, 同n)が、明瞭なものとして注意される。II C類は、弧線など直線以外の線状モチーフの単独ないし組み合わせになるもので、単独のものはKCH30Cの凸面(I490)、組み合わせるものは27の凸面(I483, 同o)のほか、28にも同類の籠記号が認められる。

Ⅲ類は、端面に施されるもので、おおむね凸面に縄叩き痕や糸切り痕、凹面に糸切り痕を残すような平瓦に特徴的に認められる。籠先の刺突による斜線モチーフをⅢ A類とする

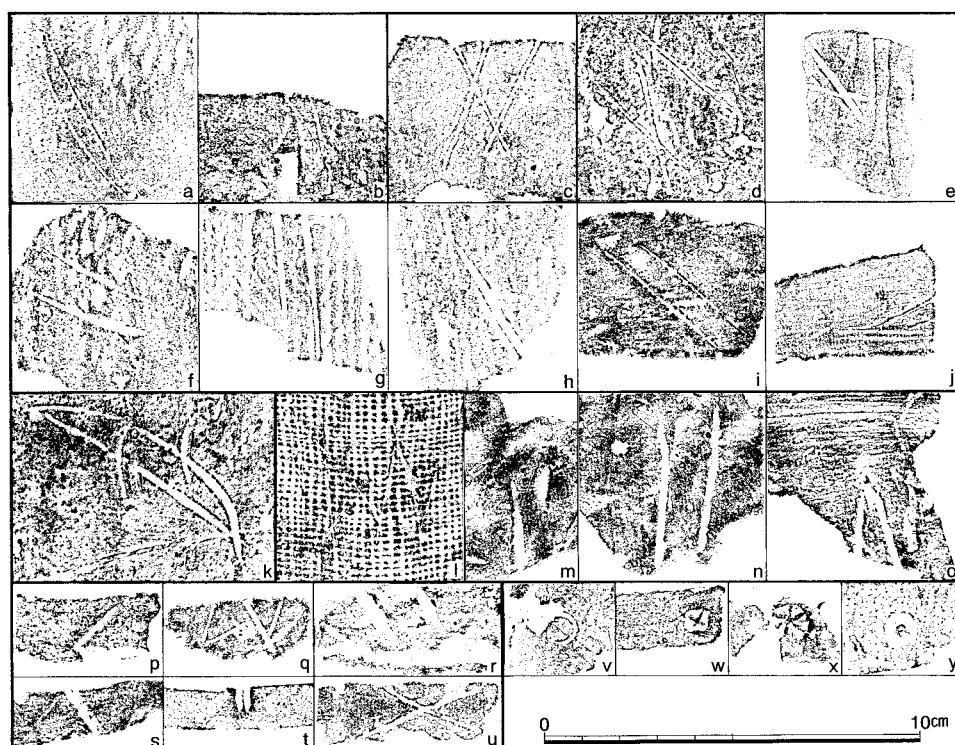


図35 篋記号・刻印 (a:丸ⅠA類, b:丸ⅠB類, c~e:丸ⅡA類, f~h:丸ⅡB類, i・j:丸Ⅱc類, k:平Ⅰ類, l:平ⅡA類, m・n:平ⅡB類, o:平Ⅱc類, p:平ⅢA類, q~u:平ⅢB類, v:丸瓦刻印, w:刻印A類, x:刻印B類, y:刻印C類) 縮尺1/2

(I 508, 同 p)。一方ⅢB類は、それ以外の多様なものを一括した。篋描きによるものが多いが、I 507は、中軸線上の凹面寄りの角に篋先刺突を2個並列させる(図35-t)。

以上は、Ⅰ類とKCH30Hとの組み合わせが、先述したように大覚寺御所跡第二期瓦群での篋記号Ⅲb類とDKH14Gとの組み合わせに一致している。ただし、大覚寺ではさわめて少数で、同範関係もない。Ⅱ類については、ⅡA類が大覚寺でのⅡ類に、ⅡB類の一部が同Ⅰ類に、ⅡC類の一部が同Ⅲa類に見かけ上類似する。しかし、本調査区出土例がほとんど凸面側施文であるのに対して、大覚寺ではⅢb類以外凹面側施文となっている。

刻 印 丸瓦にともなうものは1点で、縄叩きを丁寧にすり消した凸面の玉縁寄り右隅に、管状工具で浅く刺突している(I 510, 図35-v)。それ以外は大別して3種で、対角線をもつ5~6mm四方の正方形スタンプによるものをA類(I 505, 同w)、*印スタンプをB類(I 506, 同x)、円形の管状工具による刺突をC類(I 504, 同y)とする。

量的に最も多いのはA類で、凹・凸面側ともに離れ砂の痕跡ののこる平瓦ないし熨斗瓦の端面に施されている。1点のみ出土のB類は、凸面に格子目叩きが残る平瓦端面である。C類は、縦位に撫で調整されている平瓦部凸面の中央付近に施される。凹面側に細かな布目とそのすり消しがみられることと、凸面側の調整などの特徴からみて、KCH30Hの軒平瓦である可能性が高い。刻印が37点ある大覚寺御所跡第二期瓦群の平瓦・熨斗瓦では、本調査区で1点しかないA類の刻印が18点あり、逆に本調査区で目立つB類は1点のみしかみられない。また大覚寺では、格子目叩きの製品の出土は報告されていない。

緑 釉 瓦 濃緑色の釉のかかる平瓦ないし熨斗瓦が2点ある。いずれも凹面はやや粗めの布目、凸面に縄叩き痕を残し、軟質の焼成で黄白色を呈する。I 509は、側面周辺部のみに施釉しており、熨斗瓦の可能性が高い。平安後期以前のものであろう。このほかに、軒丸瓦ではKCM3 (I 420)、軒平瓦のKCH11 (I 466)に施釉痕跡が認められる。微量ではあるがこのような施釉瓦が含まれている理由として、平安京およびその周辺で用いられたものを再利用したものと想定されよう。

(4) ま と め

これまでみてきたように、今回出土の瓦群の年代は、おおむね10世紀代から14世紀代の長期間にわたるが、およその年代毎のまとまりは以下ようになる。

まず、少量だが平安中期にさかのぼる一群がある (KCM1・2, KCH1・2・4など)。ついで、平安後期の中央官衙系瓦屋の製品がある。ただしI・II期のものは少なく (KCM9, KCH6など)、12世紀代に下るIII・IV期の製品が複数点まとまっている (KCM16・18, KCH13・28など)。最後は中世の製品で、巴文軒丸瓦と剣頭文軒平瓦の組み合わせ、特にKCM22CcとKCH30Hを中心とし、KCM20やKCH25などが加わる状況であった。これらは14・15世紀代にかけて使用され、最終的にSD11・53の放棄に際し、他の陶磁器類などとともにまとめて廃棄されたのだろう。

なお、大覚寺御所跡第二期瓦群とは、主体となる剣頭文軒平瓦どうしに若干の同範関係が確認されたが、製作技術、範記号、刻印といった属性で共通する製品はかなり少ないことが判明した。少なくとも同一製作者の手になる製品はほとんど存在せず、供給元の工房も異なっていた可能性が高いといえよう。一方で、医学部構内AO18区の瓦溜SK12出土品は大覚寺と酷似する一括資料と評価され〔上原95〕、今回の出土資料とは性格を異にする。このほかにも中世の瓦類は構内遺跡で数多く出土しており、今後は、これらとも比較検討を進め、それぞれの地点別に建物の性格づけを試みていくことが課題といえよう。

7 近世の遺跡

(1) 遺構 (図版3・4, 図36)

近世の遺構には、多数の柵列と野壺、溝のほか、胞衣壺の埋納遺構などがある。また、 $X=1510 \cdot Y=2260$ ライン付近には、北から南および東から西へ下る比高差60cm程度の段差が中世から継続して存在し、灰褐色土を掘り上げると、段々畑状の景観があらわれる。柵列はこの段差内に、野壺の多くは段差上の高地に列をなしている。これらの遺構は、出土遺物からみてほとんどが江戸時代でも後半期以降に比定され、段差内の灰褐色土中からは、最も時期が下るもので明治17年の紀年をもつ半銭硬貨が出土している。したがって、明治22(1889)年の三高の本部構内への設置、あるいは明治30(1897)年の京都帝国大学創立にともなう三高の現総合人間学部構内への移転を契機とする地均しが実施されるまで、畠地として利用されつづけていた可能性が高い。以下、主要な遺構について説明する。

SX1は、段差の北東コーナー付近の斜面にある。攪乱によりかなり破壊され本来の状態を保っていなかったが、楕円形の土坑内に、内面に墨書した蓋I513を土師器の壺I514にかぶせた状態で、正位に埋置していたとみられる。壺の内容物は不明。同様な壺の埋納土坑がAT27区で見つかっており〔五十川81〕、胞衣壺の埋納遺構とみられる。

SX2は、完形の土師器皿I515・I516が互いに口縁を向かい合わせた状態で水平に埋置されており、その横で染付の小瓶が横倒しの状態で出土したものとを、関連をもつひとつの埋納遺構として取り扱った。灰褐色土下層中で検出され、掘り込みは不明。

野壺SE1～4・6～30は、 $Y=2260$ ライン付近で南北方向に列をなし、なかでも $X=1490 \sim 1505$ 付近の段差上に集中しており、多数が互いに切り合って存在する。ほとんどは円形で径1m深さ50cm内外の規模で、垂直に落ちる外壁とすり鉢状の底部を厚い漆喰で固めた構造のものである。一部漆喰のみられないものもあるが、ブロック状に漆喰の痕跡が存在しており、作り直しにともない取り除かれた可能性が高い。なお、木桶の痕跡が確認できたものはない。出土遺物から、ほとんどが18世紀後半以降のものと思われる。

溝SD8・26・27・31は、段差の斜面際にめぐらされている溝で、耕作地の排水や湿気抜きのためのものだろう。基本的に幅30cm深さ10cm程度の規模だが、SD8は不定形でひとまわり大きく、18世紀代の遺物や礫がややまとまって出土した。一方SD1は、段差上面の $Y=2260$ 付近を南北にはしる浅い溝で、粒子の粗い砂層を埋土としており、幅1m深さ30cm程度をはかる。溝というよりも畦道であった可能性もある。表土直下で検出され、

漆喰の野壺を切っていること、方位がほぼ真南北で他の近世遺構と異なること、出土遺物にも新しい様相がみられることから、明治期以降の遺構であろう。

柵列は、段差内で無数に検出された一辺20cm強の方形のピット群から東西方向の並びを復原した。わずかに真北から東に振る方位で柱間約2mをはかるものが最も多い。なお、X=1515付近の段差際には、灰褐色土の下層でまず畝状の土堤が検出され、それを除去するとピットが列を成していた。崖際に杭を用いた土留めをしていたものとみられる。

(2) 遺物 (図版20, 図37~40)

S X 1 出土遺物 (I 513・I 514) I 513は土師器蓋。口縁部から内面にかけては回転による撫で調整、頂部外面は撫でにより平らにする。内面に墨書文字があるが、残存部が少なく判読不能。I 514は、これと組み合う土師器壺で、弱く張る胴部の器壁は厚く、そこから口縁部が短く上方へ立ち上がる。内面は回転撫で調整にともない器面がゆるやかに波打っており、外面下半は軽く削られる。I 513・I 514ともに淡褐色を呈し、精良な胎土を用いた丁寧なつくりで、埋納容器として専用に作られたものとみられる。

S X 2 出土遺物 (I 515~I 517) I 515・I 516は土師器皿。ともに淡赤褐色を呈し、口縁部周辺を強く横撫でする。I 515は見込みに鋭い圈線をもつが、I 516はこれよりこぶりで丸底を呈する。灰褐色土出土の土師器皿と較べて径が大きく厚手でしっかりしたつくりであり、18世紀代でも前半にさかのぼるものだろう。I 517は磁器染付の小瓶。底面も含め全面施釉で、胴部にX字状文と花文が手書きされている。

灰褐色土出土遺物 (I 518~I 571・I 587~I 591) I 518~I 529は土師器皿類。色調は基本的に明るい灰白色系。I 518~I 522は見込みに圈線をもつタイプで、径の大きいI 521・I 522はその圈線の部位で破損している。I 518・I 519は外面に細かな布目痕が残る。I 522は口縁部周辺から内面にかけて薄い淡緑色の釉がかかる。I 523~I 526は内面全体をひといきに撫で上げて仕上げるタイプ。I 525の内面も薄く施釉される。I 527は内面に粗い布目圧痕が残るタイプで、凸型に粘土を押し付けて成形したものとみられる。平面は不整形円で、外面に指頭圧痕が残る。I 528も型づくりだが、凹型成形とみられ、正円形で器表面は平滑。胎土中に離型材の雲母が多量に混じり、やや赤みを帯びた色調を呈する。I 529は内面に墨書をもつ皿で、「困難…」と読め、その内側は塗りつぶされている。

I 530は土師器炮烙。口縁端部が帯状に肥厚する。型づくりとみられ、外面には離脱剤の雲母片が多くみられる。内面の底部と外面全面に煤が付着している。

I 531~I 543は陶製の灯火具。I 531~I 537は灯明皿で、口縁端部から内面側が施釉さ

近世の遺跡



図36 近世の遺構 縮尺1/400

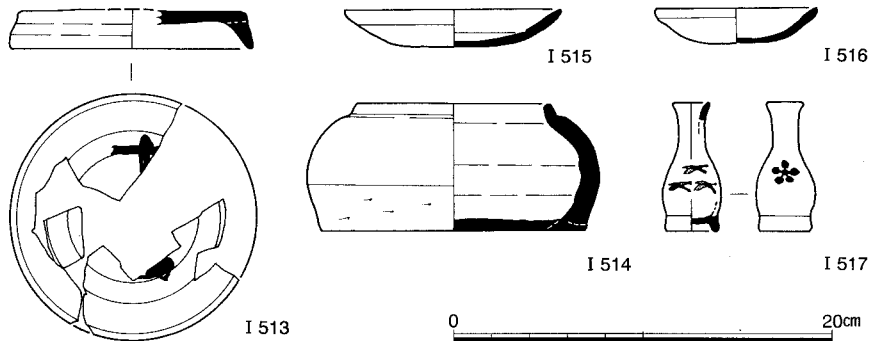


図37 S X 1 出土遺物 (I 513・I 514土師器),
S X 2 出土遺物 (I 515・I 516土師器, I 517染付)

れる。I 536が灰色の胎土と釉であるほかは、いずれも黄白色系の胎土と釉である。外面の調整は横撫でを基調にしながら、底部周辺の回転篋削りのおよぶ範囲によって、器体中位にまでおよぶ (I 531～I 533)、底面のみ (I 534・I 535)、削り調整無しで回転糸切り痕残る (I 536・I 537)、の3者がある。また、I 532・I 534～I 536は、内面に重ね焼きのための小さな粘土粒が2～3点残る。I 531・I 532は口縁の外周に煤の付着が著しい。I 538～I 541はいわゆる灯明受皿。いずれも内面は全面施釉で、黄白色の胎土と釉である。外面は、底部周辺が回転篋削り、それ以外を横撫で。受け部には浅いU字形の切り込みが入る。I 542は脚付の灯明受皿。底面以外は全面施釉で、胎土や色調は灯明受皿に同じ。I 543・I 544は秉燭。I 543は中実の短脚付きで、灯明皿と胎土や色調を同じくする。I 544は灰色の胎土に茶褐色の釉がかかるもので、底部には回転糸切り痕が残る。以上の灯火具類のうち、灯明皿・灯明受皿類については口径6～7 cmまでに収まる小型品しか認められず、19世紀代以降の製品が中心となるものと判断される。

I 545～I 550は陶器各種。I 545の小皿は、胎土や釉調が灯明皿と同じ黄白色系で、内面に黒色の錆絵で草木文を描く。底部露胎で回転篋削り調整する点、内面見込みに粘土粒三点の重ね焼き痕がある点なども灯明皿と共通し、同一産地とみられる。I 546・I 547は刷毛目文の椀。I 546は、底部周辺が露胎で、器壁も薄く文様も粗雑である。一方I 547は暗赤褐色の胎土に全面施釉されている。I 548は椀の底部。白色の精良な胎土で、内面は淡黄白色の施釉で錆絵による楼閣山水文が描かれる。底面中央に円形の浅い凹みがあり、その脇に「十吉」の刻印がある。こうした特徴は肥前産の京焼風陶器と共通し [角谷92]、本例も該当する可能性がある。I 549は御神酒徳利、I 550は仏飯。ともに底面以外に暗緑

近世の遺跡

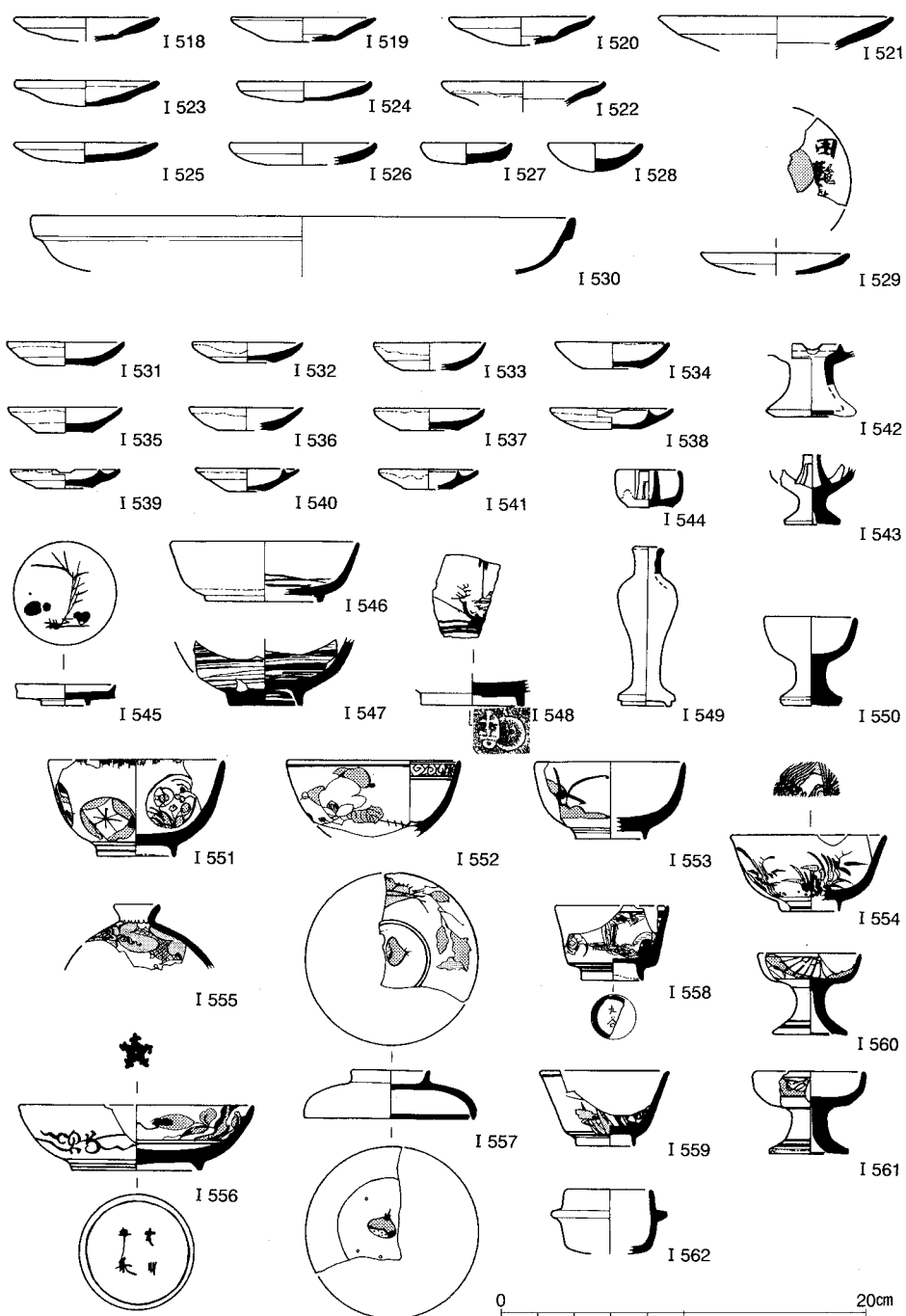


図38 灰褐色土出土遺物(1) (I 518～I 529土師器, I 531～I 550陶器, I 551～I 562染付)

色の厚い釉がかかる。胎土は黄白色で灯明皿などと共通し、在地産だろう。

I 551～I 562は磁器染付。18・19世紀代の各種のものがみられるが、残りは良くない。I 555・I 558・I 560は色絵で、朱色に絵付けされる。I 562は羽釜で、磁胎に透明釉がかかるのみで文様をもたない。実用品ではないだろう。

I 563～I 566は、外面に鋭い金釘状のもので刻書する陶器。これまで病院構内では、幕末の歌人大田垣蓮月が自作の和歌を刻書した陶器である「蓮月焼」がまとまって出土しているが〔浜崎・宮本87, および本年報第3章〕, これらもそれに該当する可能性が高い。とくにI 563の猪口は、内面に厚い淡緑色の釉, 外面を葉脈状の突線で装飾し, 「・いふ月よ／蓮月」の刻書が読みとれる。I 564は、外面に淡茶褐色の錆釉がかかる急須の口縁部, I 565は内外両面に淡黄白色の釉がかかる小皿, I 566は内外面とも透明釉がかかる器種不明の陶片で、これら3点の刻書は判読できないが、特徴は蓮月焼と共通している。

I 567・I 568は、それぞれ磁器の散り蓮華と煙管吸口。構内遺跡での出土例は少ない。

I 569・I 570は、素焼の土製の型で、いずれも原型を粘土板や粘土塊に押し付け転写したものとみられる。I 569はおおぶりの葉を描くモチーフで、背面は削って平らにされているが、何に用いた型か不明。I 570には魚が表現されており、その面が平らに整えられていることから、2つを向かい合わせに用いて魚形の土製品を製作したものとみられる。

I 571は青銅製の煙管雁首。ラウに用いられていた竹管が残る。火皿部は厚さ1mm強と厚手だが、それ以外は薄い青銅板を曲げて製作している。

I 587～I 591は軒瓦。I 587～I 590は軒棧瓦の瓦当部分で、I 591はいわゆる菊丸瓦。図40-a～eは近世瓦の木口面に押捺された刻印。出土した近世の瓦は少量であり、瓦当部分がある程度残っているものや、刻印をもつものは図示したこれらの例のみにとどまる。

S D 8出土遺物 (I 572・I 578) I 572は土師器皿。見込みに圈線をもち、灰白色を呈する。灰褐色土のものにとくらべるとやや厚手といえる。I 578は陶器の刷毛目文碗。淡黄褐色の胎土で、内外全面が褐色と乳白色の縞状に施文される。

S E 16出土遺物 (I 573・I 574・I 577・I 580) I 573・I 574は土師器の皿と蓋。I 573は浅い丸底で、灰白色を呈する。I 574は落とし蓋状の栓で、つまみには紐穴が穿孔されている。I 577は灯明受皿。口縁端部から内側は全面淡黄緑色に施釉。I 580は磁器染付の碗で、外面に二重線による網目文を描く。

S E 20出土遺物 (I 575・I 579) I 575は灯明皿。黄白色の胎土と釉調をもつもので、外面の口縁周辺には煤が付着し、内面に小さな粘土粒2点が残る。底面には回転糸切

近世の遺跡

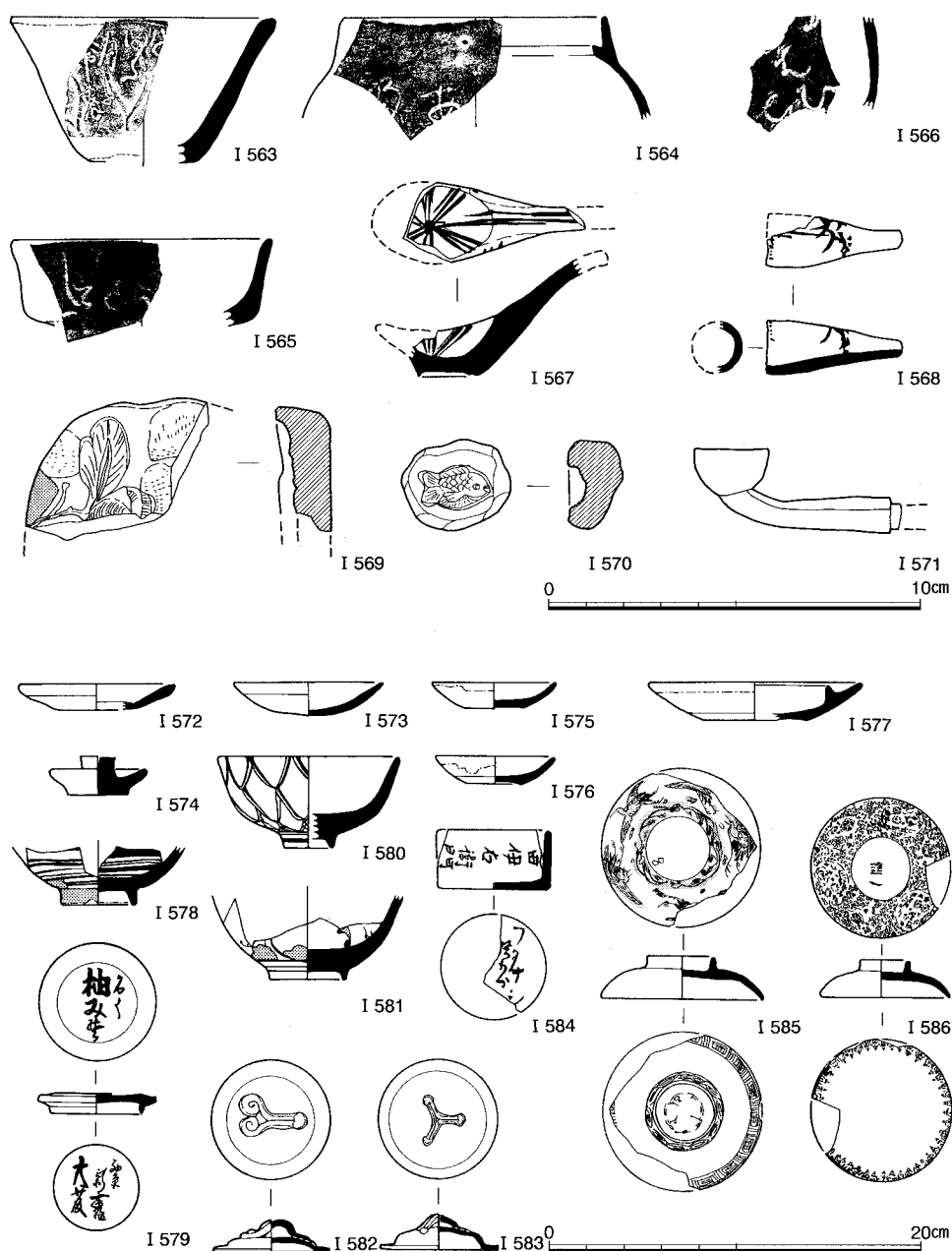


図39 灰褐色土出土遺物(2) (I 563～I 566陶器, I 567・I 568染付, I 569・I 570土製品, I 571青銅製品), S D 8 出土遺物 (I 572土師器, I 578陶器), S E 16 出土遺物 (I 573・I 574土師器, I 577陶器, I 580染付), S E 20 出土遺物 (I 575・579陶器), S D 1 出土遺物 (I 576・I 582・I 583陶器, I 584～I 586染付) I 563～I 571縮尺1/2

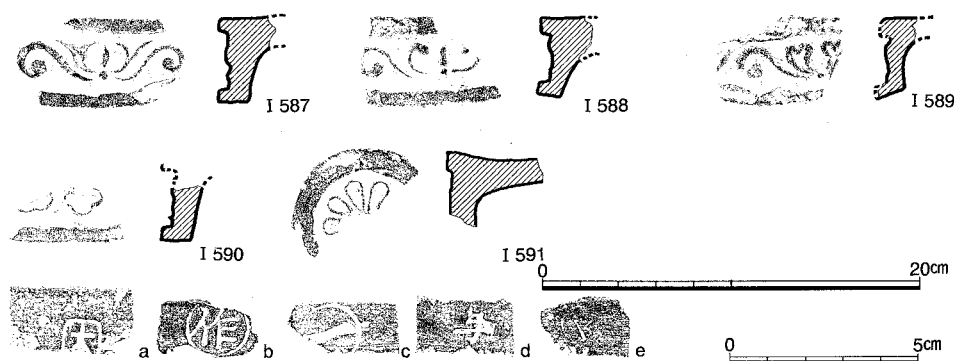


図40 近世瓦と刻印（いずれも灰褐色土出土），I 587～I 591縮尺1/4，a～e 縮尺1/2

り痕が残る。I 579は蓋で，外面のみ施釉。朱書で外面に「名代／柚みそ」，内面に「仲京／新京極／大菱」とあることから，販売用の柚味噌容器の蓋であったとわかる。

斜面堆積層出土遺物（I 581） I 581は磁器染付で，いわゆる「くらわんか手」の碗。斜面堆積層からこうした遺物が出土することより，それを埋積させている灰褐色土が18世紀後葉以降の堆積であることが示唆されよう。

S D 1 出土遺物（I 576・I 582～I 586） I 576は陶器灯明皿。I 582・I 583は素焼きの蓋で，薄い粘土円盤を凹型で成形したものとみられ，布目や指頭の圧痕が著しく残る。I 584～I 586は磁器染付。I 584は小型の段重とみられ，側面に「…田伊右衛門…」と釉書さされる。底部は露胎で墨書があるが，判読不能。I 585・I 586は蓋。I 586は外面に型紙刷りの鹿子文様が濃い藍色で絵付けされ，明治期以降に下る製品とみられる。

8 小 結

(1) 遺構の変遷について（図41・表5）

遺構出土遺物の年代的なまとまりからみると，一帯での土地の改変をとまなうような活動には強弱の波があり，いくつかの画期が想定される。ここで遺構の変遷を簡潔にまとめ，文献記事から想定される活動者達や出来事との関連についても考えておきたい。

弥生時代前期 量的にまとまる最古段階の出土資料は弥生前期末の土器であり，この時期を第一の画期とみなす。今回は土器棺墓のみの発見だが，近接して居住地があったことは間違いない。西南方150mのA O 22区に検出面の比高差3.5mで水田遺構があり，生業活動の管理に適した居住地選択が，水稻農耕開始とともに本格化した状況がうかがえる。

奈良時代（8世紀） 次いで8世紀中葉を中心とした奈良時代の資料がまとまり，第

小 結

表5 調査地関連年表

	主要な遺構・遺物	包 含 層	関 連 事 項
弥生時代	SK9・13~15	黒褐色土	
古墳時代	須恵器・埴輪		
(前)			
8世紀(中)	SK5・10~12・16・17,SD25・60・62・63		
(後)			
(前)			
9世紀(中)			
(後)			吉田社・吉田寺創始
(前)			
10世紀(中)	SK6・8,SD12・13・16・24・56・61		
(後)			
(前)	SD55		
11世紀(中)			1077法勝寺建立 (以後六勝寺造営)
(後)			
(前)			1118~白河北殿造営
12世紀(中)			1151福勝院建立
(後)			1156保元の乱
			1199浄蓮華院建立
(前)	SD33		
13世紀(中)	SD19	茶褐色土	
(後)			
(前)	SE5		
14世紀(中)			1337吉田定房吉野退転
(後)			
(前)	SD11・53・54, 不定形土坑		
15世紀(中)			1468吉田郷焼き討ち
(後)			1492吉田社殿再興
(前)		斜面堆積層 段差内堆積層	このころ「吉田構」
16世紀(中)			1533浄蓮華院退転
(後)			
(前)			
17世紀(中)			
(後)			
(前)			
18世紀(中)	SX1・2,SD8	灰褐色土	
(後)			
(前)	SE1~4・6~30		
19世紀(中)			1862~70尾張藩邸設置
(後)	SD1		1887三高設立

2の画期となる。方位を大きく西に振る小規模な南北・東西溝は互いに直交するような位置関係にあり、それに囲まれた調査区東南部で遺構がまとまることから、何らかの土地区画を示す遺構の可能性もある。周辺では、北東100mのA T 27区で堅穴住居2棟、西南方のA P 22区やA O 22区で掘立柱建物や井戸がみついているが、いずれも遺構密度は薄く、この時期の遺構は広域にわたり散漫に分布する傾向が強い。したがって、郡衙や駅家などの計画的施設ではなく、「里」「郷」ないしそれ以下の単位にかかわる集落と想定されよう。

平安時代（10・11世紀） 10世紀中葉～11世紀前葉に南北・東西方向の大小溝群が掘削され、第3の画期となる。とくにY=2250～2260の範囲に南北溝が集中し、重要度の高い境界の存在が想定される。なおこの境界は、南方100mのA P 25区においてもその延長とみるべきものが検出され〔難波89a〕、中世以後も位置は継承されている。調査地付近に「古若狭海道」を想定する主張もあるが〔足利83〕、路面や側溝は確認できなかった。一帯に関しては、吉田社をはじめ、神楽岡周辺での葬送や吉田寺の存在が文献記事で知られ、9世紀後葉以降継続的に開発の手が及んでいた。とくに吉田社は、元来藤原北家支流の山陰一族の氏社として創始されたものが、一条朝（986～1011）以降急速に発展し、藤原氏の氏社として藤氏長者の管領下に置かれるようになったとされる〔並木82〕。ここでの溝群も、そうした展開を反映した開発と土地区画の発生を示すものであろう。

鎌倉時代（13世紀） 12世紀後葉～13世紀代に再び南北・東西方向の溝が掘削され、第4の画期となる。南北溝は、S D 19をはじめ規模的に大きくないが、幾度かの掘り直しを想定させるように複数条にわたることが特徴となる。また東西溝S D 33は、それまでにない大規模なものであった。この時期は、藤原北家勸修寺流の吉田経房が正治元（1199）年に菩提寺となる浄蓮華院を建立するほか、「吉田南亭」「吉田園領」「吉田角家地」など勸修寺流吉田氏の邸宅や所有地の存在が所領処分状に見え〔中村直41〕、一帯の活動者の主体が知られている。しかし、本部構内の一部や医学部・病院構内を中心に13世紀代的大量廃棄遺構が頻繁にみついているのに対し、本調査区では遺構や包含層中からの出土遺物が量的に乏しく、活動の中心地とは距離の隔たりを感じさせる。

室町時代（14・15世紀） 14世紀後半以降15世紀前半代を中心に、濠状溝の掘削や段差の造成など調査地の歴史上最大の土地改変が実施され、第5の画期となる。遺物の量や種類も豊富で、溝で囲まれた内側での活発な活動が想定できる。構内遺跡全体では、14世紀後葉以降は遺構・遺物の検出量がむしろ減少傾向にあり、建武4（1337）年における勸修寺流吉田氏の氏長者吉田定房の吉野退転など、南北朝内乱に帰因する荒廃を反映する状

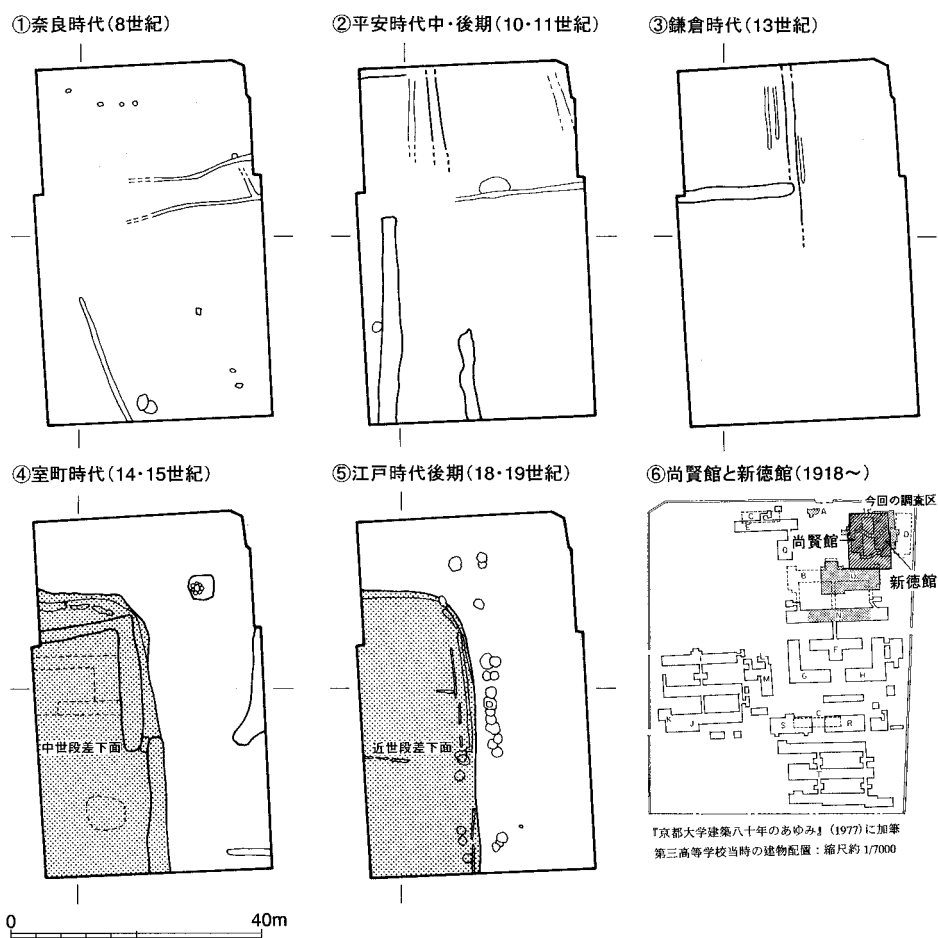


図41 調査区主要遺構の変遷 ①~⑤縮尺1/1200, ⑥縮尺約1/7000

況にある。それに対して今回の成果は年代的にずれ、むしろ南北朝期以降にピークを迎え、応仁の乱を契機とした廃絶がうかがえる。よってここでは以下の2つを想定しておきたい。

第一は、浄蓮華院の衰亡との関連である。『山城名勝志』『京都坊目誌』では、調査地の約300m西方の医学部構内北半に位置を比定しており、その一帯での遺構・遺物の検出状況は、14世紀中葉までであれば、それを支持している。しかしながら、浄蓮華院の領地そのものは、蚕食され耕地化しながらも、16世紀前葉に最終的に吉田社に押領されるまで存続している。こうした歴史的背景と、遺物の示す年代観、蓮華文を象嵌した金具の存在などを考慮すると、今回の調査地についても、余命を保っていた浄蓮華院の東北隅の一画に相当している可能性が指摘できよう。内部にパッチワーク状にみられる畝や植栽の区画は、

あたかも吉田社や郷民により蚕食され荒廃していった状況を示すかのようである。

一方で、第二に、応仁の兵火による焼失後に山上へ遷座する前の吉田社については、旧社地を現総合人間学部構内南半に比定する説がある〔福山77〕。位置的にややずれているけれども、今回の濠状遺構はこうした出来事と年代的に対応し、山上遷座以前の吉田社に關係する施設であった可能性も十分あろう。ただし、出土遺物にはそれを裏付けるものが見られない。むしろ、総合人間学部構内西半から医学部構内東半にかけての一带で、特異なオオヤツカサ土器の一括廃棄など、それにふさわしい出土状況を認めることができる。

江戸時代後期（18・19世紀） 中世後半期の土地区画をそのまま継承しながら、確実に18世紀以降には、パッチワーク状の不統一な畑地の単位は解消され、全域が野壺と柵列で構成される農地へと変化する。大根やかぶらなど商品作物の生産地となる近郊農村の景観が確立したこの時期を第6の画期とする。18世紀前葉の吉田村の状況をあらわす「吉田社周辺絵図」からの復原によると〔浜崎83b〕、今回の調査地に相当する場所には南北に境界線がはしり、西半が畠地、東半が地下屋敷とされる。Y=2260付近に段差と野壺列が存在してそれ以西に柵列が密集している発掘調査の結果と良く対応するといえよう。

尚賢館と新徳館（1918～） 上述の都市近郊農村の景観は、調査地北側の現本部構内に、幕末の文久2（1862）年から明治3（1870）年にかけて尾張藩邸が設置されたことにより、大きく変貌したものと推測される。ただし今回の調査地については、段差を埋積させている灰褐色土中に含まれた銭貨の紀年が最新で明治17（1884）年であることから、明治維新後もしばらくは畠地が存続した可能性が高い。最終的には、明治30（1897）年の京都帝国大学設立と現総合人間学部構内への三高の移転、という出来事を契機に地均しされたのだろう。西側の医学部構内においても、明治29年に医科大学用地として買収されるまでは、中世以来の棚田が残存していたものと想定されている〔五十川ほか95〕。

『京都大学建築八十年のあゆみ』（1977年）によれば、調査地には、まず1897年に木造平屋建ての生徒控所が建てられたが、その後取り壊され、大正7（1918）年に尚賢館と新徳館が設けられた。これらは三高創立五十周年記念の建物で、尚賢館は大正天皇即位御大典用第二朝集所の建物が下賜移築された本格的な和風建物、新徳館は武田五一設計による木造とコンクリート併用の瀟洒な2階建て建物であった。発掘調査では、表土直下でこれらにともなう1m四方の坪基礎が規則正しく並んで検出されたほか、尚賢館の屋根に吹かれていたスレート材、学生や教官の所持品とみられるインク壺や硯などが多数出土し、学校用地へ変貌した調査地のありようを出土資料からもうかがうことができた。

(2) 出土遺物について

弥生前期の土器 弥生土器は、古代以降の遺物と混在していたため純粋な出土状況とは言えないけれども、特徴からみて前期新段階にほぼまとまるものと判断できる。なかでも、多条の篋描沈線文が文様の中心となるだけでなく、それが複数帯化しているものがみられる点、刻目をもつ貼付突帯文も多条化している点は、前期新段階のなかでもより新相の特徴であるといえる。新段階のまとまったものである北部構内のB A 30区（追分地藏地点）出土資料にこうした特徴は認められないことから、今回の資料は構内遺跡出土の前期土器のうちでも最新段階の一群ととらえられよう〔伊藤99〕。なお、伊勢湾地方東岸部を中心に特徴的にみられる「内傾口縁土器」が、西方100mのA Q 23区に続いて今回も2点出土した。このような条痕文土器の特定器種が近接した地点から相次いで出土する点は、地域間交流のみならず一帯の活動集団を検討するうえでも、注目すべき結果といえよう。

古墳時代の須恵器と埴輪 古墳時代の包含層や遺構は存在しないが、5・6世紀代に比定される須恵器片や家形埴輪片が出土している点に注意される。総合人間学部構内では、西南方約200mのA P 22区で方形墳、その南側のA O 22区では形象埴輪の出土も確認され、「吉田二本松古墳群」の存在が推定されている〔五十川・飛野84, 伊藤99〕。今回の調査成果は、吉田山西麓一帯にひろく古墳が分布し、そのなかに埴輪をとまなうものが少なからず存在する可能性をあらためて示したといえよう。

奈良時代の土器 出土量は多くないが、8世紀中葉ごろの各器種が揃っており、調査地一帯が日常生活の場であったことがうかがえる。ただし、都城を中心に出土がみられる製塩土器が一定量含まれていることは注目され、この遺跡の性格の特異性を表すものかどうか、他の集落遺跡での実態と比較検討していくことが、今後の課題といえる。

平安時代の土器 南北溝S D 55から出土した11世紀前葉に比定される一括資料が注目される。これまで、京都大学構内遺跡の平安時代資料は10世紀代を中心としており、とくに本部構内以南では、この時期のまとまった資料はほとんど出土していない。今回は、土師器皿類を中心とする内容であったものの、編年的に貴重な情報を得ることができた。

古代・中世の瓦 濠状の溝S D 11・53からを中心に、平安中期から室町時代にかけての総計245点におよぶ軒瓦が出土した。これらの溝で囲まれた内側に瓦を用いた建物が存在した可能性を強く示唆する結果といえる。軒先以外の瓦については量的に多くないため、総瓦葺きの建物ではなかったとみられるが、今後周辺での調査に際しては十分に注意を払う必要があろう。軒瓦については、瓦当文モチーフだけでも軒丸瓦が23、軒平瓦が30に大

別され、種類の多さがまず注目される。また、巴文軒丸瓦（K C M22）と剣頭文軒平瓦（K C H30）が量的に主体となるが、このうちにもかなりの種類があり、ほかに楕円形瓦当の蓮華文軒丸瓦の一群（K C M16・18）と、偏向唐草文（K C H13）や連巴文軒平瓦（K C H28）も一定量存在し、もうひとつのピークをなす。少なくとも12世紀以降細々ながら建築物が存在し、14世紀以降に大規模化した様相がうかがえる。しかし、瓦については統一的に発注されたものというより、中古品も含めかき集め賄われたという印象が強い。

なお、巴文軒丸瓦と剣頭文軒平瓦については、詳細に分析されている大覚寺御所跡第二期瓦群と比較検討した結果、同范関係は非常に少ないと判明した。窺記号や刻印でも共通するものは稀であり、少なくとも工人レベルでは大覚寺所用瓦との接点を求め難いといえる。よって、大覚寺所用瓦と共通点の多い医学部構内の出土品とも接点をもたないことになり、同構内の建物とは造営母体が異なる可能性が、遺物から示唆されたことになる。この場合、勧修寺流吉田氏とト部氏を中心とする吉田社関連の集団との相違がまず想定されようが、今後地点別出土品の詳細な比較検討を待って、結論を下すことにしたい。

中世の建築金物 S D11から出土した建築用装飾品である「樽の口金具」については、発掘調査での出土報告は無く、中世後半期の金工品の貴重な事例を提供した。同様な装飾品は、中世の絵画資料中に描かれた建築物や現存寺社建築を中心に使用を認めることができ、今回それらとの類似から用途を判断した。とくに、吉田社境内に現存する「行事所」「直会殿」など、幕末期に建築された二×五間の木造建築にみられる長押の釘隠は、波状縁部をもつ青銅製リングと樽の口金具とを組み合わせたもので、頂部に装飾こそ残っていないものの、今回の出土品と構造的にきわめて類似しており興味深い。蓮華文状の銀象嵌をもつような装飾品が一般住宅に使用されるとは考えにくく、寺院や神社など特殊な性格を帯びた建築物の存在を視野に入れる必要があり、その解明は今後の課題としたい。

以上記してきたように、本調査区の発掘調査成果はきわめて多岐にわたり、多くの方々にさまざまなご助力をいただいた。とくに「樽の口金具」の材質は本学環境保全センターに分析していただき、X線撮影について文学研究科の森下章司氏の手を煩わせた。また、大覚寺出土品との比較を中心とした瓦類の検討については文学研究科の上原真人氏に多くの御教示をいただいた。末筆ながら厚く御礼申し上げます。

（補記）1997年度には、西側に隣接するA R24区の発掘調査（図版1-249）や、一帯での広域立合調査によって、掘立柱建物や瓦溜が確認されている。中世に濠状の大溝で囲まれる本調査区の西方一帯が、きわめて重要度の高い空間であることがあらためて裏付けられたといえよう。